

荒鷺

書道部創立 **30** 周年記念

荒鷺31号

福岡大学書道部
福岡大学書心会

巻頭詩

愛が遠ざかってく様な 豊かすぎる国で 生まれ育ってきたよ
小さな家を持つことも、人を信じることも、あきらめ生きてきたけど

明日は明日 なんとかなるさ 気楽に行こうぜ
投げやりだった 全ての愛を 今とりもどすのさ

未来の問題悩まされ 生き急ぐ国で 走り疲れた時も
夢を遠くて懂れて 本当の自由さえ 手にすること出来なくても

明日は明日 なんとかなるさ あせらず行こうぜ
遠回りしても自分の生き方信じ続けるのさ

人生に絶望した瞳も 悲しみに打ち砕かれた心も 今日限り投げ捨てて

ここに我部の機関誌であります「荒鷲」が、発行出来ますことは、部員一同にとって誠に喜ばしいことであります。今回の「荒鷲」は、創部三十周年記念行事の一環として発行されるものであり、一口に三十年と言っても、一朝一夕には成し得る事の出来ない伝統の上に現在の書道部は成り立っているものと考えております。

三十年という幅の広がりにより、物の考え方や、学生の気質の変化が叫ばれています。日頃、学業に専念する中で、その余暇を生かし、「書道」という共通の特殊性の追求を目指し、その中から人間形成や親睦融和を目指し活動してきた、そして、している心は昔も今も不変であると考えております。その、書道部の良き伝統の維持、継承と、時代に即応した運営と、それに基づくさらなる発展を目指し、遂行していくことが、現在、我々現役部員の使命であると考えております。

さて、現在の現役部員は、「部員相互の親睦融和をはかり、人間形成を目指すとともに書道文化の普及、書技の向上を目指す」という部目的のもと日々、活動していますが、今回、創部三十周年を迎えるにあたり、もう一度、初心に返って活動していきたいと考えております。

最後になりましたが、今回、創部三十周年記念行事が開催できますのも、書道部の創部および継持、継承に御尽力くださった諸先輩方や書道部をいつも暖かく見守って下さった部長先生、書技以外でも、色々と御指導頂いた赤木先生、学校関係者各位のご尽力の賜と部員一同心より感謝致しております。

今後とも、書道部の更なる発展のために努力していく所存ですので、今後とも御指導、御鞭達の程、宜しくお願い致します。

目次

巻頭詩	……	一
幹事挨拶	森 裕之	…… 三
目次	……	四
創立三十周年記念書道展作品	……	七
明日に向かって(記念植樹)	……	三五
特別 寄稿		
挨拶	福岡大学長 宮野 成一	…… 三九
書道部創立三十周年に寄せて	学生部長 山下 宏幸	…… 四〇
福岡大学書道部二十周年を迎えるにあたって		
	書道部長 小西 高弘	…… 四一
友人たちに	書心会会長 柴田 一夫	…… 四二
更なる飛躍を	常任幹事会幹事長 佐藤 慎介	…… 四三
座談会	赤木石掃先生を囲んで	…… 四七
外部 寄稿		
「赤木先生、今昔」	(菊池晚香堂前社長に聞く)	…… 五三
創部30周年記念を祝す		
団体優勝校佐賀西高等学校顧問	米倉 信義	…… 五四
「喜」福岡大学長賞 南筑高等学校二年	末安 裕子	…… 五五

「喜」	九州大学三年 宗 義幸	…… 五六
「最近思ふこと」	西南学院大学三年 山路 誉子	…… 五六
「怒」	久留米大学二年 神代 義大	…… 五七
「私の人生」	中村学園大学三年 末綱ゆかり	…… 五八
「喜」「怒」「哀」「楽」		
	純心女子短期大学二年 秋永由美子	…… 五九
「人生」	筑紫女子園短期大学二年 武田 美保	…… 五九
「人生」く光陰矢の如し		
	福岡女子短期大学二年 小桜 優子	…… 六〇
「笑顔でいることの大切さ」		
	西南学院短期大学二年 熊谷 妙子	…… 六一
「人生」	福岡教育大学二年 和田 秀作	…… 六一
「喜」	福岡女子学院短期大学二年 小川真喜子	…… 六一
書道研究		
「王羲之」	一回生	…… 六七
「米元章」	一回生	…… 六九
「張瑞図」	二回生	…… 七一
「呉昌碩」	四回生	…… 七三

書心会 会員 寄稿

「一期一會」 創立三十周年目の提言

四十三年度卒 原 博幸 …… 七九

「大きな心で、和を大切に」 現学生のみなさんへ

四十二年度卒 平井 晴彦 …… 八二

「土壌」 五十一年度卒 山村 昌次 …… 八三

「車と伴に」 五十四年度卒 河野 清文 …… 八五

「書道部三十歳の苦悩にこれから」

五十五年度卒 森田 健一 …… 八七

「小さな命が残してくれた愛」

五十五年度卒 原田 明 …… 九〇

「喜怒哀楽」 五十六年度卒 重松 裕人 …… 九一

「青春」 五十八年度卒 志岐 直樹 …… 九一

「職場にて思うこと」 五十七年度卒 床嶋 俊一 …… 九二

「失敗、過ち」 五十七年度卒 丸田 俊和 …… 九三

「組織人考」 五十四年度卒 岩野 高利 …… 八四

書道部 員 投稿

『人生』編 …… 九七

『Oマン』編 …… 一七

『喜』編 …… 二四

『怒』編 …… 一五

『哀』編 …… 一六

『楽』編 …… 一九

『その他』編 …… 三〇

年間行事(この一年を振り返る)

春季合宿 三年 原口 磨美 …… 三七

学術文化発表週間 一年 亀元美奈子 …… 三八

夏季合宿 一年 渡辺 太郎 …… 三九

第三十回西日本高等学校揮毫大会 三年 礮本 孝洋 …… 四〇

創部三十周年記念式典・祝賀会 …… 四一

書道部三十年の歩み (年表・表彰者) …… 四三

事務局だより(書心会と書道部と) 事務局長 山村 昌次先輩と共に …… 五〇

編集後記 …… 五一

広告欄 …… 五一

書心会規約 …… 六一

福岡大学学術文化部会書道部規約 …… 六五

現役部員名簿 …… 七一

書心会会員名簿 …… 八六

平成二年度役員名簿 …… 八八

學而不思則罔 思而不學則殆
為學而愈進
藍田

特別贊助作品

殿村 藍田 先生 日展理事（福岡大学所蔵）

鸞不翔 鳳不舞
棘不刺 刺不傷

特別贊助作品

赤木 石掃 先生 福岡大学書道部講師

武藝善選
計書選
身是
拙知惟旦
願海
休日卻喜
孤舟以去時
連袖一經兼
却宋夫造
千秋雅居清
匡妻比恨皆
子道慈恩
長作
壽元

4年 宮崎 隆司

維新維新...
東也...
持...
此...
性...
那...
後...
前...
把...
據...
身...
之...
那...
身...
你...
湖...
吾...
我...
吾...
吾...
吾...

4年 奥野 亜弥

江...
原...
分...
草...
示...
此...
給...
平...
心...
前...
同...
可...
可...
味...
此...
此...

3年 入江 睦博

暮往海南邊
秋開半夜輝
鯨衣洗鉢水
犀獨照燈和
高興今諸國
星河共一天
兵安却四日
秋便舊房前

大治寺

四年 石井 大治

本寺... 四年... 石井... 大治... 四年 内野 久修

四年 内野 久修

藻々青不審二
娘常為淚何如
歎情倫直等
亦安計
倫如之應在
道企逢高東音
動却家美遠
姑如傷心
勝美遂和身
雖而寧能故
常為及側
此志佳
佳代

劫後身世道新 福慶字名聖太平 救我不開
 開仰 說浮屠極有天機 在松翠雲香月夜
 佛德慈悲 佛性本光 好修心通 曰 肩 靈 行 矣

四年 中倉 幹人

眼毒天日年 遙歷刻天河 洗甲兵天 嘉斯冬日 頌大
 同著个忘年 所以他處 我佛同男 弟是亦女 形逢
 詩來合身 卷堂 緬入音 相摩 既中 禍平 始代 作 臨
 跋中 之 宋 添 換 字 夫 病 年 亦 予 同 相 存 矣 最 佳 心

四年 山本 佳正

越中 初 曾 能 戰 江 上 送 暉 梳 南 渡 去 東 寇
 西 陵 自 送 瀉 湖 軍 城 垂 苦 柳 應 葉 磨 羞 面
 閩 里 稀 花 兒 舊 夢 夢 共 舊 夢 夢 劉 長 卿 詩 聖 主

四年 永友 浩二

濯玄流逢昌運率渴誠心為國

造石窟恭奉皇恩有資未業

裕之

三年 森 裕之

江一西身似成年東
香覽風故語是計觀
寂靈居水畔秋輝遠
寂然水汎一柱古流
古感靈輝上道碑此
碑水心八鏡是足同
無故正通靈十未正
古二華靈皇宮平十
草世韻微越澤宮舞
平成花集鴻香版香
竟草光輝似在香細
殿天東如丁六世經
元定水心八鏡是足
基統靈草靈宮是基
吹靈洞境初靈東山
法見淨靈龍宮佛出
是少山細四碑下足
四便殿前說小史靈
探泉而龍山而西瑞
天山石壁秋紅橫香
樹生不曉氣靈廣水
見幽亦說下吹靈來
似小古鏡鏡鏡仙行
九臥龍山無九子殿
觀洲隱說天是幽而
如此是今夕靈說靈
夫謂此吹龍天靈天
細靈洞靈龍靈靈合
川一龍修築一龍無
子一龍靈靈女是九
明此一吹靈靈百
龍一龍一龍一龍
外此是八龍一龍
野無龍是九龍
向身是九龍

三年 堂脇 裕志

與握古書回岸情法明學黨初相慕濯飲池心亦易奮勵逢
鶴雲中信士宜在瑞那一願遊業未名業何深至法其區無念心
可於一燕終不易在駕躬勸身漫仕漫仕平定方花多矣身亦有
財少有伴解純馬是老學瑞表漫存只三聯吳三徑資 環

三年 宇野 環

雜物身外 是名僅存 未先小印 西吳精未道
公勸漁部 公愛長嗜 世去冰絲 氣毛蘇死 歌行春
仇德優彰 未道向慶 公嗜 甚不食 居南 俊英

三年 上村 俊英

煙飛濤溢 飛巖吼颶 風動地
星斗 老漁負鉤肩 美佳

三年 藤井 美佳

朱閣遙柱 迤湖明白 芳島 妙史 倣以 橋下 龜也
晚蒼 瓦淡 吳柱 柱過 橋岸 晚節 先生 道純 孤歲
空 惟 竹 相 娛 租 才 杜 牧 真 堪 劉 石 庵 孝 洋

三年 續本 孝洋

最稱弘健少早歲芳芳居年老從僧
 律生知解伴言衲衣求壞帛野飯拾
 香齋章句無亦斷時中學子餘
 成美

二年 立石 成美

第年夏月下蓬臺竟東來半種
 歲物檢王龍雷電遠雲那惟
 人寃空極同視萬世風浪思許
 美和子

三年 江川 美和子

所立湖上厭是去湖音多醉非
 實出 送漸江河沙時在塵台
 飛亂山秋風萬古是文士
 美

三年 加藤 初美

西園雅集李自將幼者小者將軍為月色在空物竹木在竹以妙絕者
 人而人物有甚各得其形自林下舍無一點在快者不若修筆也其為
 情多道服起笔而書者為不故卷屏托中紫承承而望觀者為多者即情
 有衣接之氣而應者為其日蔡之石相持而斷者為李林林後月也書者
 單節竹書其官衣服初者乃書口字也衣衣色替法有 王其也

三年 泉 直美

考過三千五百千 意遠能結伴 日緣月夕 移步上學 跋坐

一雁回誌 五表標臨 樞石鼓 頤都表戲 石出蘭一字矣

中日 錦 錦千 古 意 不 淡 携 去 雲 綫 却

二年 渡辺 太郎

經伏波神祠蒙信有路上意讀漢墨磨磨肥開藥溪霧霧西懸懷人秋遺像法自
 眉霸閣指東王略史智澤 疾鄉 園 驛 石 柱 勉 力 盡 矣 洲 一 功 名 東 魏 思 馬 以 游 歸 津
 海道與金見婦有瓜葛又嘗分舟濟家弟嗣其國未竟書會于新 病癘 腸 亦 多 作 勞
 得見海濱書教亦 屏 指 皆 之 都 不 成 字 以 持 到 清 南 見 余 故 書 亦 亦 之 柯 允 歸 黃
 魯是書也 建中靖國元年青乙亥新州以從水漲至堤上深一尺

久美子 訓

二年 川波 久美子

本堂... 郭興... 郭真... 本郭... 慎太郎

二年 原田 慎太郎

出方... 懼... 先... 光子

二年 平田 光子

淨... 和... 株... 村... 利弥

二年 牧 利弥

采林伐鼓酒如川秋社銀多表錢林
道升平長官好五風十雨更年白沙詩
日之佳靈以勝定小命州山人五之中法目

二年 福島 幸治

德之千石和區亦衝金律白柳柳西柳柳古
年不必定入並隨隄一頃片果地紅誰家
美人招尔下屏風中直道金蓮花皇子出

三年 肥村 豐子

爾有言為人始物係新中渡上海時修柳道洋喜波
漢忘用器謂神且欲碎未敢並管地地何村林林維若
園珍刀剪果一秋落皆果若相皮與山理皆之步
一歲書皆柳果一行左在平落最奇會果抄相古初淡與
統附林河此有浙進在能吃死者者而初年無信軍起
世田功掃皇落屏高集寺柳官名消散居元將味長格六

李伯時幼唐小李將軍為百
色泉石雲物木花竹秦史

二年 山下 秦史

未成曲調先有情
弦之掩抑聲
平
生不得志
低眉信手續彈說
畫心中
名
浪
華
一
轉
地
慢
燃
林
後
地
考
評

二年 中村 博

望風解印綬去其器舉秦莫不厭寒衆議先
祿勳滂執而讓者曰若范孟博者豈宜以公禮之
令成其去就之名得無自取不優之議也
陽子

二年 山村 陽子

昔年事... 襄社... 志... 江湖...
人能... 仙... 桃... 源... 傳... 口... 不知... 漢... 嘉... 然... 不...
... 名... 才... 門... 舞... 物... 出... 二... 猶... 笑... 學... 三... 世... 仙... 前... 明

一年 大測 高明

下... 多... 高... 越... 給... 半... 是... 寫... 沙... 湖... 通... 越...
分... 部... 任... 雜... 警... 音... 曉... 郭... 室... 歲... 中... 者... 山...
鳥... 雀... 林... 存... 遊... 離... 亦... 逐... 日... 至... 中... 心... 昭... 博... 古

一年 織方 昭博

水... 光... 接... 天... 藍... 一... 筆... 之... 所... 如... 陵... 百... 頃... 之... 茫... 然... 浩... 浩... 乎...
如... 憑... 虛... 御... 風... 而... 不... 知... 其... 所... 以... 飄... 乎... 如... 遺... 世...
獨... 立... 羽... 化... 而... 登... 僊... 於... 是... 飲... 酒... 樂... 甚... 善... 則... 然...

一年 堀内 善則

可以遊目騁懷之極視聽之娛信可
樂也夫人之相與俯仰其或取諸懷抱
悟言室之內或寄所能放浪 其臨

一年 川上 貞

六徑蔭宮槐然陰多綠苔應門

但迎掃畏有山僧來

芳和書

一年 佐野 芳和

青芝草 表記卷五生升 立梁維一箇江湖
人遊仙傳仙境桃源陽修口不知皇漢意知不
驅徑秀才門雞狗少仙二種亦守之仙八九
陰維

一年 大倉 隆雄

尾星明卷：割日海之素髮於時年
羽肩誰介長公深帶州故國同為生
天風持贈殷勤意還之巾

一年 龜元 美奈子

奉命率領金殿開且將園局若雜細主額

爰寒鴉色猶帶昭陽日影未

一年 中村 友理子

松蘿白晚三為夜過看危鳥林百廢心憶
歸僧月六蓬蒲樹底三五乃對拍雪抱
百言千齋園坐移弟綠蘇

瑞圓 喜久

至能不却眼血白既籍何於一平生初映筆
家甘寒其內起老我自先以陸期于海移在
雲卧指天河洗甲兵必盡亦緣未多 桂子

一年 小田 桂子

各有其形中有林下金書無一點塵
埃多素為修業也其鳥悟為道服在
筆而書者為不故先生佛 枕中 智子

一年 佐々木智子

夜雨鳴廊到曉懸相看
不歸以僧種
泉枯石燥溪潺湲
山川光暉爲我妍
野僧早
早饑不能飽
晚見寒溪

美津子

一年 中山 美津子

維熊維罍實柿 捕魚易錢而奇囊
更拈魚換酒飲於泉我
持盞水不掩雜處
席餘晚必起者
有晚者坐於
鞋走 呼裡吟

一年 竹井 瑞穗

麗日福明瑞氣開

43年度卒 徳久 政機

太古

四十四年度卒
前崎 恒春

同悦
飛琴

43年度卒 原 博幸

不樹千
 年

三十九年度卒 西 隆義

又同十雨

是日五風十雨 仙空

四十三年度卒 平井 晴彦

常思言殿須烟至六... 此... 乃... 收應是到壬... 仙空... 若... 仙空... 仙空...

有唐詩於
房
大國史能厚卿
仲 廣義平國經書後意 卷其間世洲 抄身

四十六年度卒 江上 隆行

雲林有在石
物
爾計必物天

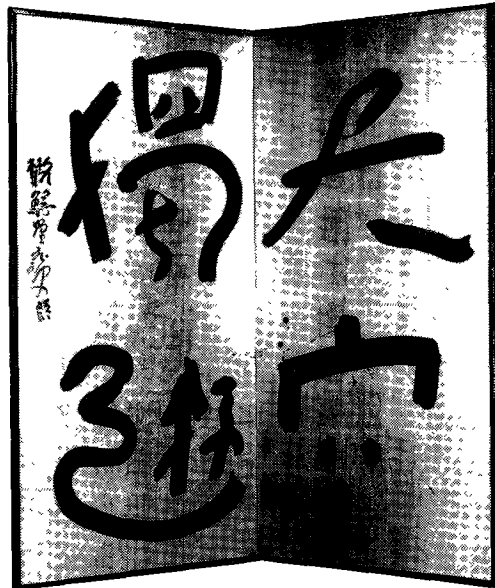
四十六年度卒 横澤 順

千子
海空

四十九年度卒 古川 詠梨



51年度卒 山村 昌次



51年度卒 荒尾 記史朗

青嶺北郭
 白石遠去成此地
 遂為正初河
 所云遊子
 竟落故人情
 手自銘玉蕭
 班馬鳴
 送友人
 李白詩
 竟志也

五十三年度卒 堤 寬

翰墨
 寫書
 辨賢
 中稟
 命

五十三年度卒 高倉 潔

曾於青史見世皇今日親
 天令過古蹟詞表有唐之德
 我命初定志在
 辨賢中稟命
 銅在傳信志
 著書中見世皇
 信烟後於將新
 皇德守也

五十四年度卒 米島 邦章

58年度卒 中村 純一郎

我嘗江永福源
官進直送江海關
道湖張了又夫寒
尚方妙在在中冷
菊畔石盤他古
走出法道法誠至
絕法望佛國江
南江北青今白霧
君快尋詩詩之侯
昔名者詩、微亦至
吹和子仙野雲空
矣尾未是時江月
初生魄三夏月落天
深正江心似有龍
飛仙在仙樓為
飛仙以心美哉非
凡人無物物江
石何江神見性
我願我願江神
巨廣中不悔如
在江江江江江

59年度卒 石橋 正隆

長新嘉在錄 六月志和錄 新著 著在月
 入錄 取錄 取錄 取錄 取錄 取錄 取錄
 杜陵 著 著 著 著 著 著 著

五十五年度卒 櫻井 典

漢 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志
 入 杜 陵 著 著 著 著 著 著 著 著 著 著 著 著 著 著 著

五十五年度卒 高橋 峰生

丹 郎 尚 始 日 初 時 傳 子 公 一 前 人 成 者
 為 一 宗 者 盈 月 言 全 生 報 哭 一 揮 袖 堪 泣
 宋 逸 只 十 年 不 言 冷 如 秋 花

馬力健知遊紫水
稽聲柔質到江南

五十八年度卒 滿生 憲親

吾血存摺

五十九年度卒 江越 はつえ

江亭酒醒春已面，慵衣卻冷蟲。喧坐簾疎月，到床鐘。
懼離興急，堪溪醉欲長，謝休。應先讓，隨君河路，霜結
依香。啼別軒，對眉晴樹，更兼西色淡，台外重流。
佳水志。

六十年度卒 藤代 裕之

明日に向けて(記念植樹)



特別寄稿

挨拶

福岡大学長 宮野成二

日ごとに冬気深まりゆく季節を迎え、このたび福岡大学書道部の機関誌「荒鷲」三十周年記念号の発刊にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

さて、書道は申すまでもなく東洋の代表的な精神文化ならびに文字を芸術の域まで高めた我々東洋人が誇るべき古典芸術であります。

書道部は、この「書道」文化の継承と発展に寄与し、さらに輝かしい伝統と数々の実績を築き上げつつ、本年をもって、三十周年を迎えることになりました。これもひとえに、部員の日頃の練習・努力はもちろんですが、よき指導者と皆様方の温かいご支援、ご指導の賜物と、心からお礼申し上げます。

ところで、大学の目的は、学問研究、市民形成のための一般教養および専門教育を通じて全人格的教育をめざすものにほかありません。しかしながら、この人格形成

は、大学の正課教育のみで十分には達成しえず、正課教育が果しえない固有の役割である学生の自主的な課外活動によるところ大であります。したがって、本学は、創立以来建学の精神のもと、課外教育活動の中心として「学友会」活動に力をそそぎ、学生の多面的な能力開発と豊かな人間性の育成に務めてまいりました。

書道部は、このような学友会活動の学術文化の振興に寄与する学術文化部会に所属し、現在その中心的サークルとしてその目的達成のため、日々活動いたしております。

おわりに、書道部の今後の活躍と、一層の発展を祈念し、私の挨拶といたします。



書道部創立三十周年に寄せて

学生部長 山下 宏幸

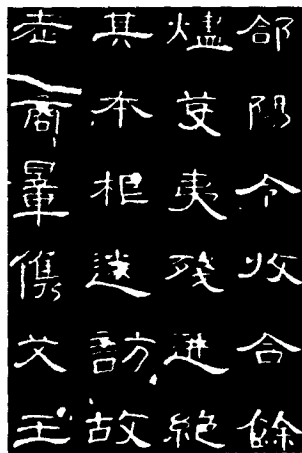
福岡大学書道部創立三十周年おめでとうございます。また、ここに記念行事の一環として、機関紙「荒鷲」の記念号を発刊されるにあたり、その意義と献身的な努力に対し、大きな拍手を送りたいと思います。

一口に三十年と言いますが、その間には言葉では言い表せない色んな苦勞と努力があったことと思います。顧みれば、昭和三十四年、付属大濠高校出身者が中心となって同好会が発足し、そして、翌三十五年には部員の努力が実って早くも部に昇格しています。その後の発展はめざましく、学外に数多くの入選作品を送り出し、西日本地区の書道文化の振興に多大の貢献をして参りました。

これもひとえに、真面目で礼儀正しく、学生らしい部員の日頃の努力はもちろんです。良き指導者と関係者の皆様方の温かいご指導・ご支援の賜物と、ここに厚くお礼申し上げます。

このように、部活動が発展し大きくなり、また歴史が

積み重ねられてきますと、ややもすると創立時の初心とか活動の本質を忘れがちになり、独創性や新鮮味を失なうってマンネリ化する傾向になります。どうか、この創立三十周年という一つの節目を迎えられたのを機会に、もう一度創立の原点に立返って将来を展望され、書道部の今後の発展にさらに弾みを付けられることを期待して私の挨拶いたします。



おめでとう

福大書道部二十周年を迎えるに当たって

部長 小西高弘

師範赤木石掃先生の指導の下で築いてきた書道部が大
学書道界に誇りうる財産は三十回を迎えた西日本高等学
校揮毫大会と、部員、OBの方々の県展、日展等の活躍
にある。これが福大書道部の伝統であろう。

しかし、これからの福大書道部は先輩の築いてこられ
た伝統をふまえながら、さらにそれを乗り越えていかね
ばならぬ。赤木先生の二十七年にわたる指導をたたえ、
さらに赤木氏の心をうけつぎながらも次の飛躍へと歩み
を進めねばならぬ。

書道部部員がどう飛躍していくのか、真剣に考えるこ
とが重要である。それには書道部が明確な目的意識をも
つことである。意志あるところ、必ず新しい道が開かれ
る。

日本が古代、中世に東洋思想を学び、近代に西洋思想
を学び、次代に向けて歴史は進んでいく。私は福大書道

部員に世界的視野に立って次代の新しい思想を創造する
思考を続けていく心がまえをもってほしい。

書心会会長挨拶

三十六年卒 書心会長 柴田一夫

安保改正による学園紛争が騒然としていた昭和三十四年六月に書道同好会として産声を上げて早いもので、もう三十年の星霜が流れその間会員の皆様は勿論、福岡大学、学分会、歴代の部長先生、赤木石掃講師また西日本揮毫大会参加の審査員の先生、高校の先生等筆舌に尽くしたい多くの人々のご支援と御鞭撻により三十周年を迎えることができました。この紙上をお借りしまして厚くお礼申し上げます。

書心会が発足いたしましたそもその主旨は書道部の部員として苦楽を共にした仲間が卒業と同時に別れ別れになるのは忍びなく、また、離れ難いという全員の気持ちが一一致し、良きアドバイザーとして、忠告も含めて直言してくれる友達として一生お付き合いしていこうという事でスタートいたしました。

私は以前にも述べましたように、人間の価値観はいかに多くの人脈を持つかに尽きると思えます。それもでき

れば社外の友人を大事にしたいと考えます。社内の人間は、どうしても仕事のからみ、上下のしがらみ等で利害関係が発生し、本音の話ができないこともあります。しかし社外の先輩や友人は素直に忠告してくれるし、彼らからは本当に役立つ情報を得ることができるのです。

また、私は出来るだけ若い人と付き合い、若い人が今なにを考えなにをどう生きようとしているのか身体でわかりたいのです。このように人間の輪というものは、一つの核を中心に限りなく広げていくべきだと思えます。

しかしながら友人となりうる基本的なことは人を裏切らず、自分に出来ることは全部して上げる。しかも絶対にそれに対し見返りを求めないということだと考えます。書道部、そして書心会を通していろんな形で話ができれば、こんな嬉しいことはありません。

「更なる飛躍を」

学術文化部会常任幹事会 幹事長 佐藤慎介

「飽食の時代」を耳にして久しい。確かに現代の社会を見てみると、溢れんばかりのものがある。金銭的にも満たされて、必要以上の情報量が嫌でも届けられている。大変豊かな社会の現状に於いて我々現代の学生に欠けているものは何であるか考えてみると、それは目的意識であろう。

例えば、大学の意義を考えてみても、大学とは、「高度な学問研究の場」であり、「真理の探求の場」である。又、私立大学に於いては、各校独自の教育理念があり、校風があるので、そういった物を求めて皆が大学に入ってくるのであるが、現在では大学という名がブランド化しており、目的を持たずに大学へ来る者が多く、入学して自己を見失ってしまうケースが多々見受けられる。我が福岡大学に於いてもマスプロ教育等によって、真の大学教育が達成されにくい状況にある。

このような状況を打破する為には、やはり各個人の目

的意識というものが必要になる。周囲に流されて、怠惰な大学生活を送るのではなく、自分は大学に何を求めているのか、自分は今、何をしなければならないのかといったことを常に見つめて行動していかねばならない。やはり、大学生活の中で何か一つ自分が打ち込めるものを見付けなければならぬ。その対象は各個人によって様々であろうが、サークル活動というものもその一つである。

一つの目標に向かってサークル員相互に切磋琢磨していき、そして目標を達成させる。その過程の中で個人が成長していき、サークル全体の発展へとつながっていく。本年度で書道部も三十周年を迎えられるが、その伝統を築き上げられた先輩諸兄の努力を忘れる事なく、現状に満足することなく、新たな目標と向上心を持って、伝統ある書道部を更に飛躍させていかれん事を切望致します。

座談会

座談会赤木石掃先生を囲んで

毎年赤木先生には「荒鷲」に寄稿いただいたておりますが、今年は三十周年記念号ということで、書道部役員が赤木先生のご自宅に伺い、座談会形式にてOB寄稿のテーマになっていました「喜・怒・哀・楽」について、お話ししていただきました。先生の生の声に接して頂ければと思います。

役員 早速ですが、「喜・怒・哀・楽」という言葉から先生がお感じになれることや想い出などをお聞かせいただきたいのですが。

先生 難しいな、私に話せるかな、ハハハ……。(一同笑い)

役員 まず先生が「喜」と聞いてイメージされることは。

先生 難しいな。どうしてそんな難しいことを聞くのかな。やっぱり青年は色々追及する姿勢が厳しいなあ……。まあだいたい、私も殿村先生も理屈が嫌いだからね。特に書に関しても色々話すのがだめで、「とにかく自分でやれ、なんでも知りたければ自分でやれ」とね。

でも「喜」といえば、まず私は「明日」の事を考えると嬉しいんだね。今度はこうしようとか、例えば書道部の事を言っていると、明日はこうして生徒に会おうとか、これほど嬉しいこ

とはないね。

先生 今までで一番嬉しかったことは、女房をもらったときかな。他には学校に入学した時とかね。本当に喜びだったね。それから、終戦を迎えた時かな。それはね、とにかく上官が悪かったからね。後から刺し殺してやろうとも思っていたくらいだったからね。いつも早く終らんかと思っていたよ。また、平和が戻るといふ喜びもあったし、親の元に帰れるという喜びもあったしね。全て「生きる喜び」というものを感じたね。それだけ苦しかったからね。

役員 自分たちは、もう今が全てで、平和が当たり前と考えていますから、そういう喜びというものは、ちょっと……

先生 どっちが不幸かは、分からんわな。

役員 例えば先生、米軍がやってきて、これからどうなるか分からないという不安があったんじゃないかと思いますが、それよりもとにかく戦争が終わったという喜びの方が大きかったんですか？

先生 そりゃ嬉しかったですよ。これから国がどういう風に再建されていくかね。今日のように、こんな平和になるとは想像もしていなかったけど、まあこれで自分の人生が暮ら

せるという喜びね。どんな国になるのかという不安はあったけど、国がどうなろうと関係ないっちゃもん……。今まで国の為にとやってきたんだから。今度は自分の人生の幸せがあればいい、そういう感じだったね。でも今はそういう感じはないね。とにかく明日の事を考える、過去の事を考えて喜びを感じたことはいないね。喜びというのは「明日を生きる」という、なにもものでもないんだよ。

役員 今、自分達たち五人は、毎日あわたたしく仕事におわれているみたいで、一人になった時に、ほっとする、喜びがあるだけなんです。生意気ですが……。

先生 いやあ、君達は本当にいい経験をしているよ。この経験は将来どんなに役に立つか。

役員としてご苦労でもあるが、その喜びというものはね、一日これだけやった、するべきことをしたという喜び。まあそれが僕の言うような、明日はこうしようという喜びに変わればもっといいんだがね。

先生 まあ、私は幸せだね。明日、するべきことがたくさんあるからね。この歳になっても、することがないほど寂しいことはないだろうね。だれでも将来に向かって生きるといふことは大事だね……………。

役員 それでは、今寂しいということが出ましたので、「哀」についてですが。

先生 うーん。今言った寂しさね、難しいね。どういう風に受け取ったらいいのかな。涙が出るくらいに寂しいことと言ったらいかな。やっぱり、喜怒哀楽は人間にみな備わったものだろうからね。結局、僕は自分流に解釈してみると、あまり人は哀れむ必要はないと思うからね。自分をみじめに感じることはないと思う。でも、哀しむことのない、涙のない人間はダメだと思うね。哀れむということは打ち消したいね。そう言えば、喜と哀は相対して、怒と楽は反対のことなんだろうか。

役員 先生は今までに、何回涙を流されたことがおありですか？

先生 僕はしょっちゅう涙を流しているね。打ち消したいと言いながらね。君達の頃から涙を流しているね。

役員 それは、嬉し涙、哀し涙、いろいろなんですか。

先生 それよりも、哀愁の“哀”だろうね。それだから、却って暖かい心を持って言っているんだろうね。君達もそうだろうが、TVを見ても、よく涙を流しているね。よく涙が

出る。(笑)

先生 僕は、小学校の頃から親元を離れていたから、淋しかったね。自立心はついたけれどね。だから、人の家の明かりを見たら、寂しかったな。君達はどうか、涙を流したことはあるかね。

役員 はあ、種類はいろいろですけど……。

ここで赤木先生が退室、代わりに奥さんがおみえになったので、赤木先生の涙について、こっそり伺いました。

奥さん 涙を流したことがあるかですって？……いつもですよ。

役員 TVを見て、涙を流されるのか？

奥さん いつもですけどね。犬のことも泣きますよ。涙脆んです。すごく涙脆んです。一見強そうに見えるでしょ。そりゃ強いんですけど、反面、すごく弱いんですよ。いつもです。私、男の方がこんなに泣くなんて思わなかったです。(一同笑)

役員 犬のことでお泣きになるといふことはどう言うことですか。

奥さん 例えば、犬は物を言えないでしょ、

思い遣りを持って人に接していたら、こうい

それが可哀想だとか。怪我をしていて痛そうにしているときとかね。とにかく感情が細やかなんですよ。

そこへ先生が戻って来られて……、

先生 お前達、俺の悪口言ったら、お茶を出さんぞ。(一同笑)

奥さん 悪口じゃないものね。いいことよね。

とおっしゃって、奥さんは部屋を出ていかれました。

先生 やはり涙はいいね。涙のないやつはダメだよ。しかし、自分を哀れむ涙はなくしたいね。もっと希望に燃えた生き方をしたいからね。だけど他の者に対する涙はいいことだと思ふね。いろいろな人間の種類があるけど、涙のない人間が悪いことをしているんじゃないかな……。

役員 次は、「怒」についてですけど、私たちは「怒る」ということは対人関係の中で一番難しいことだと思ふんですが。その怒りを表にだすか、それとも内に込めるかとか。日常生活の中で、上級生として下級生に対し、怒りをどのように使っていくかですが。

先生 まあ怒りというより僕は憤りを感じることも多いですね。例えば、学校で暴力事件とかあったら、僕は電話をしますね。『もっと



思い遣りを持って人に接していたら、こういうことにはならなかったんじゃないか」とかね。だから思い遣りというのは大切ですよ。もっと暖かい気持ちを持ってね。

先生 君達だったら、もっと一年生を大事にしたいって欲しいね。自分たちが一年のとき経験したことをもとに接して行って欲しいね。本当にはいい上級生だったと、あの上級生のためには部は止められないと思われような上級生になって欲しい。そういう暖かい上下関係になって欲しいと思いますね。

先生 まあ暖かい心というのは、僕の人生において貫いているよ。僕の座右の銘じゃなからうかな。

役員 先生の「暖かい心で見守る」というのは、その気持ちを持って怒るといふか、叱るといふこともあるということですか？

先生 それだよ！そう、それだけだよ。怒る、憤りを感じるというのは、やっぱり、やさしい心を持っていないときには憤りを感じるね……。

先生 さあ最後の「楽」だね。まあ、人は知ることよりも、また好むということよりも、楽しむことが最高なんじゃないかな。そんな風に思うね。人生の最高は「楽しむ」ことじゃないかな。苦しむことも楽しんで、そうすると悲しむことも楽しいんじゃないかな。そ

うしたらいい人生だよ。

先生 考えてみれば、人というのは「喜怒哀楽」一つでもかけたらダメなんじゃないかな。

今年は君達が変な話題を持ち込んだなあと思つてはいたけど、考えてみたら大事なことだよな。うーん、そう思った。喜怒哀楽を共にして、円満な形でそれを持つとく事は最高の人生だろうな。

先生 四つあって一つなんだろうね。一体なんだろうね。何故、これを取上げたんなかな。君達らしいな。

役員 最後に、先生にとって福大書道部とは、……？

先生 うーん、確かに他のサークルとはちょっと違うんだよ。常に同じ年齢の者と接しているわけだから、そうだね、僕にとっては年をとらない子供のような感じだね。綺麗な言葉でいえば、息子を育てている感じかな、福大書道部は。他のサークルは年配の方ばかりだから。やっぱり、親父のように叱ったり、息子、子供みたいな気がするね。怒っても憎くないし、かわいいなあ。まあ有り難いことに一年一年続いているわけだからね。僕の書道生活に於いては、福大書道部は子供みたいなもので、そういう愛情があるね。

先生 とにかく、一生懸命やっています。お互い信頼してね。その点じゃ最高なんじゃないだろうか。そして、僕も幸せだよ。ただ一つ残念なのは、一人一人に会えないことだね。そういう時間がないからね。もっともっと、特に一年生と接していきたいね。君達ももっと一年生に向かって接していけばいい部になると思います。

役員 では先生、十二月一日の祝賀会には、一年生や他の部員そして諸先輩方が先生とお話できることを楽しみにしていますので、是非出席してください。お待ちしています。

先生 とにかく、仲良くやっていきましょう。

役員 はい。よろしくお願いします。

こうしてあっという間に時間が過ぎていってしまいました。他にいろいろな話や対談に愛犬クマの乱入によるハプニングなど、全てを掲載できないのが残念ですが、赤木先生との有意義な時間を過ごすことができました。最後に、赤木先生、奥様、お忙しい中をご協力いただき、ありがとうございました。これからも福大書道部をよろしく願います。



外部寄稿

たいなもので
そういう愛情があるね。

晩香堂社長インタビュー

去る平成二年十一月十六日、書道部役員による晩香堂社長、菊地さんのインタビューが南北片江四丁目の菊地さんの御自宅で行なわれました。菊地さんは、現在は息子さんにその座を譲っておられますが、親子三代に渡る赤木先生とのお付き合いの中で、印象に残っていることお中心にお話しを伺いました。

先ず、赤木先生は昔から、他の書道の先生とは全く違う印象が合ったそうです。夏にはいつもランニング一枚で大きなバイクに乗り、作品を持ってきて下さるような、大変元気で、たくましい感じがあったそうです。その辺りは、今現在先生に教えを受けている自分達も感じていたことで、昔と全く変わらない先生を改めて尊敬しました。

又、先生は非常に幅広い趣味を持っておられますが、菊地さんは先生の御自宅のステレオが来た時にお呼ばれされ、その先生の芸術に対する幅広さに感心されたそうです。日々多忙な先生にとって、休日に誰もいない家で

一人で音楽を楽しむ事が、良いストレス解消、安らぎの一時でしょうとも語って下さいました。

先生の性格についても、非常に繊細な部分をお持ちで、前述した元気でたくましい印象からはとても想像できないような、例えば日展の頃のかなの作品のように非常に繊細でかつ強い線をお書きになることも語って下さいました。

やはり、親子三代に渡ってお付き合いしていただけるのは、先生の人格による所が大きいと、途中何度も語って下さいました。他の先生とは少し違う印象、幅広い趣味、そして何よりも書に対する姿勢、それらは全て赤木先生のすばらしい所であり、またそれによって大勢の人が先生の元へ集うという、何よりも人格がすばらしい先生ということを特に熱く語っていただき、自分達現役も改めて先生の偉大さを実感した取材でした。

創部三十周年記念を祝す

佐賀西高等学校 米倉 信義

まずは福大書道部の三十年の業績に対して祝福申し上げます。

この三十年間には、時がかわり、人もかわるなか、大会運営が一貫して継続され、年々充実した大会に導いてこられたことに敬意と感謝いたします。

この永い三十年の間に本大会に出場参加したのが二十五回（佐賀商業高等学校十七回、佐賀西高等学校八回）になります。

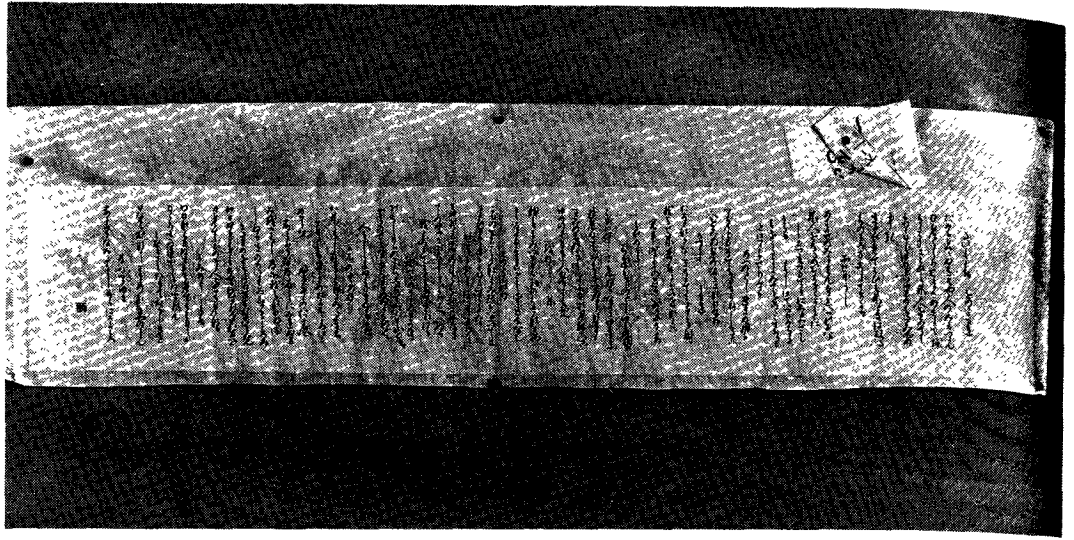
この大会に運営にかかれる方々を思うとき、大変なご苦勞であり、綿密な計画と実践には参加者をして行き届いた大会で安心しての参加であります。日頃自由放任の部活動の生と諸君には得難い経験をしていると信じております。礼儀、規律の中に親切心があり、毎回参加してよかったの感を覚えていようです。

「将来に於ける書道文化の擁護、書技の向上を目的とす

る」の標題はもちろんのこと、参加することによって人間の大切さまでも学んでいるようです。こうしたすばらしい西日本高等学校揮毫大会が益々発展し継続あらんと祈念します。

今大会は記念すべき三十周年の節目の時に団体優勝を受けたこと有難く感謝しお礼を申し上げます。

OB書心会の皆様方絶大な支えのあったことだと思いますが、今後共よろしく御指導、御鞭撻申し上げます。祝いのあいさついたします。



第三十回
西日本高等学校揮毫大会
に参加して

南筑高等学校 二年 末安 裕子

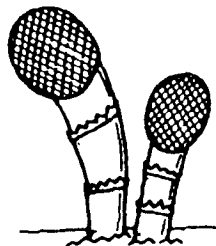
友達から電話で知らせを聞いた時、夢ではないかと思いました。今度の大会のようにシーンと静まりかえった中で、揮毫大会に参加したのは初めてでした。先輩方からはすごく厳しい大会だということを知っていたので半分おそろおそろ、半分好奇心を持ちながら参加した大会でしたが、かえってそんな状況が私を落ち着かせていたような気がします。

一時間四十五分というかぎられた時間の中で、あの小さくごちゃごちゃとした字を半折一枚分の作品に仕上げることは、容易なことではありませんでした。練習を始めたころは、全然、字にならず、ただの線のようにさえ見え、どうしてよいものかと途方に暮れたこともありました。しかし、そんな中で、先生の御指導や部員みんなの励まし合いによって、奮起することが出来ました。

本阿弥切の臨書で注意したことは、先ず、墨継ぎの変化です。墨をついでから次までの墨量を頭の中に入れてながら書き上げました。又、線質として側筆を多用しているため、紙にくいこむようなピリッとした線と、筆先を思いきり出す側筆の線を上手く使いながら、

原本の雰囲気を出せるだけ出すようにがんばりました。

この大会での私の作品は、自分にとってあまり満足できるものではありませんでしたが、それだけに喜びは、人一倍でした。また、団体では、準優勝ができ、部員一同大変喜んでいきます。そして、この受賞を機に、一層の努力をし、次の大きな目標にむかって自分でも納得出来る作品を作り上げていきたいとおもっています。どうも、ありがとうございました。



「喜び」事務局

九州大学 宗 義幸

事務局というのは福岡学生書道連盟の中の役職であり、福書連の年間行事の企画をし、その行事の運営を行う仕事である。ですから連盟の中で最も大切な仕事であると思います。自分がその事務局という役に就いたのは一年の十月だった。ほとんど、何も知らない状態であった。

十月の総会で事務局長が福大三年の林さんと決まった。その先輩は錬成会で入浴中、フロの中で泳がしてもらった先輩であった。後事務局員として、各大学一名ずつ選出された。知っているのは二人ぐらいしかいなかった。これから先、大丈夫かなあと思った。

自分達が企画した最初の行事は卒業生を送る卒業パーティーであった。十月の終わりから毎週日曜日に集まって、その事について話し合った。自分達は一年生なのでその卒パというものがあるのか、どういう形式でやればいいのか全く知らなかった。自分は司会をする事になった。前日の晩、風邪をひいてしまい最悪の状態であったが薬を二、三日分飲んで、なんとか声が出る状態となった。卒パはなんとか無事に終わった。

それから、スプリング・ディスプレイ、連盟展、親睦会、最後に錬成会と失敗ばかりで、ほとんど、完璧という言葉には程遠いものばかりであった。

今、ふり返って考えると、自分は人生の中で貴重な体験をしたなあとと思う。毎週日曜日集まったかいがあったなあとと思う。最初はバラバラだった局員達も一行事一行事が終わる度に一つに固まっていった。自分は一行事が終わるといつも、今日は酔いつぶれるぞと思った。そして、毎回、他の事務局員とつづれた。今となっては良き思い出である。本当に局長の林さんにはお世話になった。今でも、事務局員だった人とはよく遊ぶ。一年間、同じ仕事をした仲間である。

やはり、一つの事を何でもやり通すということは難しい事である。何度も嫌になることがあった。しかし、自分はがんばったと思う。そんな事もあったが事務局が終わった時には充実感があつた。喜びがあつた。一つの事を貫く事は難しいがやった後は喜びへとかわるのである。

これから先、何度もそういう機会が訪れるだろう。でも、事務局の経験を生かしながら思い出しながら、がんばっていかうと思いません。

最近思うこと

西南学院大学 山路 誉子

先日従姉に赤ちゃんが生まれ、翌日に顔を見に行きました。生まれて間もない赤ちゃんをみたのはこれが初めてで、小さな手をしっかり握りしめている姿に何とも言えない感動を受けました。そして、この「人生」というテーマを考えていたこともあってか「これからどんな子に育っていくんだろう。どんな生き方をしていくんだろう。」と思いました。わずか二十年前の自分も、まだ目も開いていない、こんなに頼りない存在だったのが、平均寿命の約四分の一が過ぎた今、成人式を終え、生意気にもこんな文章を書いているのです。

「人生」というと、言うまでもなく人の一生、人の生きている間のことですが、その長い時間には何度かターニングポイントとなる時がある、と言われます。私のこれまで二十年間を通して最も大きなポイントとなったのは、やはり西南学院大学に入学したこと、そして書道部に入ったことでしょう。クラブに入り、様々な人と出会い、活動をしていく中で、どこかで少しずつ成長してきていると感じます。そういう意味では私にとって普通の

四年間分以上のエネルギーとエッセンスの詰まった実のある時を過ごせる場といえますし、他にこのような場はもうないかもしれません。今、むやみに打ち込んだり、あるいは何気なくやっていること等も、後になって貴重な経験だったと思いつ返せることも多々あるでしょう。また、「学生という、自由で、ぜい沢で、我がままな時の悩みなんて社会から見れば甘い。」などとよく言われます。他から見れば些細なことでも本人にとっては真剣そのものだったり、他の人には分からないなんて考えたりします。こんな、ある意味では無益なことに熱中できるのも人生の中のこの時期が最高で最後のような気がします。もちろん、今の私も色々な悩みを持ち、頭を抱えたりしていますが、これも将来の自分にプラスになる、と信じていきたいと思えます。時には疲れたり挫折したりしますが、目をそらさずに向かっていく心構えを忘れないで一瞬一瞬を大事に生きていきたいと、そして次のスタートへのステップにしたいと思えます。



怒

久留米大学 神代 義大

人間関係における「怒り」を分類すると、まず第一に、怒らないでもいいことに腹を立てる。つまり衝動的な子供っぽい怒り。第二に、怒ったため相手をひどく傷つけるもの。第三に、怒ったゆえに自分が損するもの。四番目に、人間として、男として怒らなくちゃならない怒り。これはその人の値打ちを高め得ない怒りです。ところが、怒ったために損をするとか、得をするといっても、これは計算してできるものじゃない。怒りの感情というのは爆発してから後悔したり、悩んだりする。だから怒りをコントロールして、巧みに使える人というのはかなりの人物といつてよい。ぼくも、長い間、怒りを巧みに使える人物になろうと、随分と努力したけど、難しかった。自分にできないことを、他人にいうのは気がひけるけど、怒ったために、得をすることはあまりないだろう。ただ、怒りの心情、特性というのは、どんなものかを知っていると、それをコントロールする手段になるかもしれない。「怒るから手を上げるんじゃない、手上げてから怒るんだ。」これは確かに真理だと思う。怒る時に、声を荒げて

怒鳴ったりする。そうすると、自分の出した大きな声に驚いたりして、怒りの情が増していく。今度は手をあげると、さらに怒りは倍増します。そして、相手をなぐった手の痛みを感じると、ますます収拾のつかない事態になってしまふ。静かに怒っていると、その怒りはときには、いい加減なところでしばらく止まらうが、ひと度、大声を出すと怒りは際限なく増大していく。だから、発声を含めて、行為そのものが怒りの情を増増するということはよくわかる。だから、すぐに我を忘れて怒りに身をまかせちゃう人は、あくまでも大声を出さず、手を上げないことです。その怒りのスタートを我々は往々にして誤ってしまふ。もう一つ、怒りの側面にはくだらしないけれども、面子という問題が必ずつきまとう。自分の面子のために怒っている人がよくある。もうこのあたりで怒りを納めようと思いつながら、面子とのバランスが取れなくてガラガラと怒っている。こういう怒り方が一番下手なやり方だ。戦争にたとえれば、兵站線が延び切っていると勝負は負ける。だからどこまで怒るかをたえず自分の頭の中で考えておかななくちゃいけない。この、どこで撤退するか、ほこを納めるかが重要なんです。それから、怒る時は相手に逃げ道を与えよ、ということ。部下を叱る、友達に怒る時でも、逃げ道だけは一カ所あけておくことだ。逃げ道も与えず全部封鎖してしまつと、大変危険です。せっかく自分が善意をもって怒つたとし

ても、恨みを買ってしまふことになる。怒りといっても二種類あって、部下を叱るとか諭すような場合はオコルという。つまり、相手を教育する意味合いを含んでいます。が、感情的にカッとなるイカリがある。感情の爆発で、これはたいてい後味の悪いものだ。なぜかといったら相手を傷つけるし、損をするからだ。でも、この感情的なイカリの場合でも、損を承知で怒らなくちゃいけない時もある。これは自分の面子の問題だけじゃない。自分の誇り、自尊心を傷つけられたりする場合、それを守るために損を覚悟で怒る時もあります。つまり、不当な屈辱を受けた時、身にも覚えないことで疑われた時、相手からやみくもに一方的に怒鳴られた時などは敢然と怒らなくてはいけない。そういう場合、ぼくは怒るべきだと思う。どんな不当な扱いを受けても、自分の信念と違っても怒らない人というのは、必ずしも人格者じゃない。これはする賢いか老練だというイメージにつながる。ではそうたやく怒らないためにどうしたらいいかという、怒る前にひと息呼吸することです。しかし、そうはいても、その人の性格でやろうと思ってもできない人間もいる。そう人は、謝り方のコツを知っておくことです。みなさん、がんばって下さい。

私の人生

中村学園大学 末綱 ゆかり

毎週、毎週、積み重なるレポートの山。普通だと嫌になって投げ出してしまいたいような気がするが私にとってはその一枚一枚のレポートを仕上げるのが教師になる夢への一歩となる。そう思うと、つらさに加えて喜びも湧いてくる。かっこつけた言い方もしれないが、私にとってこの道を選んだことは人生の大きなかけであるかもしれない。小学校の頃からずっとただひたすらに教師になることを夢みてきたわけだが、高校の時に進路について少し悩んだことがある。もし、別の道を選んでいたら、私がこうやって大学にいないことかもしれないだろうし、こうやって原稿を書いていることもなく、ましてやレポートに追われることなど決していないだろう。迷いに迷ったあげく何故教師の道を選んだか、それは小学校からの夢を実現させたいということからである。決して後悔することなどないだろうと考えたからである。おかげで今、私は楽しくやっている。自分の好きな道を進んでいる喜びと、自分のやりたいことをやっている、だから、がんばれるという喜び……。そしてこのテーマにある、「人生」「ロマン」とはやは

り自分のありったけの力を出し切って後悔しないことだと思う。人にいくら愚痴をこぼしてみても、本人はけっこう楽しんでやっているとこの方がいいんですよ。「男のロマン」と言えば、聞こえはいいし思わず耳を傾けたくなるけど、「女のロマン」……、そうですね、私は後悔する暇などなかった。女でよかったと思うし、また生まれ変わってても女がいいと思う。私のこの二十年間がそういわせる。私は、これからも「書」と共に、自分のありったけの今だけの大学生活を有意義に過ごすために、がんばっていかうと思う。そして私が選んだこの道を何も言わずに見守ってくれる両親や応援してくれる友達に心から感謝したいと思う。せっかくなのできたのだから、私のこの手で私の夢、つかんでみせる。つかんで初めて、私の第二の人生が始まる。何かテーマにそってない乱筆乱文をお許し下さい。



「喜」「怒」「哀」「楽」

純真女子短期大学 秋永 由美子

私が最近喜んだ事は、「焼肉を食べに来ませんか。」と二回も誘われた事です。一人暮らしの私は肉を見る機会も少なく食事といえ、いつも一人で孤独に食べている私にこのような誘いが来た時は涙が出る程うれしく思いました。一人暮らしは寂しいもので、こんな私も寂しい事はかりではないのです。

楽しい事もたくさんあります。楽しい事といえば、友達といっしょにカラオケに行く事やディスコに行く事、そして恋をする事。あと何といっても書道部の他の大学の学生の皆さんと色々なイベントでお逢いする時などです。書道といったら一見暗く見られますが、短大に入り書道をする上でこんなに書道が楽しいものなのかと思う程です。

「怒」といったら最近あった事です。高校生の女の子がガムを道に口から捨てた事です。昔の私でしたら気にはしなかったかもしませんが、今の私は昔とは違います。たいへん怒りました。まして女の子が。同じ女性である私は恥しく思いました。常識外れな事をするのはやめましょう。

そして「哀」といったら、作文を書く事の下手で苦手な私にこの原稿の依頼が来た時です。何をどんなふうにか書けばよいのか悩みに悩みやっとここまで書き上げたものの、これだけの文でしか書けない自分自身に哀しくなりました。でもこれだけしか書けない私ですが、現在短大の2年生です。そして二十歳になりこれからは社会人になるのです。社会人としてどのような人生を歩いて行くのか私自身よく分かりませんが、すばらしい人生を。と希望に燃えています。短大生活も残り少なくなりましたが、くいの残らぬよう勉強にそしてサークルに頑張っていきたいと思っております。残り少ない短大生活皆さまどうぞよろしくお願い致します。

人生

筑紫女学園短期大学 武田 美保

「人間は何のために生まれたのか。」この問い掛けから始まる武者小路実篤氏の小説「人類の意志に就て」の中に私の「人生」についての考えがほぼ納められている。

実篤氏は初めの問いに対して次のように答えている。「人類の意志であるから。」と。

氏が我々をヒトや人、人間といわず「人類」といったことに私は深い意味を感じる。人間が生きて行くことを個人一人々ではなく人類という種としての観点から生きるべくして生き死ぬべくして死ぬというのである。

実篤氏は人類の意志通りに生きるための手段として快苦が我々に与えられていると、そして快を求めるようになっていると言っている。所謂フロイトのいう人間には快楽を追求し不快・苦痛を避けようとする先天的傾向つまり快感原則であるが、これはあくまでも手段であってそれ自体を味うと生きる為に水が必要でその為に喉がかわく、喉がかわいて水が飲めない frustration に落ちているが逆に水を飲むことの「快」だけを感じ飲みすぎると胃腸を悪くするといった具合となる。ここにその人の本能と理性との



complications が生れる。この相互関係を実篤氏は「本能は弱いより強いがいい。しかし理性はそれを統御することが必要だ。」と述べている。

最近では個人個人がいかにかその人生をよりよく生きるかに重点がおかれるようになってきた。これもすべてが悪いとは一概には言えないが、こうなると「自分の人生だから好きな物を食べ、好きな物を着、好きな遊びをします」ともいえないか。何キロ出しをしないでくれ。」とこうなってきたら、すると実篤氏の言う「人類の意志」とは掛け離れてくる。

実篤氏は人類を生長させるために生きるのとが理想であると述べている。ここに生き甲斐を感じた、生きる喜びを感じる。ことができるのだろう。

以上のように実篤氏の文章を編用して私なりに人生その生き方について述べてきました。がこれに対しても賛否両論があるでしょう。自分自身の考え方もこれから多くの人の意見を聞き少しずつ変化してくるものとも思うことができる。すべての事を否定して考えるのではなく前向きに肯定した考えで見えてゆきたい。

人類の意志にかなうようにできるだけ長く生き、そうして自分を見失わないようにしていきたい。

光陰矢の如し

福岡女子短期大学 小桜 優子

「はたち」にもとどいていない私が、「人生」を語ることなど、到底無理。あえて「人生」について言えば、「光陰矢の如し」と言えるのではないだろうか。

今まで生きてきた十数年間、考えてみればあつという間だった。入学・卒業を繰り返しているうちに、もう今年が大学生活最後の時を過ごしている。砂時計の砂が滑べり落ちていくような速さで、日々私達は過ごしている。はたしてその過ごした時の中に、私にとっての「人生」を語るものがあるのだろうか。語れるもの語れないものについての判別は、あと何十年か立った時につけられるのだ。だから私は、今、現在の時を大切に生きたい。

そう言いながら、「人生」が過ぎていくことを、私達は忘れてしまつて生活している様な気がする。毎日が全然変わればえのしない生活が続いていると感じる時もある。そんな素朴な毎日の中で、自分なりに思い出をつくりながら、後々自分の「人生」を語れることになるのかもしれない。私は今、あと一年もない短大生活を日々いそがしく、一日がとて

も短く感じながらすごしている。これが、自分の「人生」の「きれはし」にでもなるのかな、と考えると、ちょっとワクワクした気持ちになる。自分が今、一生懸命に活動していることは、「書道部」のサークル活動。「これしかない。」というのは、さみしいけど、でも、私はこれが一番「人生」の思い出になるのではないかと思う。苦しい事や楽しい事の多かつた分だけ、自分なりの「人生」を歩むことができるのかも……

一人一人、違った「人生」を送るからこそ今の自分が時と一緒に流されずに、しっかりと踏んばって生きなければいけないのだ。弓から矢がはなたれてしまえば、途中では決して止まらないように、もう私は「人生」を歩みだしてしまつたのだ。そして目標に真っすぐつき進む矢のように、私はつき進むために努力をしたい。

「人生」について、いつか語れる時がきたら、それが私の「人生」の終わりかもしれない。でも、また新しく始まるかもしれない。「人生」は永遠に終わらないのではないでしようか。

蘭亭八極

笑顔でいることの大切さ

西南女学院短期大学 熊谷 妙子

一人は悲しいから泣くのではない。泣くから悲しいのだ。誰でも一度は聞いたことがあるのではないだろうか。私は、はじめはこの言葉に出会ったとき、ちょっとした衝撃を受けました。あまりにも当たっていたからです。当時、世界中でいちばん大切だと思っていた人が遠くへ行っていました。いろいろな人が慰めてくれ、そのたびに私はメソメソ。はじめは同情的だった友人も、次第に私のことをうっとうしく思い始めたようでした。そんな頃にあの言葉に出会ったのです。それ以来です。あまり泣けなくなった代わりに、いつでも楽しそうに笑えるようになったのは。泣くから悲しくなるのだというなら、笑えば楽しくなるはずではないか？という、単純な考えが、いつも心の中どこかに流れるようになったのです。

亡・藤山寛美氏が「人間は人の間と書く。人と人との間で生きてゆくことを指す。一人では生きられないということ覚えておけば、人間関係をスムーズにすすめようとするだろう。そうやって生きた人が、人生の成功者だ。」と、書いていました。すべての感情

は、人と接することによって生まれますよね。加えて、感情が同化したり、影響をうけたりすること、よくあることだと思えます。例えばお葬式で泣いている遺族を見て、もらい泣きしたり、笑っている赤ちゃんを見て、つい微笑んでしまったり。

話している相手の表情で、その人に対する印象はずいぶん変わると思えます。気持ちよく話せれば、自然と人間関係もうまいくよくなるでしょう。「あの人と話すよ、何だか気持ちが和む。」「あの人と話すよ、楽しくなる。」「こんなあの人」って、必ず周りにいますよね。みんなに好かれる人。人生の成功者ですよ。

私も「あの人」になりたい。そう思っています。そのためには、メソメソなんてしてちゃいけないです。私が悲しかろうと苦しかりょうと、それは周りの人には関係ないこと。周りの人まで悲しませることはないんです。相手の人も、同情はしてくれても結局は他人事。全く同じ気持ちにはなってくれません。（正直いって、私がそうなんです。）

同じ話すのなら、お互いに楽しく過ごして、別れた後も「又、会いたい。」と、私自身が考えるようになりたいと思います。会っている数時間で、自分の印象が決まってしまうのだったら、せめてその間だけでも、明るく笑っていたい。そして「あの人はずっといい。」と相手を責める前に、楽しくできなかつた自分を反省できるような女性になれれば

素晴らしいと思います。

でも、笑いジワを気にして、一万円もする保湿クリームを買わされてしまうような私は、まだまだ理想の話ですね。

人生

福岡教育大学 和田 秀作

人生について考えて見る。つらくて苦しい今こそ、考えて見る。自分は何をやるべきか、これから先、どんな道を歩いてゆくのかわ、どんな夢を見て、かなえられるのか、どんな空を眺めることができるのか、時間をかけて、じっくりと考えて見る。この扉は一人で開けなければならぬ、誰も手を貸してくれない、そんなのばかりだよ、人生って。逃げ出したくなる時だってある。今という時間から。この場所から。どこか遠くへ行って、大声で叫びたい、そんな苦しみ、人生のあちらこちらで牙をむいて待っている。悲しい事だ。たたくさんあるよ。悔しいことも。同じ失敗を繰り返してしまっただけの時、思い通りにいかない時、どんなに頑張っても分かってもらえない時。知らないうちに他人を傷つけてしまっている時もある。本当にいやなことが

多すぎるよ、人生なんて。

一体、何のために、何をして、どんなふう
に生きていけばよいのだろうか。分らないけ
れば考えて見ればいい。精一杯、自分なり
に。答を出すことなんかは重要じゃない。考
えているということが生きている証拠なのだ
から。誰にも負けたくない、そう思った時
は、自分なりの進む道を見つけ出し、一步一
歩力強く踏みしめていけばいい。

自分のことを分かってもらいたい、そう思
った時は、自分から相手のことを分かっ
てあげればいい。あの人が、あの時流した涙、あ
の時見せた笑顔、思い出すと、なんだか勇気
がわいてくる。生きるための。そして仲間、
友達とは、なんといいものなんだろうか、そ
う思えてくる。

そうだ、やっぱり一人じゃないんだ。一人
で生きてるわけじゃない。たくさんの人と出
会い、別れ、また新たな出会いがある。素晴
らしい人達に、めぐり会っている。

完璧な人間なんかおもしろくない。弱さや
欠点を持っていてこそ温かい人間だと思
う。自分の弱さをかくすより、悲しいこと、うれ
しいこと、感情をおさえるより、今という時
間に素直に生きていきたい。

音

喜

福岡女学院短期大学 小川 真喜子

「喜」は「喜怒哀楽」の最初に位置してい
るにもかかわらず、道端の雑草の様に地味な
存在だと思ふ。人は怒ることや哀しむこと
や楽しむことは好きだけど「ささやかな喜び」
は、つい見落としがちだ。私は「喜び」の、
そんなどんくさが好きだ。何故私が「喜」
に肩入れするかと言うと、やはり名前に関係
しているからだろう。

ここで身の上話をする事にしよう。

「あなたの名前、どう書くの？」と人に尋
ねられる時も「真実に喜ぶ子、だよ。」
と答える。実は昔、この名前が嫌いな時期が
あった。

何とんでも子音の力行が並んでいるせい
か、少し発音しにくいのだ。今こそブームに
成りつつある「まこ」が、しかも私自身、
「まこちゃん」とか呼ばれる方ではないの
で、昔の様に可愛い名前をもじったあだ名
をつけられる事なく、小学生の頃から若い身
空で「おかーさん」と呼ばれていた。(確か
に「小川」も言いにいくと思うが、虚しいも
のがある。)

更にこれでもかと追い打ちをかけたのは、

何と言っても小学二年の時の事。その頃同じ
学級の仲良しに、「真紀ちゃん」という、
「座っていればお人形さん、歩けばどこぞの
お姫さま」を地でいく、とびきり可愛い女の
子がいた。彼女は老若男女問わず誰からも好
まれる良い子だった。それから、私達の担任
はとても優しい先生で、良い子も悪い子もわ
け隔てなく愛して下さっていた。でも、ここ
でいわゆる「大どんでん返し」が起きた。先
生がある日(と言うのも変だが)玉の様な女
の子をご出産なされたのだ。その名も「真紀
ちゃん」。生徒一同はその時しみじみと思
った。「やっぱり、女の子は可愛くなくつち
やね。」

親なら誰でも我が子の幸せを願うだろう。
その第一歩が「名前」。「美智子ブーム」
や、「南ちゃんブーム」が、その一番の例
だ。他人の幸せにあやかっつて、「この様な素
敵な人になって欲しい。」と願いをこめて親
は名付ける。だから、大好きな先生に好かれ
なかった「真喜子」が、私は大嫌いだっ
た。そんな時、母から私の名前の由来を聞い
た。私の名は曾祖父が付けてくれたものだ
と。「喜」か「樹」かと漢字で迷っていた時
に曾祖父は「樹はいけない。いつかは枯れ
る。枯れないように喜にしよう。」と言っ
たそうだ。

喜びは絶える事はない。小さな事も大きな
事も全て喜び。喜びは姿を変え形を変えなが
らも生命の中に息きずいている。人は怒る事

も哀しむ事も楽しむ事も繰り返し、やがて喜びに帰ってゆく。「枯れる事のない喜び」は曾祖父の私に対する「想い」だと思う。だから、私は自分名前を大切に思っている。今は「き曾祖父や、私の大切な友人達への私の「想い」は「喜び」である。



書道研究

王羲之



王羲之の人物像

王羲之は、中国東晋代の書家であり、瑯邪臨沂の名族王氏の出身である。年少のころから、明郎剛直な気質をもち、書にも堪能で、とくに隸書において、古今第一と称せられていた。

まず初めに、彼は秘書郎となり、次に征西將軍庾亮の參軍、そして、長史となった。さらに、庾亮の推薦によって、寧遠將軍、江州刺史に進み、永和七年には、右軍將軍、会稽内史となった。会稽の地には、四年ほど在住したが、故あって官を去った。彼は政治家とし

ては、あまり振るわなかったようである。退官後は、風光明媚なこの地方の山水のうち、諸名士と優遊自適して、余生を終えた。彼が会稽内史をしていたとき、永和九年、暮春三月のこと、会稽山陰にある蘭亭において、修禊の宴を催したときに、諸士の詠草を集めて成った詩集の序文として書かれた「蘭亭序」は最も名高いものである。

彼は、在世中にはすでに書名が高く、その書を得たものは、大切に保存し、時には偽作するものもあつたといわれている。書体としては、隸書の他に、行、草、章草、飛白、八分すべてこれをよくし、みな入神の境に至つた。

その書は、歴代の帝王の蒐集によって、多くの作が伝わった。しかし、今日伝存するものには、真蹟はなく摹搨本、臨模本、および墨沢の法帖に刻されたものばかりにすぎない。原蹟のすがたをそのままとどめるものは絶無といつてよい。

ところで、彼は、その人物が、風流才子、蕭散名人と言われるように、その書も、神仙を

見るかのような、瀟洒で逸脱した韻致があり、天生の素質の自然に表現された美しさにおいて、筆紙につくされぬ入神の境地に達していることが、特色となっている。

その書は、その子である献之と共に、二王の称をもった。そして、その後ながく、書道の典型として、伝統派の基礎を形成した。このように後世に絶大な影響を及ぼしたのである。その書風は、わが国の奈良時代にも影響を与え、平安時代における、日本書道の源流ともなつて、今なおその余派をとどめている。

王羲之の影響を受けた書家

中国の書の歴史において、もっとも大きな指導力となり、もっとも長い年代にわたつて影響を及ぼしたのは、二王と呼ばれる王羲之とその子献之であり、そして東晋の後を承けて書が栄え、多くの書道史に残る優れた書家が輩出した。

階書では唐の三大家といわれる褚遂良、虞世



南、歐陽詢や、顔真卿、柳公権。草書では孫過庭、懷素、張旭などがよく知られている。例えば、虞世南は王羲之の円(まるみ) 歐陽詢は卓(そびえたつ姿) 褚遂良は超(超脱) 顔真卿は勁(沈勁) を得た。みなそれぞれに羲之を習いぬぎ個性に応じて自分のものを取りつて一家をなしたのである。

書聖羲之は東晋に突然生まれ、行・草体を創出したわけではなく前時代の蓄積なくしては生まれ得なかったと言っても過言ではない。つまり羲之以前に行書はすでに高いレベルでありましたが、書文化の豊かな遺産を背景にしていた。羲之はこれらの遺産を引き継ぎ大きく発展させた天才である。

王羲之の作品について最も代表的な作品を紹介する。

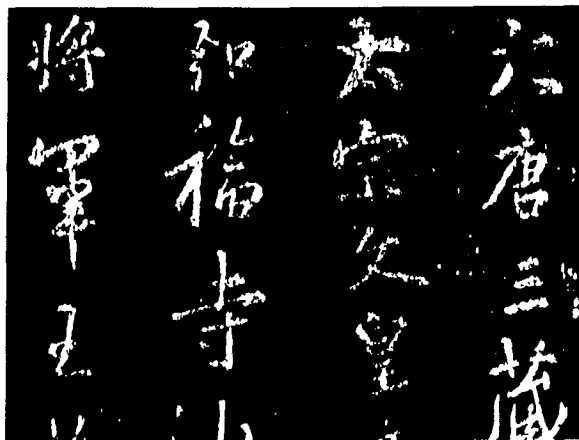
「興福寺断碑」行書の集字碑であり、明の万暦年間、西安の府城の南から出土した。上半は失われて下半のみの断碑であり、一つに半截碑ともよばれている。僧大雅の集字。開元九年(七二二)刻。集字聖教碑に次いで王の行書の典型とされている。

「集字聖教序」行書。大唐三蔵聖教序を王羲之の法書の行書を集めて刻した碑である。唐高宗が咸亨三年(六七〇)に立碑した。僧懷仁が唐内府所蔵の王の法書から多くの年月を費やして集字したという。碑文は唐太宗が玄奘三蔵の新訳仏典のために作った序と皇太子(高宗)の述三蔵聖記と、おなじく高宗の玄

奘法師の謝表に対する批答および玄奘の訳した般若心経より成る。すべて三十行、毎行八〇字数字、計一九〇四字。重出するものを除くとおよそ七六〇字を集字したものとなる。

碑首に七仏を刻しているのので七仏聖教序ともよぶ。原石宋拓のものをとつとぶが、明の天順年間のころ中間から截断したので、それ以前のもの未断したため、それ以前のもの未断本、それ以後のものを已断本と呼ぶ。王書の行書の精髓として長く学書の模範とされている名蹟である。

「十七帖」草書体の書簡を集めた法帖。唐太



宗の王書の蒐集品の中で最も著名なものであった。巻首の「十七日」を取って十七帖とよばれる。長さ唐尺一丈二尺、一の七行、九四二字、二三帖より成り、「貞観」の小璽と「開元」の小璽があり、跋尾に当時の大臣の名が列記されていたというが、現在、原本は伝わらず、唐模本によって刻したと思われる刻帖がある。帖数は二九帖あり、上記原本より内容は多くなっている。十七帖の内容は益州刺史問撫にあてたものが大部分で、書は大帥分独草体をなし、王の草書の典型的な作である。

「蘭亭序」晋の永和九年三月三日、王羲之が当時の名士、孫統、孫綽等四一人とともに、会稽山陰の蘭亭に集り、修禊の宴を催した時に成った詩集に王羲之が序文を書いたもの。蚕繭紙に鼠鬚筆を用い、いくたびか稿を改めて成ったといわれる。すべて二八行、三三四字。唐太宗が王羲之を崇尚し、智永の弟子彦才から蘭亭序の真蹟を入手して、終生これを愛玩し、その崩御ののち、遺詔により昭陵に殉葬されたという。今、当時の名家や臨模本や、搨書手に摹写させた各種の模本が伝存している。

王羲之の作品にみられる特色としては、キチンと整った固苦しい格構ではなく、ゆがんだ形のとり方をしていいる事が多いが最終的には巧く調和している。しかもそのゆがみは、角度や用筆に一定の癖がなく、縦横無尽に変化しているところである。

米元章

時代背景

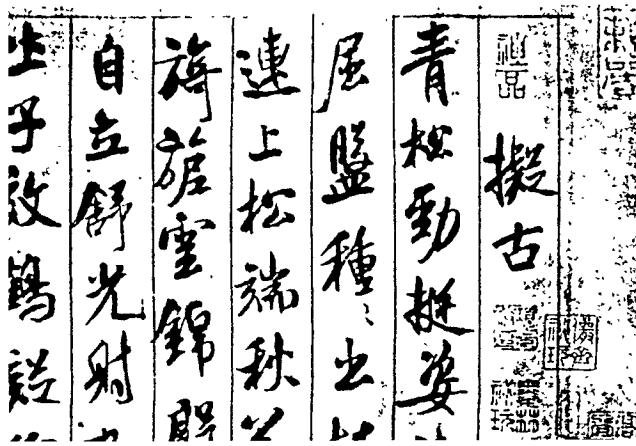
五代分裂の世をうけて、宋朝は中国の統一を成し遂げた。特に南宋の首都である臨安の繁栄は、北宋の首都である開封をしのぎ、人口百五十万を越える大都市に成長した。それは官僚、軍人を主とし商人を加えた一大消費都市であり、宋の文化はこのような平和繁栄の社会を基盤とし開花した。

宋代の書は、従来の貴族文化の中で生まれた書とは全く異なった性質を志向した。それは陰鬱とも見られ峻険な姿ゆえに豊かな心情に欠けるとも言われる。

しかし、そうした内省的な神経質さは、ひとり書に限らず、宋代の文化全般に通じる特質である。それは、政治や文化の担当者が宋代になって変わったということ、宋が絶えず辺境の異民族から脅威を受け続ける閉鎖的國家であったことに起因する。当時の宋は滿州を根拠とした契丹族の遼國が絶えず北方から様子をつうかがい、また西方からは西夏の圧迫を受けなければならなかった。これらの国々と和平のバランスを保つために、宋は毎年、賠償金を支払うという屈辱に甘んじていたのである。

人物像

米芾は本名は黻と名づけていた。元祐六年（西紀一〇九二）四十一歳の時に芾と改名する。字は元章といい、太原（山西省）に居住していた。後に襄陽（河北省）に移り、晩年潤州（江蘇省・鎮江）に住まいを築いた。このことから自らを海岳庵主・海岳外史と称した。別に襄陽漫士・鹿門居士の号がある。崇寧三年（西紀一一〇四）書画學博士に除せら



れ、崇寧四年（西紀一一〇五年）礼部員外郎に擢んでられた。唐宋の時代、礼部で文翰を掌理する

礼部員外郎を南宮舎人と称していたことから、米芾を世に米南宮とも言う。

彼は、宋の仁宗の皇祐三年（西紀一〇五一）に生まれ、徽宗の大觀元年（西紀一一〇七）に五十七歳で没している。

米芾は、宋の開國時の元勳米信の五代目の子孫であった。幼年より天性鋭敏で、母の閻夫人が宣仁皇后に仕えていたことから藩邸のうちで成長し、濮五の家藏の書画にはやくからなじんでいた。十歳以前にすでに顔真卿、周越、蘇子美等の諸名家の書法を臨模し、書法の基礎を作ったという。言うまでもなく、米芾は書の達人であるが、画においても米点と称せられる独自の法によって糝糊たる雲煙の山水画を創作した。また彼は書、書論だけでなく、画においても革命家であった。彼のこうした一時代を画する活力は幼少からの豊かな文芸的環境によって育まれた博学達見によるものであろうが、それ以上に米癩と呼ばれる奇矯な性格に多いに与るものがあつたと考えられる。その上、米芾には書家、画家とは別に書画學博士として他の追隨を許さぬ著実な鑑識の側面がある。もし、米芾を称して革命家の評が当たらぬとすれば、文芸復興の旗手と称すべきであろう。

また、文においては四六駢驩文のように辞句をこらし、数をそろえ、敢えて対句を為すも

のは米市の古なる認識と大きく隔たるものであり、書においては筆画の起筆をいよいよ蔵鋒にしたり、字の大小をそろえ、用筆、運筆が単調で、筆力、筆勢が生き生きとせず作為的であったり、一つの好みを多様した様な書は米市の古雅、古法、古気、古意の範疇とは反するものであったろう。そして、米市の書美学の重要テーマは天真自然であることであった。天真と自然とは本来同一観念である。天性純真の略を天真とみれば、天真は単なる自然とはいささか意を異にする。即ち、天真（純真無垢）というのは一なる未分の世界を意味し、自然とはあらゆる多様を包含した世界である。

米市にとって古と自然は一体不離であり古は即ち自然であり、自然は即ち古である。古と天真もまた同じである。そして、米市の書でこの域に達したものは群玉堂米帖の行書帖か虹県詩巻を置いてはない。

交遊関係

宋王朝の書と言えば誰でも蘇・黄・米・蔡と言う。蘇は蘇軾、黄は黄庭堅、米は米芾、蔡は蔡襄である。そうしてこの四人を宋の四大家と呼びならわしている。

中でも蘇・黄・米の三人は互いに親友として一生交際を続けた。もっとも蘇軾が中心で、黄庭堅と米芾とがその相翼をなしたのである。蘇・黄・米の三人の書を見ると、蘇軾の

書はいかにも気魄雄大である。それに比べて黄庭堅の書は奇峭というか、峭拔というか、一種のけわしさがある。蘇軾も黄庭堅もともに弾学にこつて、当時の名僧に参弾したりなどしているが、この弾の修業では、黄庭堅がとくに深かったらしく、それからきた鋭い機鋒というようなものがおのずから黄庭堅の書にはあらわれでているのではなからうかと思う。米市の書は、蘇・黄の二人にくらべると、王羲之の型をもっとも多く摂取しているようである。ことに王羲之の子の王獻之の筆法を学んでいることは、ほとんど古今の定評となっている。元來米芾は書畫の専門家で、したがって書學に造詣が深く、また書技に熟していたことは、なんといつても蘇・黄の書はいわば文人の餘技である。しかし、それだけでただちに優劣を極めることはできない。蘇・黄・米の偉大さは時代に応じた敏感な感受性と、王羲之に対抗しうる他の源泉の発見と、そしてこれを具象化する天才を必要とするこれを一身に體現したという点にある。この三大家は、明敏にも時代の趨勢を洞見し、王羲之に学びつつも顔眞卿を復興し、もって新たな様式を創造することができたのである。こうしていったん新たな様式が発見されると、これが広く世に受けられるに至ったのは当然のことであった。しかも三家の偉大さはただに新様式を創造したばかりでなく、これを完成させたとしたことにより、ますます輝きを加えるのである。

作品

米芾は早年より、書畫の鑑定にくわしく、朝廷に伺候して、晩年には書畫學博士となり宮中の秘宝を手にすることができた。また、自分自身でも書畫の收藏が多く、臨模に没頭した。こうしたことから、彼は書の各体の筆法に通曉していたが書道上の成果の最も優れたものは、行書である。

大行書

吳江舟中詩 虹県詩巻 學習帖 研山銘

中行書

茗溪詩帖 天衣禪師碑 蜀素帖 李太師帖

小行書

王略帖贊 歐陽脩集古錄跋 始興公帖 大行

皇太后挽詞

張瑞圖

張瑞圖は一五七十年、春、福建省泉州府の南方の霞行郷で生まれる。字は長公、号は二水、自毫庵道者、果亭山人といひ、また別に芥子居子、平等居子等を号した。

三十四歳の時、張瑞圖は泉州で「郷試」に合格し举人となる。翌年、子の潜夫が生まれ字は為竜とした。このころの名書画家には、董其昌、吳淋、張宏等がいた。

その後、三十八歳で進士となり翰林院編修を授かり、正七品の史官として北京で職務についた。

張瑞圖は、若い時には王羲之、王献之に参入したと伝えられるが、もちろん二・三十代には普唐の小楷もだいたひ練習したようである。かつて、「郷試」あるいは「進士」の試験に合格するには細楷に堪能であることが条件の一つであったからである。

西園雅集

李伯時勅唐小字

物州本花竹い妙

四十五歳の時の「西南旅行」は、瑞圖の詩・書・画の創作に大きな精神的影響を与えた。いわゆる瑞圖風と称される独自の風格を表現したのは五十歳のころからである。主な作品として挙げられるのは、西園雅集、前赤壁賦、將軍園中何所蓄などである。

張瑞圖の書はあくまでも文人の書であり、瑞圖は自ら「情動いて作り、情達して止む」といつているが、おそらく彼は非常な才人であり大変な情熱家であったと思われる。瑞圖は明末の四大家として董其昌などと並び称されるが、その作風はむしろ倪元璐、黄道周、王鏊らの表現に近いものがある。明末清初における連綿趣味の傾向を一步先んじて、示した先駆者として瑞圖は重要な位置を占める作家である（倪元璐、黄道周、傅山を明末三大家という）。

一六四一年、七十歳の十二月、生涯に作った詩篇を集めて「自毫庵集」とする。七十二歳の秋から冬にかけての間に瑞圖夫妻は故郷の家で相前後して病没した（享年七十二歳）。

明における張瑞圖
明時代における書の本流は、文徵明を頂点とした呉中派であったが、明末になると文主義の董其昌が登場し、規範的な呉中派に代わって、激情的で華麗な風がおきてきた。張瑞圖もまたその一人である。

張瑞圖は常代文人の作風とも著しく異なった書相を見せており、瑞圖が古法を学びながら

もよく自己を発揮し、新しい独自の書境を開拓したことを物語っているものであり、彼が明末の書人の中でユニークな存在として注目される由縁であろう。

董其昌傳の中に「同時に善書を以て名あるは臨邑の邢侗順天の米萬籟江の張瑞圖なり。時人は邢張董米と謂えり。また南董北米といふ。」とあり、古くから明末の四代家に並び称されていたことが董其昌伝の中らうかがわれる。また、張瑞圖は黄大癡を宗とし画事を善くした。今日伝わる山水観音像羅漢圖などをみると、書と同じように活発なタッチの書風を示している。

張瑞圖の書

前赤壁賦

壬戌之七月

英客泛舟遊於赤壁

清風徐來水波不

張瑞図の作品全般を見ると、草書より晋唐風の楷書的なものが多く見受けられる。そして、この楷書を早書きするために草草の勉強をしたのではないかと想像される。というのは、彼の墨蹟には多く草草の筆法がその根底に認められるからである。彼の作品の特徴として、行間が広いことも手伝って非常にゆったりとした気分が誘われる。「感遠事作六作（五十二歳作）」の最後の第六首など軽快そのものである。

また、瑞図は好んで蘇東波の「赤壁賦」を書いているが、瑞図の作品を通観してみるとあまり連綿草は多くないようである。弱いようでありながら強さを失っていない、運腕自在という言葉があてはまる書である。瑞図が五十三歳の時の主な作品は四点あり（異石詩・季頊詩・袁昂古今書評・後赤壁賦）、この年は瑞図自信、心身ともに快調そのものであったのではないかと思われる程、すぐれた作品を残している。

天啓三年、五十四歳の時は「司経局」に勤務していたのだが、翌年から三年間郷里で休暇を過ごしながら書道三昧の日時を過ごすことができたようである。だから、この時期の書は大変多く残されているようである。この「前赤壁賦」は、書体は九割までが行書体であるが、中に草書を混入し、意の趣くまに自然の調和をはかっている。

瑞図の卷子の中で自由奔放という言葉がびつたり作品のタイトル「將軍園中何所畜（五十

五歳作）」がある。瑞図の真価は草書体よりも行書体、あるいは楷書体にある本領があるようだ。このような狂草的作品は案外少ないので貴重品といえる。

張瑞図に関しては、こだわりのない書法が心憎く、自然の行間を示しているのが非凡といえ、厳しさと大胆さを兼ね備えて一貫して作品を作っているようである。

（エピソード）

張瑞図についておもしろい話が二つある。一つは、大変習字に熱心であった瑞図がある晩ふと奥方の腹の上に指を置き、左にカーブさせたり右に引いたり始めた。奥方はびっくりして目を覚まし、その理由を尋ねると、瑞図は笑って「私は王羲之の草書の筆法を練習していたんだよ。」と言った。奥方は「大丈夫たる者がどうして一流を成すこともなく、妻の腹の上で筆法を習うことは恥ずかしいことではございませんか。」と諫めたので、瑞図はショックを受け志を立ててひたすら練習を重ね、遂に自らの独自の風格を確立したという。

もう一つは、昔、火事が起こった時に廟と周辺の家屋数十軒が類焼したが、ただ門上の瑞図の匾額だけは燃えなかった。この話は、あつというまに評判になり、瑞図の字は火災避けになるといわれた。日本でも瑞図は水屋の生まれ変わりであり、瑞図の書は火災除けになると言われ、上級階級の人々に争って買われ求められたそう。この迷信は瑞図が官吏と

して高い位にあり、人々から尊敬されていたこと、更に瑞図の号が「二水」であった事もあり、いろいろこじつけられて神秘性が加えられ伝えられた。

瑞図は陰世して静かに禪・詩・書・画を楽しむようになったのは、官吏をやめて自身が拘束されなくなっただけからである。

最後に

我が、福岡大学書道部で最も多く書かれている「西園雅集」であるが、この十二幅は実に壮大なもので、一点一点はさほど大きくないものの、一気に書き上げたその気力に圧倒される。最後まで一糸の乱れも見せない技量は全く驚かされる。

問題は形態ではなく、その精神をつかむことだから、各自の個性の上に正しく張瑞図を取り入れてこそ、本物になるのではと思われ。張瑞図のとりこにならぬよう祈ってやまないものだ。

吳昌碩

吳昌碩は、中国近代百年間のなかで、最も傑出した個性的書畫篆刻家である。彼の周辺には数多くの垂流を生み、日本での知人も多いことから、内外での知名度はかなり高いようである。もともと在野の画派であった揚州八怪（清朝盛期、学芸の中心となった江蘇省揚州に集まった八人の文人画家のこと）系の画風をかえって画壇の正統に定首させたその功績は特筆されます。書や篆刻でも第一流ですが、濫作の傾向があって、彼についての評価というより好悪の情は極端に分かれているようだ。

さて、最近百年の中国の生んだ最も個性的な芸術家を一人選ぶとすれば、吳昌碩をおいてほかには求めがたいと思う。彼は一八四四年浙江省に生まれ、一九二七年上海で没するに至ったが、その生涯は何ものにも左右されず、常に自己を見つめ、自己に帰し、充分知り尽くし、他界したのではないでしようか。現在、その名は中国はもとより広く日本にまで知られ、清末の欠くことの出来ない文人として世に認められています。しかし、果たして彼自身が自己を世に知らせる為、盛んな作家活動を行ったのだろうか。

日輝死後
去疾未一自
室掩坐花前
印尚未脱忘以
飢三子乃寤
心似斯子自
兄相像主九
卷拓本款在楊日景
在現存于海新津上博傳
生年
畫日海斯三詩骨
氣の吐老怪也
老乞荒出蘭向
蘭向性名隆自
知舊夜不為

我々が研究を行う中でこの疑問は次第に薄れていった。

彼は決して生活していくためにこれだけの活動を行ったのではない。ましてや、自分の名を売ろうなどという意志があったとはとても思えない。事実、彼は祖父、父、伯父いずれも舉人という読書人、中産階級の家に生まれ、官吏になることが一番早い蓄財の途であったにもかかわらず、篆刻に興味を持つようになり、官吏への志を得ず、というより自ら己に背を向けて趣味で生きる道を敢えて選んだのである。彼は壮年期を殆ど蘇州で過ごし、上海に定住したのは五十歳を過ぎてからのことであるらしい。

最初、その書畫の売れ行きはあまりおもしろくなく、むしろ詩や篆刻の方が好評で、生活もそれ程豊かなものとは言えなかったが、杭州、蘇州、上海などを訪れた際、愈越（曲園）に文章文字の学を、楊峴（見山）に書法と詩文を学び、以後一時に交友が開け、任伯年、張子祥、胡公寿、蒲華、陸灰らの画家や、施旭臣、諸貞壯、沈破、潘祖蔭、吳雲、吳大澂らの文人、収集家を通じて古銅器、古印書畫の臨摹鑑賞に精進し、あまり門前を飾らない生活ぶりは大家にふさわしからぬ極めて簡素なものであったようです。吳昌碩の優れている点は、単に時流から傑出した作家であっただけでなく、彼のおかれた位置、なかでも二十年の中国絵画史の流れの最後の転換期での彼の果たした役割が民族の挽いてきた

戴笠家
 月
 僮尔七浪
 便耕耕
 六自
 贈
 席以文律
 吳昌碩年
 辛亥仲夏

諸問題の接点に立った大きなものであったからなのです。吳昌碩を一人の人間として見ると、その生き様の壮大さと深さとの中間、言葉では言い尽せないほどの人間性を見つけることができる。

次に彼の活動内容に触れてみる。彼は、詩書、画、篆刻の四芸にわたって天才的な作家活動をみせ、しかも、八十四年の生涯を閉じるまで、黙々と書き、彫り続け、その作品の多いことはもちろん、そのいずれをとってみても駄作がないということはいささか驚くばかりである。吳昌碩を近代中国最後の文人に疑し、華やかに咲き誇った清朝文墨界の総括的結論をこの人に求めることは、今日では殆ど常識のごとくなっているのを見ても、彼の業績がいかに優れているか、また、強い影響力を持っていたかを知ることが出来るでしょう。具体的な説明の前に、ここで彼の業績について、わかってもらうためにも、かれの誕生以前の文墨界の動向に触れておこう。

明末から清初期にかけて考証学という学風が勃興し、その伸長に付随したのが金石学で、だんだん古典文字への趣味が高まってきました。

「西欧の社交サロンは着飾った美しい女性達によって彩られ、中国の社交サロンはものさびた金石がこれに代った」という言葉がある。書では古典文字である篆隸などへの関心が宋代には一時燃えあがりはしたが清朝では燃発的な盛り上がりとなった。これも、その

根底には、考証学という学問があったからではないでしょうか。また、画の世界にも大きな変化が起こりつつあった。元来、中国の絵画は北画と南画がその主流を占めていたが、明代中期を過ぎるころから新風を吹き込んだのが文人画なのです。それは極めて人間臭が強く、庶民の心情に迎合する質を多く持ち清代に入り、更にその傾向が強くなっていったのです。庶民と王朝の隔絶に油を注いだのが、いわゆる文人趣味で絵画では文人画、書では金石書法でした。この王朝趣味と庶民の隔絶は、今日ではちよっと想像できないが、吳昌碩はそうした王朝の末期的兆候がかなりはっきりしてきた道光二十四年、浙江省安吉県の小さな読書人の家に正を受けたのでしよう。

では、このへんで具体的な説明に入ろう。吳昌碩の幅広い作家活動の中でも特に彼が心を傾けたものは篆刻であったといわれる。そこで篆書と吳昌碩の結びつきが重要になってくるのだが、事実彼から篆書を除いたならその諸芸は光を失ってしまうかもしれません。詩については、浅学な我々は多くを語ることはできないが、その詩想もまた篆書的ではないかと思われる。

吳昌碩の画は、彼は中国人が君子の象徴として好んだといわれる梅が好きだったらしく、次いで菊、竹、牡丹といった順になるがそれら全体の殆どが花などの系統で山水、人物などはとても少ない。つまりその画材の殆ど

どがごく身辺的なものばかりな点は呉昌碩絵画の特徴といつてよいだろう。しかもそれらの殆どが日本に於いても有名なものであるから日本に於いても彼の作品が愛好されるのは当然だろう。彼の画は、「師承の方法のなかったために苦しんだ」と告白している。山水画への希望もあったのですが、無器用さと中年に始めたことにより、早くに諦めたようだ。

二十九才、人の紹介で当時第一の人氣作家、任伯年に教えを乞うたのだが、結局具體的な示教を受けずに終わっています。しかし、四君子、蓮花、藤、牡丹、芙蓉、桃などの花卉雑画は当時の人氣作家、張態の画譜をひそかに習ったと思われませんが、彼以外に至り得なかった独自の様式を示す強烈な個性的なものなのです。対角線上に花卉を配置したり、また一端にしばった構成をした。そしてその空間に題識の詩文をを配置する趙之謙の手法を習ったのです。

八十二、三才で急に弱った彼ですが、八十四才になって奇蹟的に回復したという。晩年は篆刻や書と同様、独特の画風によって秀れた作品を遺すのですが、以後は依頼の殺到によって構成は一樣になってしまい、また下ぎつい洋紅などを用いて全体として粗雑になってしまった。

次に、呉昌碩の書についてであるが、彼の画が書と調和するのは、その書が秀れていたのはもちろんですが、その技法と同質のもの

がその画に多いからなのです。しかし、あれほど篆書に力を傾けていたにもかかわらず篆書そのままの賛は少なくて、行草作の賛の方が多いのです。彼は生涯の精力を傾けて秦の石鼓文の臨摹にうちこんだ。隸・行・狂・草の書く書体も多く篆籀（秦の李斯の作といわれ、籀書は周、宣王の大史の作と伝える、共に古代の文字）の筆法で書き古風のうちに清新な書風を樹立したのである。

呉昌碩の印刻についても述べておこう。その賛に付随して時には、賛以上に画面の効果を上げているのが印刻です。印刻は明清の正統の流派から鄭完白、趙之謙らの近人まで学び、秦漢の古印に遡って、独自の様式を開拓した。彼の芸術では篆刻が一番早く成就したが、五十二才の頃、リュウマチにかかり、右肩の具合が悪くなり、折角油ののりきった篆刻の制作も思うようにならず、五十六才から七十才までは印刻から遠ざかってしまったのである。

以上、呉昌碩について、かいてきたが、いささかわかりにくく、四年生の研究としては、まったく申し分けなく思っていますが、これを読んで皆さんが呉昌碩について何かしらの興味を持ち自ら研究してくれるようになってもらえれば幸いです。

書心会会員寄稿

一期一會

創立三十年目の提言

四十三年度卒 原 博幸

書道部が創立して三十年の歳月が流れた。戦後、日本の経済は目覚ましい発展を遂げるが、その発展の基幹となったのは、日本人の日本人たる意地と、バイタリテイな精神力や行動力であった。一人では何も出来ないが、二人、三人と団結することによって、大きな「力」（組織力）となり、豊かな「知恵」が生まれていったのだろう。お互いを思いやる心も芽生えてくる。苦しいときには、友情という輪にもなっていた。

福岡大学書道部草創の原動力は、やがて「西日本高等学校揮毫大会」・「福岡学生書道連盟」・「九州学生書道大会」の開催や設立へと、単に一つのクラブの歴史の礎から、裾野を広げてゆく。食いたいものも腹一杯食えなかった時代に生まれた少年たちが、戦後十五年目に成し得たこれらの所産は、いったいだれのために、何のためだったであろうか。

このことを考えるとき、昭和六十二年一月に四十六歳で没した兄、原通幸（昭和三十七

年度卒）の生きざまを、断片的なりとも語っておかなければならないという気がした。彼の偉人伝を書く気などない。むしろ、書くことによって、わが家族の恥をさらすことになってしまった。

生い立ちから

兄、通幸は、昭和十五年九月十八日、中国大陸の満州（現東北）通化省で生まれた。

「通幸」という名も地名に由来して付けられたのだろう。

日中戦争が昭和十二年に勃発して、三年目に二男として生まれた。父（昭和四十七年、西日本高等学校揮毫大会開催日に没す）は、官吏（後、満映に転職）であったという。次兄が生まれ、家族は長男、長女の五人で、中流程度の暮らしをしていたようである。私は、一家が満州から引き揚げた後、昭和二十一年に、妹は二十六年に博多で生まれた。こ

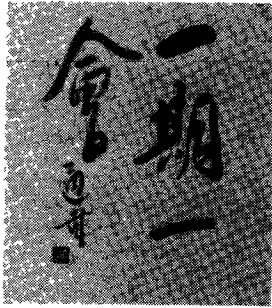
の妹のことについては、後に長兄、次兄（通幸）ともども彼らの人生に大きな関わりをもつことになる。兄・通幸は、四歳のとき、満州で小児麻痺に罹り、以来、右脚が不自由になる。

満州から引き揚げた後も、各地の大学病院を回ったが、「手術しても、直るかどうか保障はできない」という医師の言葉に、治療を諦めざるを得なかったそうである。

少年時代

少年時代の兄は、体育以外は成績が良かったそう、担任は「この子は、必ず大学へ行かせて下さい。」と母に言っている。

兄が小学校の低学年の時、社会科見学に行くことがあり、脚の悪い兄は教室に居残るつもりであったらしい。ところが、どういうなりゆきか、彼も連れて行かれたそうである。



▲ 原 通幸（37年度卒）

遠いうえに、元氣さかりの子供たちのなかでの行軍である。相当つらかったはずである。

運よくその様子を見た知人が、母に知らせてくれた。かけつけて来る母の顔を見つけると兄は何とも嬉しそうな顔をしたそうで、あの顔が忘れられないと母は語っている。

また、高校時代のある時、喧嘩の強い大柄の番長が、皆の前で兄の脚のことを笑ったそうである。いきなり兄は番長にボカリと一発見舞った。今度は反対に何度もなくられたが、なぐられながらも猛然と向かっていったという。母から聞いた担任の談である。

妹の死

妹は、昭和二十六年の六月に、博多の千代で生まれた。高齢出産ということもあり、周囲の反対もあったそうだが、母の決心で出産したという。大変な難産であったらしい。妹は生まれて間もなく、身体に異常があり、彼女の跳んだり、はねたりする姿はあまり思い出さない。兄達は、歳が離れていたせいかわ変可愛がっていたようである。妹の病氣は、当時の医学では不治であったようだ。母はこの頃から信仰に傾倒していった。新興の宗教の教会へ幾度となく通ったことを今でも覚えていた。私が小学校の五年、通幸兄が高二の昭和三十三年の十一月十九日、妹は、私たち家族に看取られ、きれいな目で六人の顔をぐ

ると見回すと、静かに眠って逝った。通幸兄は私を台所の隅に連れて行き、手を痛いほど握るとこう言うのだった。「がんばろうな、○○子の分までがんばろうな。」兄の顔はグシヨグシヨだった。

四年後の昭和三十六年、長男は奇しくも妹と同名の女性と結婚する。通幸兄は、二年後の昭和三十四年に福大の商学部へ入学した。感受性の強い少年の胸に、おさえつけられた情念が今にも爆発しようとしていた。それは、その後の彼の行動が物語っている。

大学・専攻科時代

兄の学生時代のこと、書道部での活動の具体的な話を兄本人から一度も聞いたことがない。私が昭和四十年に入学し、書道部へ入部した折、当時の先輩達から、兄が西日本高等学校揮毫大会や福岡学生書道連盟の設立活動の中心的存在だったこと、部の予算獲得のために、予算の配分権を持つ学文の常任幹事に出身したことなど初めて聞かされたのである。

兄は、高校まで自転車通学していたが、大学からは五〇ccのバイクを脚にしていた。その頃のことを母はこう述懐している。「あの頃、通幸は言葉もでないほど疲れて帰ってきていた。バイクの荷台には、朝持っていた弁当が、手も付けることなくそのままのっていた。」一度、柴田先輩から、兄につ

いてこんな事を聞いた。それは、どんなに多忙なときでも展覧会への出品だけは欠かしたことがなかったということである。部の一員としての自覚がそうさせたのだろう。

就職では当初、兄は一般企業を考えていたようであった。或る会社に一次試験で合格していたが、面接の時、人事担当者は兄の不由な脚を一瞥するや、「やれますか。」と尋ねたそうである。兄がこを蹴ったのは言うまでもない。当時、福大はまだ大学院がなく、その前身に専攻科があった。兄はそこで一年、学修することになる。

唐故通議
大夫行薛

教育者への道

専攻科時代には、かたわら書道塾や珠算塾の教師をしたりと、相変わらず忙しい日々を送っていたようである。そして専攻科の一年を修了すると、市内の創立したばかりの私立の女子商業高校へ、「商業」と「社会科」の教免をひっさげて就職した。後年、通信教育で取得した「書道」の教免は、その当時は持っていなかったが、スタッフ不足やカリキュラムなどの関係上、急に「書道」も教えることになった。書道は得意とはいえず、授業の「書道」とはその性格が違うことだろう、急遽、古典を小森玉陽（俱載）先生、創作を赤木石掃先生に師事し、数ヶ月間の特訓が始まる。後に兄から聞いた話だが、いよいよ「書道」を教壇で教える授業の初めに、生徒へこう言ったそうである。「私は、書道はクラブで勉強したが、免許は持っていない。勉強中である。一生懸命やるのでついて来て欲しい。」プロ書家にも劣らない彼の實力からすると、無免許であることなど、黙っておけば良いものをと、私は一瞬思った。彼の性格の一面を表した出来事だった。

二十三年間の教員生活で、彼の能力が存分に発揮されたのは、管理職者としての面と、生徒指導の二つの面であったのではないかと思う。兄の死期が近づいていた頃、校長が兄に信頼を寄せていた事例を覚えていて、私が校長と、兄の病状のことでお会いした折、兄の病が重いことを初めて知ると校長は少し興奮気味にこう言われるのだった。「彼は、この学校で最も重要な人物です。彼を中心にこの学校は動いているといってもよい。四月から新設する普通科は、彼が賛成してくれたので私も決心したほどです。復帰後は、普通科の責任者（教頭格）のポストが内定している。」また、こうも言われるのあった。「彼の病気が治るのなら、どんなに高価な薬でも、注射でもどんどん使ってください。費用はすべて学校が負担します。」私は校長の言葉を聞くうちに、兄の二十三年間が漠然とではあるがわかるような気がした。

昭和六十二年一月二十八日まで

一番書きたくない部分である。右脚が不自由なこと以外には、身体はむしろ強健だった。

酒も飲んだ。その兄が、身体の不調を訴え、町の病院から、大橋の国立病院へ転院したのは、もう十一月の深い秋であった。私と義姉が、担当医から、末期の（臍臓）ガンであると告げられたのは、それから二週間ほど経った頃である。病室へ戻ると、兄は私の顔を覗き込むように見ながら、微笑みながら、担当医がどんな事を言ったのか、私に尋ねた。私は、最高で完璧の演技をしたつもりだったが、弟の心底を見抜けない兄ではなかったと、今にして思っている。臨終の時、兄は

家族に見守られながら、私の手を妹の時と同じように、強く握り、「頼むぞ、頼むぞ」と何度も繰り返しながら逝った。昭和六十二年一月二十八日の夕刻であった。

今でも母は、あの時の兄の「頼むぞ」は、大がかりな葬儀になるので、私に頼んだものと同様に、強く握り、「頼むぞ、頼むぞ」との真意がわかっていて、残された家族、とりわけ二人の息子達のこと、しっかりと成長していたので大きな心配はなかったはずである。おそらく兄は、母の背にのっていた幼い日からこの臨終の時まで、母親の深い愛に支えられてきたことに感謝しつつ、先立つ不幸を詫びたに違いなかった。そして、後はお袋のことはお前に頼むぞと言いつ残したのである。

五年前、書道部の創立二十五周年の記念展には、兄も元気に出品している。今では、「一期一會」と書かれたこの作品が、絶筆となってしまった。この作品のことを思うにつけ、素晴らしい友人を得て、豊かな人生を四十六年で燃焼させた兄のことを、羨ましく思うのである。

「大きな心で、和を大切に」

ー現、学生のみなさんへー

四十三年度卒 平井晴彦

書道を志す者にとって中国は、憧れの地であらうと思います。それは、漢字書、仮名書に限らず、文学者、美術家の方々も、それぞれの見地から、中国に対する敬愛の心を数々発表されています。

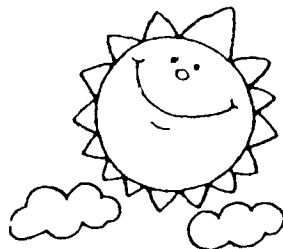
さて私は今年の夏、北京、西安、上海を旅行いたしました。思い起せば私が、小学校、中学校、高校、大学の中で、歴史教育、地理教育を受けましたが、ここが中国と習っても、国交がない国として、「中共」と呼ばれ、遠い国として扱われていました。昭和四十七年、日本、中国両政府間に国交が樹立した時、私は、感動で胸いっぱいの日々でした。

中国と日本は、過去不幸な争いもありましたが、お互いの文化を尊重すべく、固い絆で結ばれた事は、同じ漢字圏の国として、後に続く若者に大きな希望と勇気を与えてくれました。これからは、北朝鮮とも国交が開かれてゆくでしょう。私達も日本人として、心の広い対応をしたいものです。私は、北朝鮮と国交樹立の際は、朝鮮書道史の研究に、朝鮮

半島にも行きたいと思っています。

社会主義圏の国は、日本のように経済水準は高くありません。それは、軍事力を優先した結果だからと言えはそれまでですが、今なお広大な土地に、自然と文化が調和し、魅了するものが、たくさん残っています。このことは、文芸術やマスメディアを通して数多く発表、報道されています。また、若者達は、一生懸命勉強や勤労に勤み、建国の礎となるべく日夜精進を重ねています。私達日本人は、先進国だの、一等国民だのと高慢になるのではなく、誰にでも手を差しのべられる人になって欲しいと私は願っています。それは、古の昔、中国や朝鮮半島の人々が、日本に手を差しのべ、よき文化を伝えたように・・・。そうする事によって、日本に永久の親愛をもつてくれることでしょう。

近年、福岡大学入学試験も難易度の高い大学になりました。その中において書道部も創立三十年、つまり三十才になった訳です。これからは、留学生も多い国際都市福岡の大学生として、外国の学生にも信頼されるような知識を蓄え、感性あふれる大人を目指し、大きな心、広い気持ちで学生書道会をリードしてください。また、社会に巣立たれて後は、高い見識のもと、国際人として自覚ある行動をとられんことを期待しています。



「土壌」

五十一年度卒 山村 昌次

博多駅構内に学生達の声が響く。昭和五十二年二月の春季合宿、江田島への出発の日である。私は幹事としての簡単な挨拶を済ませ、部員と共に広島へ向った。しかし私の心の中には瀬戸内海に浮かぶ江田島の澄み切った青空はなかった。

十月の役員改選で幹事となり、新役員は女性一人を含む七名で、好調な船出をしたものと思われた。役員として初めて取り組む合宿に、連日役員会が行なわれた。春季合宿の目的そして意義、部員の把握、指導更に新入生を迎える体制作り等々、重要な課題は数限りない。私のこの合宿への想いは熱く、いつからか私の主張と彼らの主張とが、食い違いを生じて来たのだ。

この合宿での私の到達目的は部員全員による富士山登頂であり、その為には今回の合宿において英彦山征服を果たすことにあり、この合宿を成功させる為にあらゆる問題を提議し、役員全員で細論を行ない、解決の糸口を探しだし、今後の書道部の指針を見い出したいと望んでいた。しかしながら、彼らの主張は私の云う富士山登頂は理想であり、現実

を考える時、今回の合宿では油山を目指し、最終的に英彦山まで行ければ充分だとの考えであった。連日の役員会の疲労も手伝ってか、ついには、「山村の考えにはついて行けない。所詮理想だ。考えも出尽くした。万全だ！」と私の主張は一蹴されてしまった。多勢に無勢、私はこの合宿計画から一切身を引き、自暴自棄ではあるが、彼ら役員に任せることにした。実際上の口論であり、博多駅に集合するまで彼らと話をする機会はまったくなかった。

私は書道部を去る決意をしていた。それは書道部を退部すると云う訳ではなく、学術文化部会の常任幹事となることだった。自らを高めたい、もっと勉強がしたい、書道部にはない土壌がきつとそこには有ると考えたからだ。

四泊五日の合宿は始まった。討論中心の春季合宿は議事進行、討議内容、生活指導など色々な箇所でも不本意な結果となった。それは私が見て感じた以上に彼らにも苦い経験となった。帰路の電車の中、一人、二人、そして三人が私に対し「自分達の考えが甘かった」「もっと深く議論すべきだった」と反省をし、またある者は「これから書道部の為に頑張ろう」と私に握手を求めて来たではないか。私の主張はたしかに理想であり、時間の許す限りを尽くして討議したとしても、不本意な合宿に終わっていたらう。しかし重要なことは、その最大の危機を好機に切り替えた我々

の反省に他ならない。三年生に進級した我々は、固いチームワークで役員の任期を終えるまで、全ての行事にパーフェクトに近い活動をしたと自負している。

結局私は、常任幹事にはならず、彼らに助けられながら、書道部の幹事として一年間の任期を果たすことができた。

創部三十周年にあたり、すばらしい土壌を創って頂いた柴田一夫会長をはじめとする、諸先輩方に敬意を表すると共に、苦業を共にした前述の六名に対し謝意を表したい。

更に福岡大学書道部が広大かつ肥沃な土壌となるよう努力したい。

暮春之初
亭情
咸集

組織人考

五十四年度卒 岩野 高利

今年の日本シリーズは、西武ライオンズが三十一年ぶりの開幕四連勝という離れ技を演じ、幕を閉じた。第一戦は誰もが予想しなかった五対〇のシャットアウトでの勝利。その後ライオンズの勢いは止まらず、四連勝してチャンピオンフラッグを手にした。後日、某テレビ局が「おめでとー！西武ライオンズ」という番組を放映していたが、その時特に印象に残った西武ライオンズ辻発彦内野手のコメントを紹介したいと思う。彼はチーム内でも非常に地味な選手ではあるが、走・攻・守三拍子揃った玄人受けするタイプの野球人である。彼は、日本シリーズの勝因について「それぞれ自分の置かれた立場を認識し、やるべき仕事をやっただけです。」という言葉を残した。これこそが、サークル活動、ひいては組織人としての原点である気がする。

振り返れば、十四年前大学に入学し、書道部に入部し、役員を控えた時期に、「大学におけるサークル活動とは？」「サークル活動の意義とは」など、夜を徹して語りあかした時代が非常に懐かしく思い出される。それは

また、現在企業の組織の中でも十分に力となり得ていると確信する。

しかしながら、今の子供達は小学校から塾通いが始まり、中学、高校といい大学に入学するために勉強しているものの、集団活動・組織活動という社会教育を経験している学生は少なくなっているのではないだろうか。特別な才能を持つ人間以外は、組織の中で生活してゆく運命にあるのに、何故その勉強をしようとならないのか残念に思う。

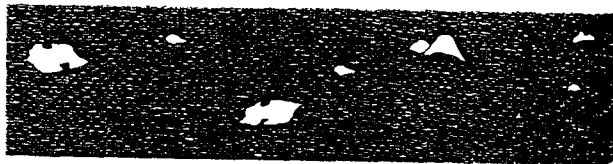
しかし、組織人としての勉強をする立場にある人には「多に勉強しなさい」というエールを声を大にして送りたい。組織力は、価値観・性格・体力・気力が違う人間が集まり、目標を持ち、個人では達成できない物事を作りあげる力であり、構成員はその過程で、自分の能力を高めてゆくものである。多くの機会を掴み、自分の成長する糧とする。ところが、人生の課題であると思う。

組織の中では最初から、決定権のある管理者にはなれないが、最後までその立場になれない人間も数多くいることも事実である。何故そういう差がでてくるかは、先程の辻選手のコメントでわかると思う。

現在の自分が五年後どういう立場の人間になりたいのかを思い描ければ、今何をなし、どうあればいいかが見えてくるはず。人間には能力の差は天才を除いてはほとんどない。差が出るのは、今何をすればいいか認識できているかどうかの積み重ねだと思う。

胸を張り自信をもって、自分の能力を育てる努力をしよう。企業は生き物であるというが、動かしているのは人間です。「人は宝」が企業の基本理念であり、成長の鍵です。時代は変化しても、組織人という考え方はまず消滅することはないと思う。すばらしい学生生活の中で、サークル活動の中で、組織人としての感性を充分培って欲しいと願う。

書道部創立三十周年にあたり、後輩へのメッセージとするとともに自分自身への応援の言葉としたい。



車と共に

五十四年度卒河野清文

車との付き合いは、もう十数年になるが、その間の車とのかかわり方、またその時の気持ちなど、年が経つにつれて段々変わってきているのに気がつく。そのことについて述べていきたい。

ただ、根っからの車好きであることは今も変わっていない。どんな時でも、ハンドルを握る、この行為だけでも気持ちはず落ち着く(但しマイカーでなければいけないが)。そして好きな音楽をかけ、渋滞もなく、コーナーの連続を切り込みながらのドライブは最高である。ストレスなど一遍にとれてしまふほどだ。

さて、最初に車を買った(正確には買ってもらったと言った方がよい)のが大学の三年の終わり、もちろん中古で八年ものであった。中古車店から自宅まで乗って帰る途中、自分の車を運転しているんだなあと言う満足感、それから自宅の駐車場に入れて、マフラーから出るガソリンの排気ガスの臭いを嗅いだときは、今までに感じたことのない感じが、今までの経験で、自分の家にも車が身近になったという、なんとも言えない気持ちは今も忘れられ

ない。

それから私の生活に切り離すことのできない車との付き合いが始まったのです。

まず、スピードに魅せられたというか酔ってしまったようだ。例えばドライブしていても前に車が見えたら追いつかずにはいられないかつたし、のろのろと運転している車には勿論追い越さずに入られないほどだった。

それから、折角飛ばすのだから、格好の良いにこしたことはないと思ひ、ドレスアップすることが始まった。明るめのライト、小さなハンドル、ワイドタイヤにアルミホイールなど。

そうして満足して走っていたのだが、一年が過ぎた頃、今度はもっと大きな、もっとビードの出る、人気車種が欲しくて買うことにした。その頃は見栄で走っていた感じ。ドレスアップは前車以上にしたのは言うまでもない。

ところが、二台とも中古(年代もの)だったので、故障やキズ・サビなどが気になりだして、やはり新車がいいということになるのだが、まだ二台目を買って一年半しか立ってないかったので少し躊躇したもののどうしても欲しくてたまらない。自分なりにいろいろな屁理屈を重ねて買う決心をつけた。

例えば、今の車は当時ティーンエイジが夜毎走り回っていたのと同じ車種なので、社会人としても少し落ち着いたものになしようなどと考えて買ったようだ。

しかし、欲望というのは尽きない。そのころ性能についてもこだわりが強くなりだして、少し不満を残しながらも新車を購入したのだが、そのこだわりが原因でとうとう一年半後にはまた新車を購入してしまった。ずつと性能が良いのはいうまでもない。

この時には、もう満身に満足を重ねてのことだから、これこそ自分の愛車だと誇れる気持ちで、とても大切にしていたし、乗っていても。さらにスピードにたいする魅力は今まで以上になり、よくいろいろなところをドライブしに行っていた。こうしてなんの不満もなく走り続けた充実した三年半が過ぎた。

ところが、色々なところを走っていると一般道ではどうしても安全に飛ばす所が少ないことに気付いた。無理に飛ばして人身事故でも起こしたら大変だという気持ちが湧いてきて、スピードを出すということに関しては今まで以上には興味がなくなりだして、今からはゆったりと乗ろうという気持ちになった。

さて、一般道でのスピードを楽しむことの楽しさが難しいと感じられると、サーキットへ目が向き、レースの迫力に魅せられるようになってきた。今では、カーレースのテレビ中継が深夜で、仕事で疲れていても絶対に見逃すことがないほどとても好きだ。

三年前のこと、幸運にも「F1」日本グランプリを見に行くことができた。鈴鹿サーキット場へ行く急な坂道を自転車息を切らせながら漕いでいると、遠くの方からレーシ

グカーの爆音が「生」で聞こえてきた時の、あの神経の昂ぶった身震いするほどの感動は、言葉に言い表せないほどで、何かその瞬間幼年の時に感動したときのような新鮮な衝撃を感じたことは、生涯忘れることのない想い出になった。そんな自分が本当に車が好きなんだなあと新たに感じたものだった。そんなことで、とにかく、私にとって車とのつきあいは、喜びや楽しさなどを与えてくれる興味の尽きないものになっている。(了)



書道部三十歳の苦悩と

これから

第十九代幹事 森田健二

(はじめに)

今日、ここに書道部が三十周年を無事迎えられることは、誠に喜ばしいことです。これも偏に、ここまでご指導くださいました諸先生方、ならびに、各書心会役員の方々、そして現役学生諸君の努力の結果であることは間違ひありません。大学卒業以来、遠方へ生活の居を移した私共には、年一回送付して下さる「荒鷲」によりその活動を知り、何かの機会に出会ったOB同志で書道部に対する思いをめぐらす事ぐらいしか、なかなか活動に参加できず、皆様方にはただただ御礼を申し上げるばかりです。このたび、三十周年を迎えるにあたり、OBとして寄稿させて頂けることに深く感謝を致します。

(回想)

私が現役として活動していた頃は、二十周年に前後する頃で、役員の頃は、柴田先輩のお宅に行っては、鍋をご馳走していただき、山村先輩の所では、夜遅くまで揮毫大会の件

で討論をし、遠藤先輩には、口に骨が刺さるほど「権兵衛」でウズラを食べさせていただき、荒尾先輩には何度となく酒と墨の乱舞を拝見させていただいた頃です。

夜、いや朝の二時ごろ「ラーメン食いに行こうぞ！」と自修寮のコンパで死んでいた私を、ダイハツフェローで迎えに来ていただいた高倉 潔先輩。車まで行ってみると、同輩の久保山君が、さみしそうな目で運転席に座っていました。今考えると、数々の人が、数々の場面で「墨と、酒と、汗と、涙」を飛び散らしながら、一日の終わりに気づかないまま、四年の終わりに気付く生活だった様に思います。

(当時の問題点)

「書技の向上、人格形成」は、書道部における永遠のテーマですが、それを求める人層によって、あるいは、その時代の背景により大きな流れはあるはずですが。私達が現役として活動していた頃は、部員数が約六十数名いたのではないかと思えます。部としては、以前「ペン習字部」と分離する頃にもっと多くの部員がいたと、柴田先輩や、安河内先輩から聞いた事がありました。

また、人間が増えた分、当然ながら書道という、日本古来の文化が好きで、あるいは、少なからず興味があって入部するわけですか、男子ばかりでは無く、女子部員も増加し

ます。そういう状況の中で、当然ながら、それまでコンパクトであれば、うまく行なえた「部員相互の理解」というものがこれまでの体制だけでは、なかなか消化しきれない何かが生じ始めていました。

その何かを打開しようとする活動のピークに達した時が、今思い起こせば第十九代の時期だったのではなからうかと思えます。先日、もう一度、第三十号の荒鷲を読み返して、思わず苦笑してしまふ言葉がありました。「学年集会」という言葉です。当時もう一つ流行った言葉がありました。「宗教団体」です。私は、役職上、よく学文会や、幹事会等の連中と話をする機会がありました。少なからず当時の学文会の中では、「書道部はすばらしい。」「挨拶一つで書道部員だとわかる。」「各一年生、二年生は、統率が取れ、他の部には無いチームワークがある。」と言われ、確かに他の部に比較して、ある意味で「宗教団体的」に見えたと言われても仕方無いほどに目立つ存在でした。

そのまともりが当時十七代、十八代と培われ、部員数六十数名から成る十九代目の書道部が生まれてきたのだと思えます。堤先輩達の十七代が四回生、大山先輩達の十八代が三回生、そして十九代役員二回生の私達、一回生には十代田君達の二十代が居た頃です。又、学文会へは、高倉潔先輩、岩野先輩そして桑原と、三期つづいて常幹へ上がった時でもありました。その先輩方々、同輩、そして

後輩が一つとなり、二十周年の行事や、各年間行事もそれまで以上に規模、内容とも充実を計れたのだと今でも確信しています。七隈祭の展示を行なっても、一号館だったか、一階は全て書道部が独占する程の広さを使用し、西日本揮毫大会では、当時では、過去最高の出場校を集め、新聞を作成し、対外的にもそれまで以上にアピールするなど数多くの質的な発展もその部員数を有効的な手段として生かす事ができた結果だったと思います。

(問題の変化と時代の流れ)

私も今年で二児の親となり、思えばこの十年間、馬鹿みたいに仕事をして来た様に思います。そんな中である日曜日、三歳になった息子と近くのスーパーへ花火を買いに行きました。その時気付いたのですが、昔は、花火はバラ売りで、駄菓子屋に色々な種類の物が置いてありました。多分、手作りだったのでしょう、線香花火がいつまで消えないか競ったものでした。今は機械生産なのでしょう。か、パックに入って売っています。それが当り前の様に、ローソクが入っていて、セロハンテープでカラフルな台紙に張り付けて、ポリフィルムに包まれています。子供に好きな花火を取りなさいと言っても、千円のバックにするか、千五百円のバックにするかの選択です。少なからず花火は、ロケットがあったり、ヘビがあったり、選択の自由はもっと子

供に与えられていたはずでした。

つまらないたとえ話をしてしまいました。私が大学五年生？の時、愕然とする事がありました。丁度、二十二代の役員がオリンピアで春季合宿の計画を行なっている時でした。私は役員の頃を思い出して、楽しい気持ちでタコ焼きを二百個買って持っていったやりました。ところが、行ってみると、役員全員が暗くふさぎ込んでいるのです。なぜかと尋ねると、同年代の女子部員や後輩達が「昨年と同じような合宿だったら行きたくない。」と言っているらしいのです。かといって、「議題を煮つめて行けば昨年とほぼ変わらない議題討論になってしまうし、またそうしなければ、現役の先輩達から部員総会で何て反対を言われるかわからない。」と言うのです。私は、その言葉を聞いて愕然としながら、よくいう、「自分達の築いてきた物がガラガラと音を立てて崩壊する」その心境でした。またそれに追いつきをかけて土台から崩壊したのは、私が「いっその事、討論をやめて、練習にしたら」と言う、「十月の役員改選の基本方針で討論会型式で承認を受けているのでそれは出来ない」と言うような、どこかで聞いたことのある様な返事が来ました。私はその時怒りなんか感じませんでした。まるで彼らが舵の無くなった舟で嵐に出会った様な場面を想像し、ふびんではありませんでした。

そうさせたのは、我々なのかも知れないと思います。少なからず、我々が役員であっ

た頃も同じような問題はありました。ここで討論会型式の春季合宿の是非を述べ出すと長くなるので省略しますが、彼らに不足しているのは、将に、夢でした。彼らの頭にあるのは、ソフト化された書道部の言葉であり、マニュアル化された考え方だったのです。

たしかに、千円と千五百円の花火の選択の中で育った子供になぜヘビ花火や煙幕を買おうと思わないのかと論じたところで、バックに入った花火を花火だと教えられた人間には理解できないかもしれません。ましてや、店にそれがあつたとしても、花火だとも気付かないし、火を付ける物と知つたにせよ、「いや、それは、花火と種類が違う」と言い出しかねません。

彼ら役員も同様で型のほぼ整った書道部に居て、春季合宿が討論会型式の中で育つて、「先輩がこう言ったら、こう答えるのが正しいのではなからうか、いや少なからずそう答えれば変には思われぬ」と真に受験戦争の中で育てられた彼らにとって、「練習型式」と言つたところで、そういう彼らにとっての考え方の大転換は邪道に過ぎないのかもしれない。

たとえ、私が、「緊急部員総会を開いてでも、真の部員、先輩達との調和を計って方針変更を打ち立て、自分達の思いを訴えろ。」と言つても、その考えは、彼らにとつては、空想に過ぎないのかもしれない。ここに「宗教団体」として、その型でしか存続できない

脆さを見せつけられた思いがしました。とにかく何か価値判断が変わってきている事は確かなのです。役員を終えた三、四回生は、よき相談役でもあり、ある時は真のリーダー足りえなければなりません。当然ながら、私達の諸先輩方もそうして来られたし、私達も、そして二十代も、二十一代の後輩達もそうして来たはずです。しかしながら、少しずつ、ジワジワと、少なくとも私達が役員を終えた頃から何か今まで書道部では生じていなかった時代の変化が起り始めていたのかも知れません。少なからず私はこの事件以来、不安を感じていました。

(世の流れ)

三年程前になると思うのですが、堤先輩と酒を飲む機会がありました。「今の書道部は、俺達OBが何かゆうたらハイッチゅって、ゆうた事はするトバツテンネェ」と、あの先輩らしい話し方を久しぶりに聞いて、懐かしく思う反面、当時不安を感じていた事をふたたび思い出しました。

確かに世の中は新聞を読んでも、テレビを見てもゆったりしながら急速に流れていきます。それは、今日まで仕事しかこの十年間していないかと思う私の周囲にも現われています。

建設会社に入社して、「辞めるんなら、早いほうがいいぞ」と言われながら、コノヤロー

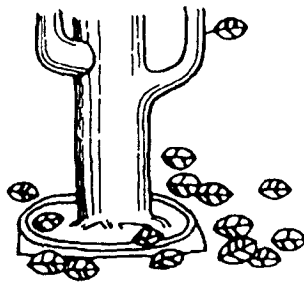
で過ごした十年間。今日では就職戦線は売手市場で社員を確保するのに研修会と言う題目で、実はリゾート施設で会社に入る前からツアー旅行を行なう企業が生れる世の中です。そうして育てられた社員はその楽しい夢が終わった時、仕事の中で自分自身の夢を捜す事が出来るだろうかと思ってみても、現実社員が集まらなければ、それからの対応が考えられないのが現実です。私達は、書道部のなかで、たたかかれても、たたかかれても這い上がる勇氣と夢を先輩諸氏を見ながら学びました。

それが時には、江田島で、時には夏季合宿でありました。しかしながら、今日では、もうそんな事は、現在の教育で、現在の家庭環境で育ててきた学生たちに強制しても、頭の良い彼らは、結論が見えるものにはたいしては意欲が湧かないものなかもしれません。まして、結論は君達を作るんだと浪花節めいた事で説明するのは愚策となる世の中になるのではないのでしょうか。

(終わりに)

ここまで思いつくままに下手な文章で書いてきました。最後に、柴田先輩が三十号の荒鷲の「歴史」という中に書かれていた、第三、四代頃には、特に悲痛なまでの叫びが感じられました。私も書道部に世話になったかぎり、この三十周年を期に、結論は出ませんが、これまで以上にOBとして寄与していかねば

ならないと感じる次第です。



「小さな命が残してくれた愛」

五十六年度卒 原田 明

八月二十四日午前二時三十二分。次々と襲ってくる病魔と闘い続け、精一杯生きようとした杉本裕弥ちゃんが、一歳九か月という小さな命を燃やし尽くしました。日本初の生体肝移植が様々な世論の中で行なわれて二百八十五日目のことでした。

父・明弘さんは、自分が死んでも助けたいと好きな酒と煙草を絶って肝臓移植に備え、明弘さんの兄・英之さんも移植の意志を固めていたそうです。島根医科大学の永末直文助教は手術に対する疑問や批判に対し「目の前に川で溺れている子供がいて、お父さんが飛び込もうとしているのを、危ないからやめなさいと言えますか。息子を助けようという熱意を無にはできません。失敗すれば批判され今の地位も失うかも知れないが、それはどうでもいい。患者の為に最善を尽くすのが、医療の勤めだ。」と言い執刀を決意したのです。移植手術後、母・寿美子さんは「早く退院して、裕弥には、お父さんの働く後ろ姿を見せたい。」と話したといえます。又、明弘さんは「子供が元気になったら、釣りとかキャッチボールとかが出来たらいいなあと思います。

す。」と話したそうです。

結果的に裕弥ちゃんは、余りにも短いその生涯を閉じました。八月二十六日雲ひとつなく澄みきった空のもと、裕弥ちゃんの葬儀が営まれました。永末助教は裕弥ちゃんにむかって「裕弥ちゃん、君と先生が初めて会った日の事を覚えていますか？去年の十月二十一日の事でした。そのとき君は先生を見て泣き出しましたね。先生はそれまで大人の人ばかりを診てきたから、怖い人に映ったのかなあ？裕弥ちゃん、君は優しい家族に囲まれ、胆道閉鎖という病気がなければ先生と会うことはなかったでしょう。君を手術するとき、先生は迷いましたが、君を診てきた木村先生やお父さんとよく話しあって手術を決めました。君のお父さんは、君に肝臓をあげるために何か月も前から準備してきた、とても勇敢のある人です。(中略)無事に正月を迎えて、先生達もとても喜びました。

「ゆうくん」と呼ぶと、君がニコッと微笑み返してくれるのが楽しみでした。君は賢いから、どの先生にもみんな平等に微笑み返してくれましたね。(中略)裕弥ちゃん、先生たちはもっともっと勉強して、裕弥ちゃんと同じような病気の子や、肝臓の悪い大人の人たちを一人でも多く助ける事を君に誓います。それでどうか君を助けてあげられなかった事を許して下さい。」ときに涙で声を詰まらせながらこのように弔辞を読みました。我々でははかり知れない、悲しみと無念が、この言葉

には含まれていることでしょうか。

私も移植問題には少なからず関心を持ち、裕弥ちゃんの闘病を心から励ましてきた一人でした。この文章を書きながらも流れる涙を止めることができません。痛い、苦しいといった言葉すら知らないままに闘い続け、生命の尊さ、生きることの喜びや悲しみを、改めて私に教えてくれた杉本裕弥ちゃん、その棺に納められた、大好きだったミッキーマウスのぬいぐるみと共に、安らかにねむって下さい。又、共に闘ってきた両親や先生、あなたがたは私に、人間としての生き方をまざまざと示して頂きました。その勇氣に心からありがとうございます。

平成二年八月三十一日

岐阜大学付属病院にて

最後に、この文章を書く機会を与えていただいた十九代評議員八谷俊彦君に感謝します。

色師僧智
元乱色主

つまり、人生には、良いことと悪いことが

ついでに、自分もまたその一

喜怒哀楽

五十六年度卒 重松裕人

最近私は、色々な悩みを抱えた人に出くわすことが多いように思う。色んな人が色んな悩みを持ち続けて生きている。と思うとなんだか可笑しくもあり又ふと安堵感を覚えるのである。何故ならば、一人ただ考えていると「どうして私はこんなに苦しいのだろう、とか、こんなに悩まなければならぬのだろう。」などと知らず知らず思っていることがあるのに気づくことがあるものだ。ところが、そうではなく誰もが何時か何処かでそのような気持を持っているのである。だから私は、息がつけそうな可笑しさと共に安堵感を覚えたのだ。

ところで、「喜怒哀楽」とは、文字通り喜び、怒り、哀しみ、楽しさ、の四つの文字を一つにしたものである。つまり、人生の中の感情を表わしている。先に取り上げた苦しいとか、悩みとは、大別すると「哀」に含めることが出来るのではないだろうか。

「喜怒哀楽」の文字は、「喜び」「楽しさ」の陽の文字と挟まれて陰の怒り「哀しみ」が間に置かれている。ここに人の憂いに對する想いが込められている様な気がするのである。

つまり、人生には、良いことと悪いこととが交互に起こるし、良いことはかりが起ることはなく又、悪いことはかりも起ることはない。そして、人はその憂いを乗り越えて打ち消し陽の文字を残そうとして努力しているのだと。

思ってみれば、私の人生も全くしかりである。苦しかったこと悩んだことこれまでも数多くあった様に思う。しかし、それら乗り越えることで良い想いでとし又、そこを礎に大きくなってこれたのだと思う。私にはこれからも、多くの苦悩が待ち受けているのだろう。だとすると私自身、大きくなるために、「喜び」「楽しさ」に換えるためにも努力し続けなければならないと思うのである。

人生

五十八年度卒 志岐 直樹

書道部を卒業して早や六年が過ぎ去り、大阪、京都、そして今ふるさとの地で第二の人生を歩みだしております。そしてこの原稿を書きながら、学生時代夜を明かして酒を呑み、ギターを鳴らしながら夢や、将来、そして書道と語り合ったのがなつかしく思い出されてきます。あの頃はみんなとてつもない夢を抱き、それぞれがお互いにその夢を暖かく見守

っていてくれた感じで、自分もまたその夢が実現するものと固く信じきっていました。それが青春のすばらしさですが、それゆえに他の事は何も考えない向こうみずな所があり、自分のレールがどう変わるかなど知る由もありませんでした。

今現在、木工所という一般的な言う”3K”すなわち、きつい、きたない、危険という世界で働いています。まさかこんな場所に足を踏み入れるなど全く考えも及びませんでした。この世界も、材料を切り、プレスし加工し、出来上がった商品をながめていると、変にうれしさがこみ上げてきてしまいます。

以前の仕事は、月々何億という商売を一人でしていた時期もあり、その時は売り上げがトップになったとかビリに近づいたとかで、喜びも、くやし涙を流したりしました。しかし、その時は、全く感じ得られなかったのですが、今はほんとうに生きてるなあという気がしてしまいます。まだ今の仕事を始めて一週間とたちませんが何故かそう感じてしまいます。

まあ、人それぞれに感性も考え方も違うのですから、何とも言えませんが、今輝く汗を流して第二の人生を奮闘し、またこれも人生かなと、三十前にして今だに青春しているつもりでいるおっちゃんでした。

「職場にて思うこと」

五十七年度卒 床嶋 俊一

近頃、ニューオフィスとかフレックスタイム等の言葉を耳にすることがあります。私の会社でもこのようなスタイルが取り入れられました。ニューオフィスとは、各人に広い机、快適なイス、端末（パソコン）が割り当てられ、そして何よりの特徴は、ある程度広い空間が、個人で占有できるということです。個人を他の空間から区別し、外部の様々な雑音をさげることによって、能率を高めようとするものです。

フレックスタイムは、一日八時間労働をする条件で、十時から三時まで出社していれば、残りの時間をこなすのは、各個人で決めるものです。朝早く仕事をすることも、遅く行って遅く帰るといふことも自由というわけですね。

これらの制度が取り入れられたとき、非常に快適で仕事の能率もはかどり、すばらしい面ばかり考えます。しかし反面、個人に課せられた責任は、従来のシステムよりも非常に重くなります。業務を自ら管理し、自らの計画にのっとり、与えられた期日に成し遂げなければなりません。つまり管理の主体が、今

まで主に会社側に置かれていたことが、一人のコントロールに移行したということですね。

我々日本人の好きな言葉の一つに「一致団結」があります。この意味を私は、皆で力をあわせればなんとか事を成し遂げ得るという旨だと思っていました。しかしこのように世界が又オフィスの中においても変わろうとしている今、もう一度考えてみますとこのように思います。各個人が自らを自覚し能力を存分發揮したものの集合体こそが「一致団結」の本質であると。

特に、仕事を通して感じることは、欧米には「皆で協力する」タイプの考え方は通用しません。国際化が加速度的に広がっている今日、オフィスも欧米式になってきているのです。常に主体的に物事を考え、自分自身をみつめる冷静な判断が必要です。

最後に、これだけ「個人化」が進むということは、反面人と人の摩擦が減るということですね。自己管理と同じくらい人とのコミュニケーションを求めていく気持ちも忘れてはいけないのではないのでしょうか。

我々の心算

「失敗、過ち」

五十七年度卒 丸田 俊和

仕事でも失敗や過ちは、無いに越したことはありません。けれどもそんな完全無欠な人間などいないし、時として思わぬ「失敗、過ち」をしてしまうのです。

いえ物事が順調に進んでいる時の方が多くように思います。一回、二回、三回と物事が順調に運ぶ、何をやってもうまくいく、段々調子に乗って「失敗、過ち」が頭のなかから消えていく。気が大きくなり、緊張感が無くなった時、思いもよらぬ「落とし穴」が……

「勝って兜の緒を締めよ」という言葉があります。これはそういった姿を戒めたものでしょう。

では、そのときにどのような態度を取るべきか、「深く自分の非を認めてすぐに改める」それが平凡ながらも一番望ましいということ。は、たいていの人がわかっています。でも実際には、とかく自分の「失敗、過ち」を隠そうと思いがちで、そのためにさらに無理を重ね、失敗を繰り返し窮地に陥ることが少なくありません。

「失敗、過ち」をしても、それまでの経緯やメンツにこだわらずに素直な心で自分の過

ちを認める事が出来たなら、その人の人間としての値打ちも上がってくるように思えます。

「失敗、過ち」を起こさないようにすることは、大事なことです。それ以上に、起こしたあと自分がどのような態度を取り、処理してゆくか、そのことの方が重大なことに思えます。

それは、自分自身を試されている時だと考えるからです。

書道部員寄稿

部員投稿
テーマ 『人生』

孤独な銃弾

三年 上村 俊英

昭和四十五年三月二十三日朝、私は鹿児島市内の某病院で生まれた。以来ずっと、私は一人という性を背負って行きている。

一人っ子というのは、切なく、哀しい性である。私があることに気付くまで、実に十五年の歳月を費やした。小さい頃は、親の期待を一身に背負い、今よりずっと必死に行き詰っていた。負けん気が強く、勉強でも実生活でも、負けたことが無かった。それだけ敵を作っていた事に気付いたのは、かなり後である。

自分自身が絶対で、自分の欲求は何でも満たされると思っていた。それ故、表面上仲良くしていた友達はいても、皆どこかで私を敬遠していた。どうしてそんなことをするのか、誰も教えてくれない。結論が出たのはある日曜の昼下りのことであった。

自分がどうしてここにいるのか、生きているというのはどういうことなのか。私は小学校二年の時からそれについて悩んでいた。その頃の自分は自分以外の物に対する憧れが強

く、昆虫や魚、亀や鳥を飼い、彼らの生活に、生命の神秘と自由の素晴らしさに魅せられていた。今でも、猫になりたいかと思うことがあるが、以前程感情的ではない。

自分程動物を飼っていると、当然ながらその死に直面することもあった。死んだ者は何も語らないが、自分は逆に、そこから生きていくことの重要さ、生命の重さを教えられたような気がする。

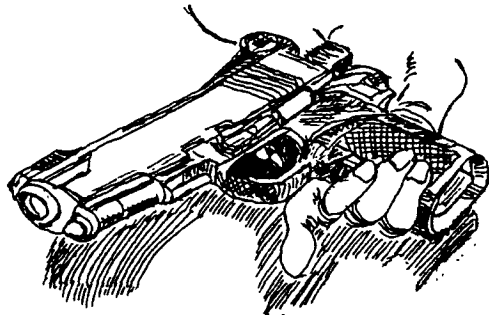
宇宙から地球を望めたことがあるだろうか。現実には無理でも、百科事典等で地球の写真を見たりしたことはあるだろう。そこに徘徊する人間は、まるで見えない。点程にもだ。

当り前のようだが、自分の小ささ、世界の広さを痛感した。小さなことでもめたり、悩んだりしていた自分か滑稽に見えた。

私はこのように、少年の頃から自分より小さい物、大きい物について考えを巡らせてきたが、その創造力の原点になったものは、親が買いつけてくれた様々な本によるものが大きい。そしてそこから得た知識は、後に宗教的、哲学的な物へとまで、かなり早い時期に到達していた。本を読む時間が一番充実していた。その中で強烈だったのは、仏教用語の中にある「色即空、空即色」である。外宇宙にあるものは全てここにあつて内宇宙を創り、内宇宙にあるものは全てここにあつて外宇宙を創っている——といったフラクタルな印象をもつ言葉である。私はそれまで、自分の内的宇宙、インナースペースの割合だけで生きてきたようなものだった。しかしそれ

は、自然と外的宇宙に影響を反していたのだ。要するに、我の強い人間だった。それから五年、二十歳の今、環境の変化、心情の変化等で、自分はどう変わったのだろうか。自分は周りの目にどう変わったのだろうか。それは又、次の節目に明かになるだろう。今はただ、今の人生を生き抜くだけだ。人生は得てして戦いである。

「様をみる。これが私の人生だ。」



人生の岐路

一年 竹井 瑞穂

人間が一生を終えるまでには、記憶に止める事が出来ないほどの分かれ道がある。ほんの一寸隣の道を選んだだけなのに、たどり着く処は大きく異なる。人がこの世に生を受け、否、母親の胎内に宿った瞬間から人生が始まり、そして第一の岐路に立つ。誰しも裕福で暖かい家庭の子供として生まれることを望む。だが、この時点では、自身に選択の意思表示は出来ない。自分の人生の第一の岐路で両親によって選ばれた道に人生の第一歩を記す。私は心の中でほんの少し不満を感じながらも家族の選んだ道を歩みながら十九年と十ヶ月の人生経験をつんだ。人生八十年と言われている現代、その四分の一を過ごしたうち、「まさに人生の岐路に立たされた」と思われる事が二度有ったことを記憶している。

一度目は高校受験であった。親の指し小す道は選ばなかった。しかし、自分は言うに及ばず、家族皆で望んでくれた結果を得ることが出来た。

今、三年間の高校生活を振り返ったとき、「自分の選んだ道は正しかった」と確信した。二度目は大学受験であった。親の意見が自分の考えよりはるかに道理になつていてと思った。自分のやるうとしてしている事は

かに無鉄砲であるかということも判つていた。

しかし、吉と出るか、凶と出るか誰にも判らない。自分が行動によって答えを出すしかないと思いついて道を選んだ。そして進んだ。覚悟の上での結果ではあったが悔やまされた。家族は私に対してよく言う。「どうすれば良いかは自分で考えて自分で決めなさい。あなたの人生だから」と。成るほど、私の人生は私のものかも知れない。しかし、自分で考え、自分で選んでからと言って、一人で生きては行けない。必ず家族を巻き込む。そして家族の人生をも狂わしてしまう。自分で道を誤ったが故に二十年の自分の人生が無意味になったように思えた。過ぎ去った十年を含め今からの人生をどう生きるか。

今また人生の岐路に立っている。しかし急ぐまい。今少し足踏みしながら、家族に、友人に、先輩に、相談しながら見つけよう、進む道を。自分の大切な人生だから。

人の道

四年 山本 佳正

「人生」とは何ぞや、深く考えてみたが結論は見つからない。人生について今まで深く考えた事がなかったからである。

そこでまず辞典を引いてみた。そこには、まず「人生」とは、「人がこの世に生きているあいだ。人の一生」とだけ記されていた。はて、

辞典でもよく理解できない。通常「人生」とは人の一生を指す場合が多いように思う。人はこの世に生を受けてから死ぬまでのあいだ、約八十年から九十年ぐらいこの世で生活をしている。この生きている間に様々な人と出会い、経験、体験するのである。当たり前ではあるが、この経験、体験することは人によって違う。人によって生きる年数も短かったりなが長かったりする。でも、短いにせよ長いにせよ、その与えられた年数のなかで人は誰でも、生懸命生きている。生きようとしているのである。

しかし不思議である。生まれたときは、みな一緒である（生れつきハンデをせおっている人は除く）のに、年を重ねていくうちに、様々な生き方、生活をした。スポーツ選手になる人、学者になる人、はたまた犯罪人になる人、大富豪になる人と多種多様な「人生」を送る。私を含めて、人の生を見てみるとまるで一本の決められたレールの上を生きてきているのではないかと錯覚することさえある。

私自身の今までの二十二年間を振り返ってみるとやはり様々な出会い別れがあった。幼稚園、小学校入学、転校そして卒業。そして、それまでのなかで一番劇的である私自身にとっても他人にとっても一番重要であったはずの中学校時代。第一の「人生」の分岐点でもあったはずだ。このころ、わたしたちの中学校在学中が一番、新聞などで「校内暴力」など

「自分の選んだ道は正しかった」と確信した。二度目は大学受験であった。親の意見が自分の考えよりもはるかに道理にかなっていると思った。自分のやろうとしている事はいととりあげられ騒がれた時期であった。私の通っていた中学校も例外でもなかった。授業ポイコットや教師に対しての反抗的態度などなど。みな、若かったのである。しかしこの時期から自分の進むべき道を間違った人たちがかなりいたはずだ。高校に入ってからもうである。軽はずみな行動から、高校退学を余儀なくされた人達、自分の意志ではなしに。後悔している者もいれば、今の自分の現状を踏まえて頑張り、その状況からの自分の人生を築いている者もいる。人間、生きて

いる間に、何度となく「人生」の岐路と呼ばれるものに遭遇する。そして、本来、自分の進むもうとしている道から引きずり降りそうとする見えない手と言うものもある。今のところ私自身は、自分で納得のした「人生」の道を進んでいるようである。運のいいことに。しかし、いつ人生の苦境に遭遇するかもしれない。それも自分の「人生」なのかもしれない。だが、そこで諦めずを決められたレールの上を進んでいるのなら、そのレールの分岐点を無理矢理にでも変えてやろうと頑張っただけの「人生」を納得のいくようにしたい。

結局、私自身の考える「人生」とは、自分自身の存在の跡をこの世に残したいがために存在する場ではないかと思う今日この頃である。

大事な事なかつたからである。

そこでまず辞典を引いてみた。そこには、まず「人生」とは、「人がこの世に生きているあいだ。人の一生」とだけ記されていた。はて、たいへんなじんせい

二年 牧 利弥

昭和四十五年六月十八日、父牧利一母房子の間に生まれる。厳密には六月十七日の二十三日五十分頃であったと母に聞いた。私の人生はこのころから波乱に飛んだものなのでした。今まで生きてきた二十年間の人生の中で波乱に飛んだものを紹介しましょう。

その一、幼稚園時代、入園式の日私の母親は迷子になって私をほったらかしてしまい、困った私は勝手に帰ってしまい、記念写真には〇で囲まれた写真になってしまいました。

その二、小学校の頃、帰るとき毎日寄り道をしていた僕等の軍団は、秋になると必ず、野山を駆けめぐり季節の果物を口にするため探険に行くのでした。その探険の最中畑を荒らしまくっていたら農家のオヤジに出くわしおっかけ回され、やっとのことでそのオヤジからは逃げれましたが走り回っている途中で木の切株につまずいて底なし沼のような所に「どぶん！」と落ちてしまいあわてた彼は木の枝にしがみついていたがその木の枝はみょうに軽く、やはり折れていたもので、その少年はまさに、「わらをも捕む」といった心境でした。その三、中学時代、修学旅行での出来事、その夜はクラスごとに出し物を披露する日のことで、無事に自分達の出し物を終えた後、まだその余韻が覚めず、とうとう我々の

ても他人にとっても一番重要であったはずの中学校時代。第一の「人生」の分岐点でもあったはずだ。このころ、わたしたちの中学校在学中が一番、新聞などで「校内暴力」など

クラスの一部で、「えっさっさ」という日体大伝統の踊りをするようになった。前に出たのはいいものみんなに取り囲まれた私は、大衆の前でパ〇ツ一枚にされてしまい、勢いに流されて踊ってしまいました(そのときの写真が卒業アルバムに堂々とのっていたのは、こんなバカな私でも、かなりのショックを受けました。)

その四、高校時代、数あるハブニングの中で一番悲惨でみじめだったのが、これもやっぱり修学旅行でしょう。新設でおしおきの好きな我々の先生方に、修学旅行でも正座の連発をくらうのでした。たった十五分しかない風呂の時間、俺ともう一人の友人は、出る時間をほんの一分だけオーバーしたために、先生に呼び出されおせっきょうをくらうのでした。そのときまじめに反省し先生の目を見てみると、なぜだか先生は、「何だその目は」と言っただけに腹立たしげに言うのでした。(後にその目の原因は、スキーでの雪焼けによるものだとわかりました。) ようやくゆるしてもらって、先生の悪口を言いたく帰って行くと、十分後ぐらいに、部屋に電話が入り、その悪口が全部聞こえたらしく、また呼び出されてしまいました。この旅行では合計六%八時間程正座していたようです。前途多難な人生、これからどんな恐怖が待ち受けているでしょう。

二年 山村 陽子

ある時ふと考えてみる。私が結婚するまであと十年もないんだ。十年後には私ももう三十歳。一応子供もいるんだろうなあ。どんな人間になつてゐるんだろうか。昔から平凡なOLだけにはなりたくない。高校を卒業したら大学に行こうと思つてはいたけれど、いざ大学に入つてみると、今のところ何の目的も持っていないので、早いうちに自分のしたい事をはっきりと決めて努力しなくちゃならない。さて、私が無事に卒業できたとする。就職は、結婚後も続けられる職業につき、就職して何年か経つて結婚する。本当は若いお母さんっていうのが好きだから、なるべく早く結婚したいけど、それはちょっと難しいだろう。でも考えてみると、母が結婚したのは二十二歳の時だから、私が大学を卒業する頃なんだよなあ。ま年齢的に若いお母さんが無理なら精神的に若ければいいんだ。子供には友達感覚で接するのがいいな。自分の親は、私から見ると厳しくて、何でも気軽に話せる雰囲気じゃなかったから、自分の家庭はオープンな家族、親子もアメリカとかみたくない友達関係でいい。それから子供の数。一人っ子ってのは何かとかわいそうだから二人以上がいい。といつても多すぎるのも手がかか

つてちょっと大変。やっぱり最初は男の子、次に女の子がいい。お兄ちゃんと妹の図つてのがなんとなく好きだから。

子供にはのびのびと育ててほしいなあ。自分が今まで田舎の空気もきれいな所で育ててきたから、都会のごみごみとした所には住みたくない。のんびりとした所に住んで、子供が広い庭を走りまわつて楽しそうに遊んでいるのがいい。嫌がつているのに強制的に何かをさせたりしないで、子供が興味を示したものを伸ばしてやりたい。

私は漫画が好きで、結構いろいろ読むけど、うちの母は、漫画なんか読んじやダメっていつも言っていた。それでも隠れて読んでいて、コミックスも二百冊以上集めた。私が親になったら、子供に今日あれの発売日やつたよね帰りに買ってきて、とかいって一緒に読んでるような気がする。

うちの親が厳しくて嫌な面もあったけど、見習いたい面もある。うちは兄弟三人で、兄と私は大学、妹は高校に通っている。一遍に人も、しかもうちからじゃ自宅通学の大学に行くのはほとんど不可能なので、二人とも一人暮らしをして通っているが、仕送り、学費は相当な額必要だと思う。だけど毎月定額仕送りしてもらい、普段は無理してバイトしなくてもなんとか暮らしている。それは、両親が、私達が小さい頃に先のことを考えて、少しずつ積み立てをしてくれたからだと思う。そのお陰で大学にもいける。こんなと

ことはやっぱり見習いたいな。

将来のこと考えるのは結構楽しい。どんな事を考えようと自由だから。今思っていることを現実に実行できたらいいだろうな。

片手にバット心に書道部唇に〇〇

背中にも人生を

四年 大瀬 千加志

ピッチャー大瀬君第一球投げた！。そういえば俺って一年生の頃は書道部っていえば、ソフトしか参加しなかったなあ、でもソフトがなかったら書道部に残っているわけなかったよな。バッター打った。それが今や、授業にはいかねど部活は行くみたいだな、でも二年になって部活に顔出すようになって、やっぱり周りがいい奴はっかりだったからこまでやってこれたんだよなあ、おーと、強烈なピッチャー返し、大瀬君捕った、一塁送球アウト。大学入って授業もロクに行かずこれで書道部もやめてたら最悪だったかもしれない。やっぱり役員やるのがいちばん楽しいよな、うん。役員改選の話し合いで寝れない毎日が続いたのにそれがどんなに楽しかったことか、企画やって行事ごと前に立って目立てるのがどんなにおもしろかったか、とってもせい沢な経験をさせてもらったなあ
三番バッター大瀬君、ピッチャー一球目を投げました。内角低目のストレートだ！

「見る」と厳しく、何でも気軽に話せる雰囲気じゃなかったから、自分の家庭はオープンな家族、親子もアメリカとかみたいな友達関係ののに憧れる。それから子供の数。一人っ子ってのは何かとかわいそうだから二人以上がいい。といっても多すぎるのも手がかか考えてみれば今こうして決勝を戦っていられているっていうのは俺は幸せ者だなあ、今度生まれ変わっても絶対好きなことをずっとやっていていな。やっぱり人間は何でも楽しくやるのが一番たっぴ。けど、ただ、楽な仕事を買って、好きなことやって、好きな女とイチヤついてずっと生きていければ一番楽しいだろう！って、そんなんじゃない。そんなじゃない。自分がいる位置、自分の選んだ場所、その環境、その時、いつとときを自分がどうやって楽しくするか。俺はそうしたい。大瀬君うった！打球は左中間と真中やぶった。あーベース一周するのは長いな、ま、これからもっと長い長い人生がまっているけれど、どうせチャランポランな俺だから就職してもそんなんだらうな。でも絶対、何かしたいと思ったらサクッとやる。みたいなノリは大切にしてい。当然徹夜して遊ぶし、徹夜して仕事する。外野を打球が抜けて一所懸命ベースを周っててもホームランになるかもしれないと思ったら全然苦しくなくてドキドキワクワクするし、ホームランになってホームに帰ってきたら目茶うれしい。おれはそんな人生を送りたい。ランナー、二塁ピッチャー大瀬君、投げた。カキーン！バット打った！センターオーバーホームラン。大瀬くんマウンド上でうずくまる。きつとこれからも逆転ホームランとか打たれることがあるに違いない。七転八起とか挫折を繰り返して、人間は大きくなるという言葉がある。



は相当な必要だと思っ。送りしてもらい、普段は無理してバイトしなくてもなんとか暮らしていける。それは、両親が、私達が小さい頃に先のことを考えて、少しずつ積み立てをしてきていたからだと思う。そのお陰で大学にもいける。こんなとはっきり言って俺は嫌いだ。転びたくないし、最初っから転ぶつもりはない。でも、ま、逆転ホームランを打たれたら、のほほんとして、次にやっぱり逆転ホームランを狙うんだ！
最終回二死満塁、ハッター宮崎くん。ピッチャー投げた、あー空振り三振試合終了二十対九生〇研究部の勝ち……。

か、企画やって行事ことに前に立てて目立てるのがどんなにおもしろかったか、とってもぜい沢な経験をさせてもらったなあ
三番バッター大瀬君、ピッチャー一球目を投げました。内角低目のストレートだ！
出会
一年 大倉 隆雄

私には、生まれてから今日までの間に、数えきれないほど多くの色々な人々との「出会い」があった。
まず一番最初に両親・兄・妹との「出会い」があり、それから幼稚園、小学校、中学校、高校、大学に行き本当に様々な人々との「出会い」があったと思う。しかし、「出会い」というものは、運命的なものであり、また実に不思議なものだと思う。
例えば、番身近なところで考えてみると、私は、この福岡大学に入学し、書道部に入部したわけだが、もし福岡県以外の大学に行って書道部に入っている、みんなに出会うことはなかったらうし、また福岡県内の大学に行っても書道部に入らなくても出会うことはなかったのだから全く「出会い」というものは不思議である。そして、福岡大学に入っても他のサークルに入っていれば、この二万人以上もいる広い大学内で書道部のみんなに出会うこともなかったらうと思う。
しかし、私が思うに、人は人生における数々の「出会い」によって一歩一歩、成長していくのではないかと思う。多くの人々と「出会い」そして、その多くの出会う人々から色々な多くのことを学び、自分にプラスにしていることができると思う。だから、「出会い」

というものは、人生において重要であり、不可欠なものであると思う。

ところが、人生には「出合い」があれば当然のごとく「別れ」があるわけだが、私にも色々多くの「別れ」があった。もしかしたら、「出合い」と同じくらいの数ほどの「別れ」があったかもしれない。しかしながら、「別れ」があるからこそまた、多くの新しい「出合い」が人生にはあり、多くの「別れ」も人生には大切であり、絶対になくしてはならないものだと思う。

これからの人生でも、多くの「出合い」があると思うけど一つ一つの「出合い」を大切に、その「出合い」からもまた多くのことを学び、自分に役立てていきたいと思う。

「人生」

三年 藤井 美佳

「生きている」そして「生きていく」自分自身の人生を考えると、この言葉を思い出す。これは小学校時代の担任の先生からお教わったものです。この言葉が私の心に焼き付いて離れないのです。

この言葉の意味は、生きるということとはただ「生きている」のではなくて、自分で考え、自分から進んで「生きていく」ことが、望ましいということである。

この言葉を聞いたとき、私は深く感動し、これからの私は、生きていくことをモットー

に、生きていこうと思ったのです。

でも、今の私は、ただ、「生きている」のだと思う。毎日、毎日、学校に行き、授業を受け、何となくバイトをする。何をするにも「何となく」なのである。大学に入ってから、二年とちょっとのあいだ、ずーっとこんなかんじだったと思います。ふとしたときにこんな生活に悔いを覚えます。大学には大きな夢を描いて入学してきました。それは、今でも変わりはありません。それでも、大学生活も後半になつてしまい、先のことを考えるあまりつい、今までのことも反省してしまふのです。私としては大学生の間しかできないことをしたかった。もちろん今からでも遅くないと思うけれど。

大学生は、短大生や、社会人と比べ、自由が多く恵まれていて、自分を見つめるには一番よいときだと思います。又、多くの可能性をもつて入る時機だと思えます。私も自分の道を決めるためにいったのですが、その目標を達せずにいる。大学生のうちにはかできないことについても別にもっと遊ぶとか、もっと勉強するとかもっと友人をつくるとかではなく、自分でも分からないけれど、それよりもっと違ったことをしたい。今からの大学生活は、それがなんなのか探していきたい。だれにもそうだろうが私にも将来の夢はある。四年生になると就職活動をしていくが一步でも夢に近づいていくようにしていきたいと思っている。悔いの残らないように。

今までだったらと書いてきたが、この大学生活が失敗したとは思っていない。完全な難しいものだし。ただ、これからの生活をもっともっと充実させていきたい。「生きていく」といえるようにしたい。

今、一年生、二年生の皆さんには、とにかく精一杯頑張ってもらいたいと思います。何事にも、全力投球で。

「人生」なんて事を考えていると、どうしても暗くなってしまうけれど、まだまだ先はあるし、たった二十年しかたっていないのだから。とにかく、自分らしく生きていきたい。

故是諸

為著我

法相即

何以故

我人衆

しいということである。
この言葉を聞いたとき、私は深く感動し、これからの私は、生きていくことをモットー

人生

一年 井上 勇生

「人生について語る」とは言っても、たかか十九年、人に語れるようなすばらしい人生を送ってきたわけでもなく、強いて言えば、悪い面では「運に恵まれなかった」「努力が報われた例がなかった」よい面で言うなら「皆の中心で存在価値のある人間として生きてこれた」ということである。しかしこの「運に恵まれなかった」と言うことで自分の人間としての「人を許す」という優しさ、苦境に立ったときの抵抗力を身につけたことはこれから先、生きていく上での重要な財産になったがする。

小さい頃から人を傷つけることを何とも思わなかった自分が、すぐに暴力に頼った自分が、いまはこうやって小中時代の旧友が憧れる大学生となり、平凡な人間として生きていくことに誇りを持っている。今考えると、「運が悪かった」というのは単なる言い訳であって、人に足を引っぱられた事もあったが、自分が相手に迷惑をかけて足を引っぱたことも少なからずあったことなのだから。「努力が報われなかった」ことも自分の努力が一步か、それとも半歩か足りなかったのだし、努力したことはプラスにこそなれ、マイナスにはならない。いつか役に立つと信じて

る。四年生になると就職活動をしていくが一步でも夢に近づいていくようにしていきたいと思っている。悔いの残らないように。

そのことについてはもう言うまいと決めていた。暗い話題になったので話を変えさせてもらおうと、自分の人生でもう一つ重要なことがある。それは「恋愛」ということである。（入江さんは「ついに-outか!」と思ったでしようが・・・）でもね、本当だよ。人として人を好きになるということは大切なことだと思

うんですよ。（金八先生が俺は）私について言わせてもらえば、自分が好きになる娘と好かれる娘があまり噛み合わなかったことだ。特に高校以後は一度もない。なんとも思っていない娘や友達だと思っている娘や知らない娘には、「好きだ」だの「つき合え」だの言われるのに自分が好きな子に死ぬほど勇気を出して告白すると「友達以上には想えても恋人未満にしか想えない」とか、勇気をふりしぼって言おうとしたところで「それから先は言わないで欲しい」だとぎげんなよコラッ！そんなことはピー・・・てから言えよボケナス！俺はね、いくらブスでも好きでもない娘でも真剣に接してきたのよ、うん。それなのに何故？って、思った。友達には「神様のいたずらとしか思えん。」なんて言って笑ってたけどあれってすげー寂しいねえ、つらいねえ。

でも、笑ってごまかしても、どんな時でも、半分以上も俺の気持ち分かってくれるバカ野郎がいてくれた。でもそいつは余計なこととは言わなかった。それがたまらなくうれし

我人衆

かったよ、うん。それでね、どんな娘から告白されても断られなかった。それがかえって相手を傷つけたことは本当に失敗だったと思うし、今後改める点だと思うけどさ、短い人生、短い大学生活思いつき楽しんでやるぜ。この野郎！
皆さんも恋愛についても人生についても追及して勉強しましょう。古い昔からみんな同じ様なことやってんだよきつと。

現代をしたたかに生きる人生

四年 中倉 幹人

悪とはなにか分らない。
善というものが、なんとなく分かりやすいのに対して、悪というものは、どうにも分かりにくくてきているものである。

あるいは、善に対立するもの、善の反対物、それが悪であるといえるのかもしれない。しかし、たとえは倒立ちの国にいったとすれば、山は低く谷が高く見えるように、その悪はたちまち善になり替わってしまうのだから、それは悪とは言えないのである。倒立している国は現実には存在しないので、そのような比喩は無意味であるといえるかもしれないが、しかし、精神の倒立はいたるところに見られるのではないだろうか。
又、われわれの生活は、禁止とともに始まる。……してはならない、といたるるところに

書いてある。もしも、その禁止を犯してしまつたら、たちまち、情容赦なく制裁がくだされる。しかも、十重二十重にそんな禁止にとりかこまれていて、息さえもつまりそうである。たぶん、われわれは、閉じられた社会に生きているのではないだろうか。

しかし、禁断の木の実は、たえずわれわれを誘惑するように、悪はつねに魅力的である。

もしかすると、悪とはあまりにすばらしいものなので、それに近づけないために、恐ろしいなべールをつけ、禁止の柵をはりめぐらせているのかもしれない。あるいは悪は、強制された、閉じられた社会からとび出すための、鍵であるのかもしれない。

悪は、エネルギーにみちている。情熱に輝いている。対象に積極的に働きかけようとする活力にあふれている。

悪の欠如が善である。たぶん善は、対象にたちむかおうとする積極的な姿勢を欠いた、一つの空白にすぎないのだろう。あるいは、悪をなすほどの勇気がなかったから、なにもしないでいるだけのこと、それが善である、といえはいいのかもしれない。

なにごとにしろ、ことをなすには悪意が必要だろう。偉大さの裏には、つねに悪意が潜んでいるのかもしれない。

しかし、文頭に書いたように、善と悪の区別がつけにくいものである。それはつまり、この世の中には、善もなければ悪もないのではないだろうか。目的が完全に果たされた時、す

べての手段は必ず正当化されるのではないか。
以上が私が今まで生きてきて感じたことである。しかし、悪意をもって生きていけないのが、普通の人の生き方であろう。



私の人生の必需品

二年 渡辺 太郎

初めてタバコを吸ったのは、高校二年のとき、太宰府天満宮でのことだ。オレたち三人は、学校の帰りはいつも、そこでタバコをふかしながらバカな話に花を咲かせていたんだ。初めのうちは、煙を肺に吸い込むとすぐ、頭がくらくらして、まるで小舟に乗ってような気がしてたよ。「こりゃ、やめれねーな。」って、そのときから感じてた。それから一週間後くらいだったかな、ついてなかった。その場所にだべってるのを先生たちに見つかっちゃって、「おさむ」とオレは、吸ってないって言いはったんだけど、「平井」はしゃべっちゃまって、結局平井だけ停学になってた。それからオレたちは、たまり場を神社の境内のうらの林の中に入った。

当時オレはキャストを吸ってたんだ。初めて吸ったのもそれで、あんがいかるいタバコだから初心者向きのタバコだ。タバコを吸いはじめると、だれが何を吸ってるか、とか、どんな吸い方がカッコイイとか、少なからず気になるものだ。そんなときに、おさむから題名は忘れたけどフランス映画を見せられた。テレビの画面にブショールヒゲをはやした男がズボンのポケットに手を入れて両切りのタバコに火をつけていた。話の内容はおもし

ろくなかったけど、その男のしぐさだけは覚えてる。その男のカッコよさはたぶんタバコを吸った者以外にはわからないと思ってる。でも自分の顔と体形では、あの男のようなシブさは表現できないことを悲しく思う。それからまたあるとき、プラトーンを見た。ヘルメットにマールボロをひっかけていた。そして上半身裸の男が、しわしわのタバコをふかしている。カッコよかった。だからオレは、しわしわのタバコは好きだ。そしてオレもマールボロを吸おうと思って一箱買ったが、まずかったので一箱でやめちゃった。高校三年の文化祭の日だったかなあ。オレとおさむは文化委員のやってて文化祭そのものをしきってた。帰りにうち上げてことで、ビール買ってある公園で二人で飲んだ。日もすっかりしずんでタバコの火だけひかっていた。もう高三だったし、進路のことやら好きな子のことやら色々話してたっけ。今考えてみたら、本当にしょーもないこと真顔で話して、笑ったり悩んだりしてたと思うよ。まだケツの青いガキがタバコ吸ってビール飲んでさ。でもそんなもんなよなあ。オレたちが高校のときやってたことって。タバコ吸ってると、ふとその時のことか思い出してほえましく、なつかしくなるんよね。あの頃吸ったタバコの味もね。

今のところ人生において、タバコは必需品の私であるが、スキヤキより焼肉の方が好きであった。

卒業・就職・結婚

三年 原口 磨美

六月十四日、午後十二時二十五分、養父が他界しました。発病してたったの数ヶ月でこの世を去りました。養父と私とは、血の繋がりは全く

ないのですが、私を幼い頃からとてもかわいがってくれました。"磨美"という名を私に付けてくれたのも養父でした。(実父の実家、人吉に流れる球磨川から一字取り、"磨"いて美しくなるように)"と付けられたそうです。

"あと二年、生きていれば、まみちゃんの卒業式に出れたのにねエ。"

"まみの就職は、ちゃんと決めてやる。"

て言っていたのにねエ。"様々な人に、こう言われます。本人も、私の結婚式には杖をついてでも出る。と口癖のように言っていました。せめて、あと三年、生きていてくれたら

。と思わないわけではないのですか、人はどうあるべきか、どう生きるべきか、これから先のことを、養父からたくさん教わりました。私は、養父の気持を受け継いだと思っ

ているので、何の不安も後悔ありません。

養父は亡くなる日、「こんな所では死にたくない。」と退院してきました。最後に入院した時は、もう食べ物の中に入れることも



できず、点滴だけで栄養を取っていたので、退院すれば、どうなるか。養父も分かっていたと思います。「もういい。もう十分してもらった。」そして、「楽しかった。」と言って息を引き取ったそうです。

今、私が思い出す養父は、いつも堂々として、常に物事の先の先まで見て、頑固で、人に煙たがられても、決して自分を曲げない。たとえ壁にぶつかっても逃げたりしない。自分の責任は、絶対自分で取る。そんな姿です。考えてみれば、人に頼ることをせず、孤独な一生だったかもしれませぬ。けれど、自分で納得して生き、最後に楽しかったと言えるような人生を送った養父に、人はどう生きるべきか。身を持って教えてもらったような気がします。

来年に控えている就職も、それから結婚も迷った時は、養父の姿を思い出して、最後に"楽しかった。"と言えるような人生を送りたい。そう思っています。

「人生」と書いて人が生きると読む。これはその人の生まれてから死ぬまでの総称であるか、その生まれてから死ぬまでの間に人はいろいろな事を為す。一生を土と共に暮らす者もあれば、物を盗んで生きていく者もある。人に奉仕してそれを生き甲斐にしている者もあれば、人に害なして生活の糧とする者もある。それらは手段こそ違うが、「生きていく」という同じ目的の為に日々の活動をしているのである。

人は太古の時代より何度か種の滅亡の危機に顔してきた。氷河期の人類などは世界的に見ても数える程しかいなかったという。またペストの蔓延した十四世紀のヨーロッパは、人口の四分の一が死に、日本でも何度も飢饉や病気に見舞われている。

しかしその度に人間は互いに身を寄せ合い、病気の対抗策を考え、時には仲間の肉を食らい、生き延びてきたのである。それは種の保存の為に、などというものではなく、ただ純粹に生き延びたい！生きていたい！という本能がそうさせるのである。

そんな事当然じゃないかと思うかもしれないが、これは大変なことなのだ。なぜなら人間以外の動物が寒いから、病気が流行ったか

ら、食料危機だからといって何か特別な事をするだろうか？

人間は何故これ程までに生きてきたがり、またその目的は何なのか。自分は今までいろいろ考えてきたが、去年その質問に対する一つの提案にふつかった。それは原理研で聞いた話だが、人は神が世界で最後に造ったものであり、神が全神全霊を傾けて造られた。だから神は人を愛し、人は父なる神を喜ばす為に生きていくというのである。

全く鼻持ちならぬ話である。それでは人は神の為に生きていくことになる。しかしからん話で、自分はこの話を信じていない。

それでは何故生きていくのか。結論から言うと自分にはまだ分からない。これは自分の考え不足という意味ではなく、現在の人類には分からないという意味である。

人はいつも他人を憎んだり、うらやんだりしてきた。それは人間の悪の感情でそれを克服すれば「進化」したことになるのである。

人間は今まで自分達に不都合な飢えや病気を取り除いてきた。それは大いなる物的な「進歩」であるが、精神的な「進化」はほとんどなかったのである。

ところで人間の生きる目的は分からないと言った。それは全人類が少しずつ「進化」していき、憎しみも恨みも感じず、他人に対して心の底から喜び合える時が来た時、人類はその生きるという目的を理解するのたと思う。その時が来る迄人は生きていき、少しずつ

も「進化」していかなくてはいけないのである。

脱線

「人生論」を書くかと思って机に書いた。

その時、目の前を、我が家の子犬が横切った。「キヨピン」、「キヨピョン」、「キヨヤン」と僕のご主人は、こんな風に僕を呼ぶ。無茶苦茶である。ムチャクチャという言葉はきつとムチャクチャ苦いお茶を飲んだ人が、言ったのかしらん。それで、僕の名前は清四郎である。僕の夢は、偉大な人に仕える犬になることだった。僕は、胸をときめかせご主人に対面した。その時、ご主人は、僕には目もくれず僕と同じ種の雌犬を抱き上げ、「こっちのがかわいい」などといい、彼女に未練を残しつつ僕を買った。僕は、前途を見たような気がした。渋谷の八公君や、優秀なご主人に恵まれ小説の主人公にまてなった某猫君のことが、脳裏をよぎった。

ご主人は、ひよいと僕を抱き上げTVの前に座らせる。いっしょにビデオを見ようという。「名犬ラッシー」という文字が画面に浮かび上がる。「やっぱり最初が、肝腎よね。」などとやっている。どうやら、これを見せて僕を英才教育しようとしているらしい。まさか、それで一儲けしようなどとまでは考えて

いないと思いたい。さらに、ご主人は、まだ小さいので一日中眠って過ごす僕に、何もそこまで付き合わなくていいのと思うくらい寝て過ごす。ナポレオンは、三時間しか眠らなかつた。また、一歩、夢から遠退いた。さつきからご主人は、人生について何か書き物をしているが、かんばしくないらしく途中でうっちゃってTVを見たり、眠っている僕を起こして手なぐさみにしたり、夏中、活字から遠ざかっていたせいか辞書で漢字の確認に余念がない。ご主人が、およそ人生論などとは無関係な人間に限りなく近い人間であることは僕は、知っている。が、このままでいいけない。これは、ご主人も自覚している。そう、このままでいいけない。早く人生論を書かなくては、人生とは。そう、私の人生とは、うーん……。僕は聞いた。主人の力を借りずとも世に名を残せるかもしれない。人間を再教育した犬として脚光を浴びる日がくるかもしれない。よく、ペットは飼い主に似るといわれる。嫌いな言葉である。「てもねえキヨピン、これで一応あんたの名前も書き物として残るわけよ。まあ、機嫌直して」。



「人生」

三年 安藤 智恵

喜……テストがおわった時

友達から手紙が来たとき

夏の空に。秋の空に。冬の田んぼに。

春の海に。紀子さんの結婚式に。

アイスクリームをたべている時

サイフが戻って来た日

大学に行かせてもらっていること。

きつと私は感情の起伏は、季節と時間と体調と対人関係によるものではないかな。

怒……実験用ネズミにかまれた時に

つかれがピークに達した時に

やつあたり。人間関係がうまくいかないとき

犬に追いかけられた時。

空腹の時。体調がよくない日。

何と単調な生活でしょう。

でもこれも私の人生の一部であるとしてここにのこしておこうかと思いかいています。。。

哀……試験の結果に……。

失恋したときとその後何日間か。

ひとりでごはんをたべている時。

サイフをおとした日。

カサをなくしたこと。

最近思うことは、自分が忘れっぽくなって来たことです。自分の持ちものに愛着を感じないまま、買ったばかりの物を、どこかへ置きざりにするなんて。

楽……ごはんの時間

お風呂に入っているひととき。

マンガをよんでいる時

おしゃべりしている時

バスに乗っている時。散歩の時間

頭がもうろうとして、うまく思考がまわっていかないけど、私の思考回路は限りなく円にちかい形のような気がしました。結局、元のところへもどってしまうのです。

「人生」 「私は……」

二年 平田 光子

私は約二十年前とある病院で産ぶ声をあげた。それからスクスクと育ち我ながらに信じられないのだがもうすぐ二十歳である。

しかし実際はまだまだ子どもでっちとも大人らしくない。あーどうなるのやら……

私は上にもしたにもいない一人っ子である。

私はなぜかお兄さんが欲しかったのだ。TVやマンガに出てくるようなかっこよくて素敵……というのは無理にしてもやさしくていいお兄さんが欲しかった。

世間一般に言われる”一人っ子”は”甘やかされて育ち、わがままで自己中心で何でも自分の思い通りになって……”と挙げればきりがないが、自分はなぜかさめた一人っ子だったのでそういう風に言われるのが嫌いで頼にさわっていた。まあ全然思いあたらぬ節がないというわけではないが嫌だった。

しかし、これまで考えてみて淋しいと思ったことはそうたいしてなかった。それは現実だから仕方ないと自分で納得していたからだろうか。

しかし、相部屋でもいいから二段ベッドでもいいから……と自分なりに想像したりすることもあった。でも他の友だちに言わせてみると自分一人の世界が作れる一人っ子がいいという声もある。

まあ子どもの間はそれでもよいだろうが、将来のことなど現実的なことを考えると非常に不安で他に頼れる相手がいないということはとても悲しいことだと思う。

それに親にしてみるとあらゆる期待を自分に賭けているわけでその期待が重すぎてかえって負担に思えてくる。

まあ一人っ子にもいろんなタイプがありまして、本当に甘えん坊のわがまま屋さん・逆にしっかりしていてまじめな人・明るくおおらかな人……と種々だ。

この書道部にもいろんな一人っ子の方がいてなぜか嬉しい。全員が全員同じ考えかどうかはわからないが少しは共通する部分もあると

思う。

しかしあれこれ書いたが悪いことばかりでもなくて……。子どもながらに、こう言えば反対されるに決まってるが最後は親が折れるだろうと思ひ込みそれで成功したこともあったが残念ながら頑固な親で……

でも親の愛情は一人だろうが何人だろうが同じなわけでその愛情にそむかず成長することを一番望んでいるのではないかと思う。大学生になって親元を離れてそう思った。

あーくソまじめなことをダラダラと書いてしまったが、本人は結構のはほんとしていて自分でもよくわかっていのかという状態だ。しかし今は今。先はどうであれ今を楽しみたい。まだまだ子どもの私には遊ぶ方が楽しいのである。

人生指標

一年 中山 美津子

自分には自分にしかないものがある。そしてそれはかけがいのないものだと思う。他人がどうだといって別にうらやむことも悲しむこともない。でも他人は自分よりなんだか良く見えて自分をだめだとか、それでいいのかわらぬと迷ったりするかもしれない。

しかし人は人、自分は自分らしく生きるべきだ。せっかく生きる人生なのだから、他人の目など気にせずに自分が人生の主人公であ

るという自覚をもって努力していくことだ。

他人の評価など気にせずに自分自身の評価をどうするかにもっと注意を払わなくてはならない。他人の評価を気にするようであれば、大きく伸びることは難しいと思う。他人にはめられて喜ぶような人間は、自分に自信のない人間だ。もっと大きなものを相手にして生きてこそ、人生というものははなかるか。

人間というものは弱いもので、自分に不利なことはあまり認めたくないものだし、受け入れたくない。だがいくら自分に不利なものでもまず肯定的に受け入れるべきだ。

先生から怒られたといつては文句を言うようでは何も成長しない。自分の立場からだけで物事を判断すると真実が見えなくなっていく。自分の立場や損得を捨てて、あるがままにもものを見るべきだ。そうすれば、今までこだわってきたものが、あまりにもつまらないことだったと思えてくるだろう。

時々自分で自分の事を悪いように考え、人とも話をするのも嫌になる時があると思う。

でもそれは、ただひねくれているだけ、どこにも実体はないのに、自分の曲がってしまった心が妄想をうみ、その妄想によってさらに曲がっていくんだと思う。自分だけで判断せず、まず肯定的に受け入れて、しっかり現実の状況を見抜いてそして行動をし、考えるべきだと思う。もしたら素直なひろい、こたわりのない心になるだろう。そうならば人生に恐れるものは何もなくなってくると思

はわからないが少しは共通する部分もあると

の目など気にせず自分が人生の主人公であ

生に恐れるものは何もなくなってくると思

う。

それならば、これからどのようにすればいいのか。特に大切なことは、信念を持つことだ。しかしそれも自分に都合のいいものでは自分もまわりの人にもいいことはない。まわりの人たちのために自分の持っている力を役立ててもらいたいと思えるようになれば、素晴らしい人生になると思う。

こういう事を書いた自分も、はたしてどれだけの人間かはわからないが、これから卒業までには、人間的に成長していきたい。

によるの悲惨な人生

二年 立石 成美

ある一人の女子大生を“による”と呼ぶことにしよう。なぜ“による”と呼ぶのか？って、それは、ある人が彼女のことをそう呼ぶからである。(まあそんなことは、どうでもいいことかもしれないが：)

“による”は、十九年間生きてきたわけですが、すでに二度の人生挫折を経験してきているのです。(まだ若いのに、なんてかわいそうなんでしょう。)

“による”にとつての初めての挫折というのは、中学時代の頃に起きたのです。“による”は、陸上部に所属していたので、毎日授業が終るとグラウンドで青春していたのです。しかし、ある日顧問の先生からクラブを

一ヶ月休めと言われたのでした。それというのも“による”は、生まれつき左足のひざの骨が少し欠けていたのです。(これは、軟骨と言って生まれつき骨が欠けていて骨が成長する度に、その部分が痛くなるものです。)

“による”は、その痛みをこらえて毎日練習していたせいで、足が悪化していき手術しなければ陸上を続けることは、出来ないとい医者にいわれても痛みをこらえて練習していたのです。その為に、数日間歩くことさえできなかったのです。“による”は、高校に入っても陸上を続けようと思っていたのですが、手術をしてまでも陸上を続けられなかったのです。実を言うと“による”は、日本体育大学に行きたかったのですが、陸上を断念するとともにあきらめなければならなかったのです。足さえ悪くなかったら：。

二度目の挫折—それは、大学不合格ということです。“による”は、日体大をあきらめた後、中学の数学の先生になりたかったのです。まさか福岡教育大学を落ちるとは、少しも考えていなかったのです。スベリ止めとして福大を受けたわけですが、まさか福大に来るはめになるうとは：。

こうして“による”は、悲惨な人生を歩んできたのです。今、なんと法律の勉強をしているのです。あれほど社会が嫌いだった“による”だったんですけど：。もうここまで来るとこの先どうにでもなればいいんだと思ってしまうている。“による”なのです。これで

は、いけないと“による”に愛の手を：。

「人生」

四年 大久保 美智代

「私の人生」といっても、いまだ二十一年間ブラスアルファしか過ごしていない。長かった様で、実際は、一世紀の五分の一、または人生の四分の一に相当するもの。それに地球がヒックバンによって誕生してからだと微々たるものだ。ましてや、「私はこれをしました！」と胸をはって見えるものはあるはずもない。とりあえず、これから大学を卒業して自分の足であるいていくわけだが、どんな波乱万丈の人生が待っているのか見当もつかない。明日、交通事故であえなく昇天するかもしれないし、ちまたでは、九年後に地球が滅亡してしまうとか、「それならば、がむしやらにはたらいで、九年後に「パツ」と消え失せるより、遊んで暮らしたほうが得よ。」ときり気なく言う人もいる。ケーセラセラ、成るようになれ！のごとく彼女は生きていくとか。彼女の言い分もよく理解できるが、仮に、九年後にみんな失せなくて、何十年か後にふりかえって見て、自慢できるような魅力的な人生が送れたらと思う。ただ、将来に関して重要な事項であたふたとすごしたこの半年間を感じてからは、充実した日々を送れそうな予感がする。「バックトゥザフューチ

「ヤー」のように、過去やら未来やらと飛び回る車は存在しないのだから、過去を自由に変えられないし、未来も、のぞけない。こういう車が作成できるならば、恐ろしいものだ。たった一台でも存在したために、映画のように、右往左往しなければならぬ。まして、そのような車の生産がおこなわれたら、恐ろしいを絶するものがある。スクリーンの中で充分である。「バックトゥザフューチャー3」は、ビデオで見る予定だ。

最後に、書道部なので一応書道についてだが、これは、私にとっては、趣味としていきたい。十数年間筆をもってきて、今の自分の性格が、文字として表れるのが、多少は読み取れるようになった。たいしたことではないけれども、かなり、欲求不満の解消の手段となっている。

風になれ光になれ

一年 山下 泰史

その時僕は真夏のグラウンドの上に立っていた。第六十五回全国高校サッカー選手権大会福岡県予選三回戦県大会出場を決める試合だ。

グラウンドに立ちキックオフを待つ間、頭の中でこれまでの道のりが走馬灯のように駆けぬけた。それは二年の春九州大会の福岡北部大会予選から始まった。実力のある一年の加

入により充実した我チームはなんと決勝リーグまで勝ち残ったのである。決勝リーグではまけたもののこのことは一ヶ月後に行なわれる高校総体予選に向けて大きな自信になった。一ヶ月後に行なわれた高校総体予選では、チームの目標である県大会出場はまちがいないと思っていた自分達だったが、自信が過信になったのか一回戦で二一で負けてしまった。試合後重い足どりで会場を後にして、バスの中でもたれも話さず暗い雰囲気だったが、三年の先輩が、「負けたもんはしょうがないやないか、次の選手権で県大会又目指せばいいやんか」と言いみんなも呼応して、「選手権で県大会までいこうや」という声上がり自分でも「今日の借りは選手権で倍にして返してやる」と誓った。その時から選手権大会の県大会出場への目標へ向かってスタートをきったのである。次の日からまずチームの課題を克服することを中心に練習を行った。まずスタミナのなさを克服するため毎日五K mランニング十階段・坂道ダッシュをやり又あらゆる種類の体力トレーニングをこなして体力増強を計った。又、パスがつかないという課題は、練習や紅白試合で、一回触ったら次はパスを出さないといけないツータッチサッカーやダイレクトパスだけでやるワンタッチサッカーを行うことで克服していった。こういった練習を三ヶ月間続ける途中練習がハードすぎてケガをしたり、胃液をはきながら練習をしていたやつもいたが皆



めて二一の同点になった。しかし、自分足

て六年間を過ごした。今、思い返してみると「なぜ入部したのか」と考え込んでしま

前の試合で負けた悔しさを忘れなかったし、県大会に本当に行きたかったしなんといつてもみんなサッカーが好きだったのてこの間の激しい練習を文句一つ言わずこなしていった。

そしてとうとう選手権大会の日がおとずれた。練習の成果が出たのか一・二回戦は共に二一〇のスコアで勝ち、次の三回戦に勝てば県大会に出場できるという所まで来た。

三回戦の相手は、福岡北部で一・二を争う強豪チームだったが、チームの雰囲気も盛り上がりかけていたので絶対勝って県大会に出てみせるとみんな思って試合に挑んだ。

試合は前半やはりこれまでのチームとはけた違いのスピードで攻めてくる相手チームの攻撃を必死で耐えるという形になった。だが前半残り十分の所で、DFがクリアしたボールをMF陣がつかぎ最後はゴール前に上ったセンターリンクを、キャプテンでもあるCFがキーパーにせり勝ってゴールを決めた。

まさかの先取点に全員点を取ったキャプテンの元を集まり大喜びだった。そして相手チームもまさかの欠点に動揺したのか、それから自分たちのチームが攻めっぱなしだった結果一一〇で前半を終了した。

そして後半こんな所では負けられないという相手チームの意地と県大会に出るんだという自分たちの意地とが激しくぶつかり合いますに一進一退の試合になった。しかし後半半分開りで相手チームがゴール前のFKを直接決

めて一一一の同点になった。しかし、自分足達チームもがっくりすることなく勝ちこし点を狙って攻撃した。しかし後半残り五分、とうとう相手チームのCFに逆転のシュートを決められてしまった。残り五分、自分たちも必死に攻め終了直前コーナーキックのチャンスを得た。僕がボールをコーナーに置き蹴ろうとした瞬間「ピピッ」と試合終了の笛がなかった。「負けた」と思った瞬間がっくりと

コーナーの所でうなだれていた。するとキャプテンがやってきて、「よくやった。俺は今日で引退やけどお前はあと一年あるやないか。次は絶対県大会にでろよ」とはげましてくれた。思わず涙がでそうになったか、くっ

とこらえてグラウンドをあとにした。この試合が高2最後の試合でありそして高校三年間最高の試合であった。そして、今思うと、この時期が風のようにすぎ去った自分の二十年間の人生の中で最も光輝やっていた時期だったのではないだろうか。

今までとこれから

年 梅崎 剛

十八年間生きてきました。人生八十年のうちのこと十八年間しか生きていないのに色々なことがあった。色々なことが心の中に残っている。

今まで中学、高校と部活道(柔道)に入っ

て六年間を過ごした。今、思い返してみると「なぜ入部したのかな」と考え込んでしまふ。中学のときも高校のときも「後悔先に立たず」と思った。

そして、今、書道部に入部して、「後悔先に立たず」とは思っていない。というのは過去を振り返ってみると、入部したらしまったで引退してじんとくるものがあったからである。書道部でもきつと・・・今までは毎月のように授業を受けてきた。勝手に決められた授業を一日中朝から晩まで、聞く聞かないは別として毎日のように、しかし今は大学生、時間割は好きなように決められる、講義も好きなものを選ぶことができるようになったし一日中受けなくてもよい、しかも授業をさぼっても誰もおこらない。昔とくらへたらまるで天国で楽な方へ楽な方へと流されていく自分を止められるのは自分しかない。これからは講義にきちんと出席して、睡眠学習をしているように思われぬようにちゃんと起きて講義に出ようと思う。

これからはできるだけいろんなスポーツをやってみたい、たとえば合気道や空手などいままでやったことのないスポーツ(格闘技)やバトミントンや卓球など少ししかやったことのないスポーツをもっとすることにしようそのスポーツをする人と友達になつたり、自分にあったものを見つけてことができるかもしれないからである。

これから何十年と生きて行くだろう。生き

ていく中でつらいことがたくさんあるだろうし楽しいこともたくさんあるだろう。人生とは「神がさだめた運命というレールの上を進むものである」と考えている。だからいやな事があってもこれは運命だとあきらめることができる。だからあまりなやまず生きられる。

最後に過去のことである「今まで」を大切に、未来のことである「これから」に夢を持って生きていこうと思う。

出会い

二年 川波 久美子

もうすぐ年齢の十のケタの数字が、一から二にかわってしまいます。(きっとこの原稿が掲載されるころには、とっくにかわっているでしょう。)すてにかわっている人は口々に二十才すぎたらもう後は同じなどといって、私をおとしくれます。十九才になったときは、あと一年で二十才だとうしようと考えていた私も、誕生日が近づくにつれて、どうせ何をやっていてもどう考えても、もうすぐ二十才になってしまうんだから仕方ないやと聞き直ってしまう今日此頃です。

この前テレビである人の伝記みたいなのを見ていて思ったんですが、私たちが何げなく過ごしている日々の出来事というのは後で振り返ってみるとすごい分岐点だったりすること

があるのではないかなと感じました。そしてその出来事の中でもその人の生き方を大きく変えてしまうのは、“出会い”ではないかと思うのです。

悲しいとか嬉しいとかいう私たちの諸々の感情は、小さな子供の頃から、見たり、聞いたり、感じたりして学んでいます。そして、私たちが一番初めに会合う人というのは、両親で、両親が私たちの人生に大きな役割をはたしているのは、いうまでもないことです。自分の人生は自分で決めるのはあたりまえですが、私達は直接的または、間接的に他の人たちと関わりあって時間をすごしてきました、これからもすごしていかなければなりません。その時間の中でかわりあったものや人、出会いというのではないかと思います。

その人の生き方を変えてしまうような出会いはそうないとは思いますが、色々な人や物と出会うことによって、経験がたまれると思います。どんな経験でもつむことによって、私たちの人生の又は人格のはばというものがつくのではないのでしょうか。はばがあるということは、その人に余裕があるということだと思えますから、時には、今まですごした時間を、振り返ってみてみるのはどうでしょうか。

人生を前だけを見て歩いていくのはすごいことだと思えますが、困難な問題にぶつかった時、心をもちつけて、少しだけ振り返って後を見たらその困難を解決できるヒントがある

かもしれません。

今までの、そしてこれからの時間を大切にすごすために、“出会い”というものは大切にしたいものです。

私の「人生」

三年 江川 美和子

人間、生きていると、いろんな感情をもっと思えます。感情って、いろいろと変わりやすいものです。泣いたり、笑ったり、怒ったり、悲しんだり・・・不思議なことに、ちょっとした事で、瞬間的に変わるもんなんです。人間って繊細なんですね!?

高校時代に、自覚したことが一つあります。朝、家を出る時点で、親とケンカをしていたとします。当然、気分はムカムカなんです。友人が迎えにきても、何か顔が固いんです。でも、学校に向かっていく途中、いろんな事を話していく中で、だんだんと楽しくなってくるわけです。学校にいった時はもう High の状態です。みんなに会うと、これがまたうれいわけです。なんて単純なんだろうと、我ながら思います。今は少し変わってきてるんです。学校につくと、楽しいというより、ホッとするんです。校内に人がパラパラといて、友人と晴れた日に、ベンチで座っている時なんて、最高の私のくつろぎ Time です。ポーツとして、これ

が人生一つの楽しみなんていったら、悲しすぎるでしょう。気持ちがいいもんですよ。ところで、何の感情も顔に表れない人もいます。これは、私には一番恐いもんなんです。何を考えているのかわからないんですから。とうとう風に接していいかわかんなくなるわけです。顔で笑って、心で泣いて・・・なんてこと誰にもあると思いますけど。しかし感情が、そのまんま顔に出るというのも、ちょっと困りもなかみしません。周りに、その雰囲気を通してしまいますから（みなさんごめんなさい。私です）まだまだ子供なんです。人生、二十年生きてきて、果たしてこれだけ成長してきたのかわかりません。でも確実に変わっていくものです。これから先も、いろんな事があったって、泣いたり、笑ったりしていくと思います。でも、いつだって楽しく過ごせるはず。かんばって生きていきます。

人生

二年 原田 慎太郎

「人生」「ロマン」「喜怒哀楽」の中から一つ選んで、それについて書け、と先輩に言われ、自分は「人生」というのを、選んだが、まだこの年齢では「人生」がどういふものかさえわかっていない。

広辞苑で「人生」を調べて見ると、次のように書いてあった。「人が此の世で生きるこ

と、人間の生存、生活。人が此の世で生きて

いる間、人の一生

また「人生」という語はいろいろなことわざ等につかわれている。「人生、行路難し」「人生朝露の如し」「人生僅か五十年」とあるが、内容は、人生には艱難苦勞があつて容易でなく、人生とは短いものである、といったものである。

自分たちはもう約二十年という人生をおくってきたが、実に早かった。今後あと五十年近くあるが、あつという間に過ぎていくだろう。小さかったころ思っていた夢など一つも達成できていない。これが一生なのだろうか、と最近つくづく思う。でも自分が生きていくかぎり夢はすてたくないと思う。

一生というものは、一度だけ、その一瞬でしかないと思う。自分の思ったふうに、すきなように、のんびりと、べつに名譽や位なんていらぬ、一つでも悔いの少ない人生を送りたい。プライドは捨てたくない。友人と話しているとき、プライドは捨てても、名譽は捨てられん、と言う。考え方は、人それぞれがうけれど、この考え方を一方的に否定してはいけぬと思つても、自分はそうはいきまいたと思う。プライドを捨てて生きていくということかどういふものなのか、考えることもできない。プライドとは、誇り、自尊心、自尊心のことである。プライドだけでは人生を送ることはできないが羞恥心だけでは生きていくことなんてとうていできやしない。

最後にこのプライドについてのすきな詞がある。で次に書きたいと思う。

PRIDE

思うようにいかないもんだな呟きながら階段を登る夜明けのドアへたどり着いたら、昨日のニュースと手紙があつた折れた体をベッドに投げ込んで君の別れを、何度も見つめてた伝えられない事ばかりが悲しみの顔で駆けぬけてく心の鍵を壊されても失せないものがあつたプライド

光りの糸はレースの向こうに誰かの影を運んで来たよやさしい気持ちで目を細めたとき手を差しのべるマリアが見えた何が真実かわからない時がある夢にのり込んで傷ついて知ること

誰も知らない涙の跡抱きしめそねた恋や夢や思い上がりと笑われても

譲れないものがあるプライド……

作詞飛鳥涼

人生

一年 坂井 喜久代

「人生はどのようなのですか。」と聞かれて、うまく答えることができる程、人生経験も、積んでいないわけですが、「人生」というのは、人の生きてきた道を自分なりに解釈して今までの自分の「人生」を少し語ってみましょう。

小中学生の私は、あまり信じてもらえないかもしれませんが、大人しく消極的な子供でした。そんな自分が私は、いやでした。

しかし、高校の時、私はある一つの出来事をきっかけとして、変わったと思います。その出来事と言うのは、自分にとって非常に悲しいものでした。しかし、かえって私には、自覚が生まれ、あらゆる事に積極的に参加できるようになりました。中学時代の友人や先生から「変わった。」と言われ、どんなに残念なことがあっても笑っていられるようになりました。またその出来事というのは、自分の「人生」を大きく左右するものでした。私はそれほど「人生」の幸せを望んではいません。ただ家庭円満で、日々暮らしていければそれで幸せだと思っていました。残念ながら、最近では、少しうらぎられたなあという気がします。あらゆる事にどーでもいいや、と少し悲観的になった時もありました。しかし、そのような事で悲しんだりしている人間は自分独りではないという事に気が付いたのです。「人生」というのは自分のもの、自分で自身で切り開いていくものだと思います。他人がとうであれ、今の自分自身が一生懸命生きていければ、それでいいのではないのでしょうか。これから、まだまだ人生は続いて行くわけですが、人の波に流されず自分をもう一度見つめ直し、物事を客観視して自分で正しいと思う道歩んで行けたら、私はそれで満足です。

今後、もっとつらい出来事に会うのは間違いないでしょう。しかし自分は、笑うと言うことだけは常に忘れません。最後になりま

すが、将来“人生を語る人間”と言うのが、私の望みです。



私の三度の転機

四年 内野 久修

人生とは、色々な転機があるものである。その転機によって人間は、成長もするし、転落もする。私の最初の転機は、中学一年の時バレー部に入ったことであろう。もし入ってなければ、いつも授業が終わるとすぐに、家に帰る帰宅部生となり、暗い学生生活を送っていたらうし、今もよく遊びに行く恩師の先生とも会うことがなかったのではないかと思う。バレー部では、色々な事を学んだ。特にハレーは、その時々ミスなどによってすぐに試合の流れが変わってしまうスポーツである。そして一度でも相手に傾いた流れをこちらに戻すには、困難ときわめるものである。したがってそうならないために、チームワークはもちろんの事、誰かがミスをした場合でも、動じない平常心とミスしたチームメイトを許せる寛大さをもてるようになったような気がする。

二度目の転機は、高校受験の時公立高校に入ったことである。最初のうちは、高専に行って卒業したらすぐにも就職するつもりであった。中三の頃は、友人達の間でメーカーに就職したいという話をよくしていたので高専に合格した時には、メーカーに就職できる道がひらけたと思いきや、嬉しかった。ところが、合格したとたん、両親と担任の先生に

普通高校、四年大に通っても遅くはないと猛反対を受け、自分自身の考えを貫徹することの出来ない自分に歯痒い思いをしながら、仕方なく従ってしまった。今思えば、ここでこうして荒鷲の原稿を書いているということを考えて、両親と先生に感謝をしなければならぬと思う。

三度目の転機は、この福岡大学書道部に入部したことである。高校時代から大学に入ったら絶対にバレーの同好会に入ろうと考えていたか、いざ勧誘週間になってあちこち探したか結局見つからず、何となく勧誘を受けて雰囲気がよくて書道部に入ってしまったのです。入部してからこれまで、色々な事があったが何といっても、同輩達の出逢いが自分を大きく変えることになったと思う。特に二年の半ばかり三年にかけて夜遅くから外がしらしら明るくなるまで、部について行事について、時には楽しく、時にはくそ真面目に、今思えば、部に入部して最高に楽しかった時だと思えます。あの六人のおかげで、私の岩石頭がやわらか頭になったんだと感謝しています。何か行事があると必ずといっていいほど、遅れてくる時間遅れのM君、迷い子のN君、ソフトだけO君、俺は誰よりも渋いと自負しているN君、酒を飲むと暴れるY君、怒っていても目が笑っているI君、そして我々男7人をよきアドバイザーとして影から支えてくれた同輩の女性達、この場をかりて、「本当にありがとうございます。」皆さんのおかげ

で最高の学生生活を送ることができました。私の人生の中で、この三度の転機は、自分自身を大きく成長させるものになったと思う。



人生 と・い・ろ

一年 中村 友理子

人の人生というのは、本当に多種多様であると思う。

悲しんで泣いている人もいれば嬉しくて笑っている人もいる。悲しんでいる人はその悲しみを乗り越えてからこそ喜びが待っているし、喜んでいる人も、その喜びを再び巡り逢おうとして努力する。これはことわざの中の「苦あれば楽あり、楽あれば苦あり」という言葉に似ている。人の運命はこのように試練の場なのかもしれない。

ここで過去と現在と未来とはいったいどういうものか触れてみたいと思う。少し空想的になるかもしれないが、もし現在の時点でいやな事があったとすると、それを変えようとするならば、過去と未来のどっちに行ったらいいだろうか？もし過去へ行ったら、自分がどうしていやになったのかという過程が分かる。未来へ行ったら過程が分からないので、どうしていやになったのかということが分からない。どちらかと言えば、過去へ戻って過去の時点で自分の悪いところを直せば、現在の時点でいやな事をいやな事だと思わなくなるだろうと思う。

しかし未来へ行ったら、未来の自分はどんなになっているのか観察して、自分の悪いところを

直せば、現在の時点でいやな事をいやな事と思わなくなるだろうか。それは、わからぬ。人間は未来を知りすぎたらいけないと思う。いきなり現実に戻るが、過去はもう変えることが出来ないが、未来は、現在の時点で、自分がどれだけ実力を発揮できるかによって変えることができると思う。だから人間の価値は、その人が現在置かれた状況の中で、自分の実力をどれだけ出したかによって計れるものだと思う。

大学四年間は長いようで短いものである。その中で自分も人間性を高めて人に信頼されるような人間になりたいものである。人の一生というのは、本当に重荷を背負っているようなものだと思う。その重荷を良い重荷か悪い重荷にするのは、自分自身であるから、過去とか未来も大切だが、現在が一番大切だということをお忘れしないでほしいと思う。

自分の生き方

三年 森 裕之

人は、何故存在するのであろうか。誰もがこうした疑問を持ったことがあると思う。しかし、いずれにせよ、我々が生命を与えられ存在していることは、まぎれもない事実である。

先日、自分が所属するゼミでディスカッションが行われた。テーマは「学生の贅沢について」というものであった。その中で、大学生の贅沢の具体例として「車を所有する」「ゼミ旅行で海外へ行く」等が挙げられた。

そこで、自分は「この世に生を受け、しかも五体満足で存在していることこそが、人生最高の贅沢ではないか」と発言した。

自分が考えるに、人間は誰もが平等に生命を受けると思うが、それを生かすか殺すか、本人の自己管理にかかってくると思う。人間は唯だ。生きる為に生まれたものではない。

だから、ただ無意味に生きているだけではもの足りず、空虚である。さらには、生き甲斐が感じられないのではないだろうか。

「人間の死に様は、その人の生き様に決定する」と自分は考える。

人が死を恐れるには、その人が、自分が与えられた生を十分に生かされず、やりたいことが果たせず、自己を生かし切っていないからであろう。

そこで、自分は考えた。限られた人生は、後悔のないように生きたい。そのためには、自分なりの生きる目的を持って、信念を持って生きたいと思う。

そこで自分の目的としては、人々の出会いを大切にしていきたいと思う。どんな相手にも敬う心。それが、歳下であろうが、どんなに貧しい人であろうが、自分がないものを持っている人に対して、その人を大切にしていきたいと考えている。

今、思えば、自分が、福岡大学に入学したの

も、書道部に入学したのも何かの縁である。

そして、今までに出会ってきた諸先輩方、同輩、後輩諸君、ゼミの学友、学校関係者の方々に対し、感謝する気持ちを忘れずにいたい。そして、いつまでも「吸収」する姿勢を崩さずにいたい。

現在、二十一歳とまだまだ未熟な自分がこのような論文を書き生気なようだが、これが、自分の今の心境である。

これからも、人生において、多くの人々との出会い、その人たちから多くのものを吸収し自分の持てるだけの力を人に与えて自分は生きていきたい。

そして、死ぬ時は、多くの人に見守られながら、「ありがとう」と言えるような生き方をしたい。決して後悔のないように。

テーマ

『ロマン』

「彼らとの出会い」

三年 碩本 孝洋

僕はローリング・ストーンズが嫌いだった。特にボーカルのミック・ジャガーが嫌いだった。しかし、ミック・ジャガーぬきのストーンズは考えられない。彼はストーンズの声であり、顔なのであり、だからこそストーンズが嫌いだったのである。

一九八八年秋、僕にガットンと一撃を食らわすアルバムを出した男がいた。彼の名はキース・リチャーズ、ストーンズのギタリストで、ミックと並びストーンズの顔であった。彼のアルバムの、人の体からにじみ出てくるようなリズムや肉声は、僕の心の奥に深く染み込み、強く残るものとなった。そして、そのアルバムが、僕のストーンズに対する考えを一変させた。いつの間にか、彼らがデビューして二十年以上の活動の歴史に、足を踏み入れていた。僕がストーンズを聞くようになって一年も経たない翌年夏、彼らは新しいアルバムを出し、八年振りにツアーをスタートさせた。その後、一九九〇年初めてストー

ンズが初めての来日を果たすという噂を聞いた時はビックリした。そして、それは現実となったのである。

それにしてもストーンズ来日の騒ぎは凄かった。十日間の公演で五十万人の人間が、コンサートの子ケットを手に入れることができる訳だが即日完売し、テレビや雑誌などマスコミも騒ぎを煽った。僕も来日を聞いた時は、「絶対に行きたい。」と思ったが、まさかチケットを手に入れることは出来ないと考えていた。ところが、手に入れることが出来たのである。部内には、自分以外にストーンズを親に行きたいという人間が後輩に一人いた。そのほかにも、友達にストーンズファンがいたが、「絶対行ける訳がない。」と、最初からみんなあきらめていた。それと、東京ドームでしか演らないというのも原因にあったようだ。結局、電話は自分、後輩ともう一人後輩に協力してもらい、あとファンであるいとこの四人ですることにした。一人、後輩（ファンの方）の電話がつながった。二月二十七日と来日公演最終日が取れた。信じられなかった。二十七日のコンサートは、自分を含め

四人（後輩・いとこも含む）で行った。そしてコンサート開演、目の前にキースやミックなどストーンズのメンバーが立って演奏していた。あつと言う間の二時間だった。

僕にとって、音楽は生きるそのものだ。音楽は僕の感情に従って、その感情にふさわしいものが心に響く。二年前に、キースのアルバ

ムに出会ってからは、ストーンズの様々な曲か心をかき鳴らす。キースのギターやミックのハーモニカが、僕を勇気づけるのだ。ローリング・ストーンズよ、永遠に……。

ロマンについて

一年 大淵高明

僕がロマンと聞いて連想する言葉は冒険だ。僕も小学生や中学生の頃はよく冒険に憧れた。小学校の頃は友達と御笠川をゴムボートで下ったり、自転車で久留米や佐賀などに行ったり、いろんな山を登ったり、中学の頃は海や山でよくキャンプをした。

けれど今考えてみると、こんなのは冒険とはどういえない様な事だ。冒険とは何か本多勝一氏によると、①年齢の危機が大きいほど冒険的（「安全な冒険」はスリルであって冒険ではない）。②人類にとって歴史的・記録的に新しいほど冒険的（先人がやった後で二度目にやってもダメ）。③社会的な意味が大きいほど良い冒険（全く無意味な冒険もあるが無意味なるほど自殺に近くなる）。というがこの様な事を行う事は現代でもとても困難だ。何か新しい事をやろうとしても、誰かが既にやっておいて、可能性は無限にある様に見せかけていて、実はあらゆる選択肢は既に決定されている。僕らにあるのは現代社会ではロマンや冒険という言葉は

夢について

一年 堤 康之

夢を持つことはとても大事なことだと思
う。それも漠然としたものではなく、明確な
もの程よいと思う。それは個人が生活してい
くうえで支えや指針となり、目的をもった
生活をおくることを可能にする。

しかしそれを持つことは簡単でも、努力し
なければ夢は夢のまま実現はあり得ない。
たとえ夢が果たせなくてもその努力は無駄で
はないし、夢を持っていない人と結果は同じ
になるが、本質は全く違うことは明らかであ
ろう。つまり後者には夢を実現しようとする
思考や努力の過程がない。これは物理でいわ
れる距離の考え方に当てはまるのではない
か。夢は自由で束縛されることはないし、
それを果たす義務もない。またその夢を思考
だけにとどめておいたにしても生活していく
上でなんらかのプラスになればその存在価値
は十分あると言えるだろう。

我田引水ですが、私にもアメリカに留学す
るといふ夢があります。留学して、英語をマ
スターするのは勿論ですが、アメリカ人の考
え方や自己表現も吸収しようと考えていま
す。張れて入学することができたならば、頑
張って卒業までこぎつけたいです。留学する
のはいろいろ不安がありますが、まずは、2

年をはかるでしようが英語の勉強をして
TOEFLで高得点をあげなくてはなりません。
何年かかってもこの夢を達成させたいも
のです。もう一度受験生に戻ったつもりで頑
張ろうと思います。

まだ私たちには様々な可能性が秘められて
います。とにかく視野を広げ、どんな夢でも
まず持つてみてはどうでしょうか。

夢

二年 中村 博

窓から差し込む朝日とスズメのさえずりでオ
レの一日は始まる。日課である五キロのジョ
ギングを終え、心地よいシャワーを浴び、少
し高くなった太陽を全身に受けながら新聞を
読む、最近は何米構造協議で誌面はにぎわっ
ている。その間、スピーカーからはモーツァ
ルトが流れている。新聞に目を通すと次は、
朝食だ。もちろん朝食ぐらいいは自分でつく
る。完璧な朝食こそ一日の活力源だ。朝食を
すまずと、スピーカーからは、スミスが流れ
リズムをあげていく。スミスからメタリカに
変わった頃は、オレはハードな授業を迎える
為テンションが上がり、メタリカのハードな
ビートが拍車をかける。

(中略)

ハードな授業を終え、部屋に戻るとシャワー
を浴びる。熱めのシャワーは授業で疲れた体

をほくしてくれる。シャワーをすませ食事を
すませる。夜は軽めにすませるのがポイント
だ。それからはグラスにバーボンを注ぎ、古
い映画を観る。映画の中で、ボギーとハーグ
マンがグラスを重ねると共に、オレもバーボ
ンを注ぐ、電話がなりこのオレの至福の時を
破壊する。が、電話機をとっても音は続くお
かしいと思いつつと考えているとその音が目
覚まし時計の音だった事に気づき、オレは目
を覚ます。

人は誰でも吟遊詩人になれる。自らの夢に遊
び、思いをめぐらす。そして人は誰でも夢を
持ち、その夢を追いかける。しかし、いつの
間にかその夢も魅力も消え夢も失くなってし
まう。まあせめて夢の中で遊ぶ心だけは失い
たくないものだ。



浪漫

三年 加藤 初美

山麓の二人

二つに裂けて傾く磐梯山の裏山は
険しく八月の頭上の空に目をみはり

裾野とほく靡いて波うち

芒ぼうぼうと人をうづめる

半ば狂へる妻は草を藉いて座し

わたくしの手にも重くもたれて

泣きやまぬ童女のやうに慟哭する

— わたくしもうぢき駄目になる

意識を襲ふ宿命の鬼にさらはれて

のがれる途無き魂との別離

その不可抗の予感

— わたくしもうぢき駄目になる

涙にぬれた手に山風が冷たく触れる

わたくしは黙って妻の姿に見入る

意識の境から最後にふり返って

わたくしに縋る

この妻をとりもどすすべは今は世に無い

わたくしの心はこの時二つに裂けて脱落し

闕として二人をつつむこの天地と一つになっ

た。

これは「智恵子抄」の中のひとつの詩です。

みなさんも高村光太郎さんと智恵子さんの話

は御存知ですよ。

明治の末年、グロキシニアの針植をもってア
トリエを訪れた智恵子嬢を”人類の泉”と讃
えた恋愛時代から、”東京に空が無い”と語
り合った幸福な結婚生活を経て、夫人の発
病、そして昭和十三年十月の永別。しかも
死後なお募る思いを、智恵子の裸形を残し
て、わたくしは天然の素中に帰ろう”と歌
い、昭和三十一年四月の雪の夜に逝った詩人
の、全生涯を貫く希有な哀の詩集です。

私が最初に「智恵子抄」に出会ったのは、中
学二年生の時でした。国語の教科書に、智恵
子が東京には空が無いと書いてあった「あど
けない話」という詩がありました。中学二年
生の私には、何のことなんだろうと思ひ、そ
の時は過ぎてしまいました。その後本屋でこ
の単行本をふとみかけた時、何げなく買って
しまったんです。一回読み終っても何となく
感動はしたんですが、少し昔言葉で書かれた
男女夫婦のことなど、中学生だった私に
はわからなかったんです。しかし、この「山
麓の二人」の中で— わたくしもうぢき駄目に
なる— という箇所にはびっくりしてしまいま
した。目前の死に対する率直な気持だったの
でしょう。

以前に精神異常のため一度自殺を計り、一旦
健康を回復したものの、その後精神分裂症に
捉えられ入院し、しずかに瞑目した。このよ
うに半生を病気におかされても高村さんは智
恵子さんを理解し、愛し続けたのです。
これが浪漫なんですよ。

ロマン

一年 小田 桂子

あなたがうらやましい

一人で遠くを見つめて

私は女の子だから

あなたより先に大人になって

一緒にはいでいたいの

気が付くと過去のロマンチスト

いつまでも夢を見て

魂はきつと純粹で

あなたが夢を見ている間に

私は現実を見つめている

その夢が大きくなるほどに

私はシビアになっていく

あなたは永遠の少年に

私は一人大人になって

あなたのロマンを守るために

私は過去のロマンチスト

※注この詩はフィクションです。“ロマ

ン”は“ロマンチズム”に、意図する意味

が示されてあります。その内容にある、現実

逃避という言葉が、私の頭の中で定義されて

いたものとは違ったことに、少しとまどった

のでした。

ある日のこと。後にこの詩の素となる話題

が生まれたのでした。その話の内容として

は、“男のロマン”はあっても、女のロマ

ン」がないという事でした。男の人は、どうしてもという目的があれば、自分の人生をかけて突き進むことが可能なのに、女の人は、生まれながらの性格なのか、どこかで、現実を見つめてしまう……。男の人のそうだった、わがままな面を、女の人がカバーして、この世界が成り立っている……という結果に終わったのです。

もちろん例外はあります。でも、こうやって、支えあっていることを心に留めておいて欲しいのです。男の人が夢を追いかけて、女の人がその為に残された現実を、背負って生きているのです。私が書きたかったこと、わかってもらえましたか？

魅力あるスポーツ : 「サッカー」

二年 服部 大介

自分は、「サッカー」というスポーツにロマンを感じるのである。それは、うまく言葉で表現することはできないけれども。

自分がサッカーというスポーツの魅力にとりつかれたのは、小学生のころであった。そう、あの残りの試合時間が一分なのに、何十ページとつかっているサッカー漫画「キャプテン翼」であった。小学生のころであって、すぐに漫画に影響を受けていたが、別に翼くんの影響を受けたわけではなく、サッカーというスポーツにひかれて、ずるずると現在ま

で引きずっている。

ところで、サッカーは世界的に人気のあるスポーツで、サッカー人口は、どれくらいかよく知らないが、非常に多い。しかし、日本においては、サッカーよりも野球の方が、プロ野球などがあってメジャーだ。自分は、野球も好きだけれども、どちらかというとサッカーである。何といても一つのボールを、一チーム十一人の計二十二人で追いかけて、なおかつ手を使わずに行なうところが良い。自分がこのスポーツにひかれたのはこのことであると思う。

現在行われている（これが発行されるころにはとくに終わってしまっている）ワールドカップイタリア大会は、非常におもしろい試合・意外な試合が多くあった。特に以外だったのは、前回のメキシコ大会の優勝国、あのマラドーナ率いるアルゼンチンが、開会式後の第一試合でカメルーンに負けてしまったということだった。まあこのあとアルゼンチンは何んとか立ち直ったのであったが、自分は、今年のワールドカップイタリア大会は、たぶん開催国のイタリアか、同じヨーロッパの西ドイツが優勝するだろうと予想しているが、実際にはどうなっているだろうか。しかし、自分は、このワールドカップイタリア大会に出場している国々の選手達のすばらしいプレーや、表情、又、実際にその場で試合を見ている観客たちを、ねむい目をこすりながら見ることによって、改めてサッカーという

スポーツに魅力を感じ、ますます好きになっていった。自分はこのサッカーにはロマンがあり、又、人を引きつけるすばらしいスポーツだと思っている。まあ、ワールドカップと言えば、いつか日本がこのワールドカップに実力で参加できることを自分は夢見ているのである。

ロマン

三年 宇野 環

よくドラマなどで、「ああ、男ってどうしてこんなに夢がないんだろう。」と女は嘆き「女はどうしてこうも現実的なんだろう。」と男はぼやく。男も女もお互いに自分の方がずっとロマンチックであると信じ、相手の態度や感覚を夢がないだの、現実的だのと非難する。

例えば、「苦勞してムードを盛り上げたのに男ってどうしてそんな時、場違いなつまらない駄洒落話をするのだろう？」

「せっかく奮発してフランス料理を食べに行つたのに高いんでしょ？とか、お金は大丈夫？とか女は実に野暮で、しみつたれたことを言う。」と両者は言いたい放題……。

男と女ってどっちがロマンチックなんだろう。あなたは、どっちがロマンチックだと思いますか？でも、どっちがロマンチックであろうと夢を持っていようと、夢を持ちロマ

ンを追いかけている人というのは素敵だと思
う。でも今の世の中は、みんな夢が夢らしく
なくて、とても現実的で、つまらない気がする。
自分も含めて……。悲しいけど……。

夢は、小さい時に比べて大きくなるにつれて
どうしても現実的にはなるけれど、まだ、私
たちが小さかった頃は、単純だけど楽しそう
に見るものや、かっこいい仕事が夢だったり
したけど、この前、TVを見た時、また四つ
か五つくらいの幼稚園児が、僕の夢は、ご飯
を食へるために、お金を稼ぐ事だと言った時
は、しっかりしてるなあと思ったのと同時に
あまりにも現実的で、それって夢なのかなあ
と驚かされた。

夢というのは、はかないものであって、ほと
んとの人が実現できないものじゃないのかと
私は思う。夢の素晴らしさとは、それに一歩
でも近づこうとしている人の姿や、その軌跡
にあると思う。途中で挫折もするだろうけ
ど、それを乗り越えた人は、人間的に何倍も
成長するだろうから。人間の一番の魅力は、
その人の内面性だと私は思っている。また、
人間は、この地球上の生き物の中で、唯一夢
をもてるロマンチックな生き物だから大きい
にせよ、小さいにせよ、私は、生きている限
り、夢を持ち続けることを私の夢としたい。



浪漫の定義

一年 亀元 美奈子

“浪漫のある人生だ”なんてとても大仰な
言い方だと思ふ人は多いと思う。辞書にはゆ
めやあこがれにみちたことから、という風に
定義してある。ゆめやあこがれと言えは将来
設計的な事、つまり、「こういう職業につぎ
たい」とか「こういう生活がしたい」とか言
う大きくて叶いそうでなくて手に届かないも
のを想像してしまうけれど「浪漫」とはそれ
だけではないように思う。もっともっと身近
な日常的な場面にいくらでも転がっているは
ずだ。朝起きたときに雨がしとしとと降って
いることを素敵だと思ふ人もいるだろうし、
すずめのかすかな鳴き声と青空を貫くような
日差しで目覚めることをいいあと思ふ人もい
る。おいしいものをいっぱい食べることに生
きかいかを感じ、きれいな景色や色、好きなも
の花や動物を見て、心地よい風に吹かれるこ
とに喜びを覚える。そういうた多種多様の感
動能力が一種の浪漫なのだと思います。

元々“浪漫”という言葉は創作的、物語的
言語であるから一つの意味を添えることなど
不可能である。そもそも辞書に出てくる言葉
が本当の浪漫かどうかとも疑わしいところだ。
それぞれ個人の基準があって、普段の生活
の中ではんの小さな事を発見しそのことに感

動できることを浪漫と言っているのだと思
います。

例えば自然の摂理。因果応報。自分が何も
しなくても周りではどんな事が起こり展開し
ていく。何か事が起これば必ずそのことに對
して反応があることにすごいなあと思う。

生まれたときには知らなかった人と出會
い、会話をし共に笑い怒り泣く。時には誰か
を愛し、時には誰かを憎む。そんな他愛ない
現実の日常が一番の浪漫ではなからうか。
又、そんな些細なことがどれほど自分にとっ
て大切かが感動することがどんなに大事かが
わからない人は不幸であると思う。

結局“浪漫”とは何か。色々な言い方はで
きるけれど、自分の生活人生の中の“幸せ”
とか“充実”とか“楽しい”とかいういい言
葉の根本ではないでしょうか。



は、歴代副幹事の中では一番出来が悪い副幹

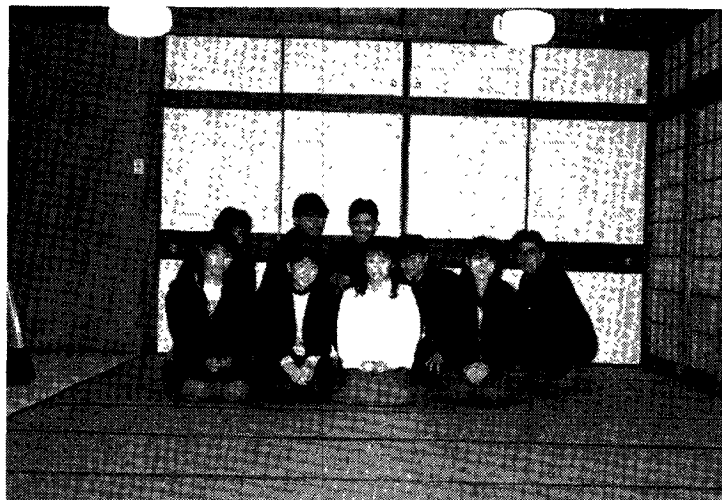
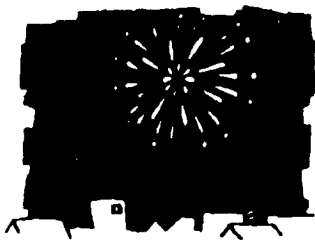
「僕の残り三ヶ月
でっかい花を咲かせよう計画」

三年 入江 陸博

人それぞれ生まれ来て、今までいろんな事があったと思います。苦しかった事、楽しかった事、悲しかった事、いろんな事を乗り越えて成長していくのだと思います。僕にも当然いろんな事があって、それなりに成長し自分なりの生き方、考え方の基本となるものか、やっと見えて来たような気がします。自分は一年から二年にかけて連盟の事務局になりました。その中でも最も重要な役職であります事務局次長になりました。その時連盟の中からいろんな事を学びました。何を学んだのかと聞かれてもわかりませんが、何か大きなものを学んだような気がします。僕が事務局をする前と終えての僕は全く違うと思います。他の人にもそう見えたと思います。また、連盟から多くの物を得ました。その中でも一番大切なものは一緒に一年間頑張った十一人の仲間です。そして連盟の多くの先輩後輩です。事務局で一年間いろんな事を学び自分は今副幹事をしています。副幹事といえば重要なポストです。自分には大変な仕事だと思いません。でもやるからには一生懸命するし、他の誰にも負けたくありません。でも現段階で

は、歴代副幹事の中では一番出来が悪い副幹事も知れません。今年は三十周年という事で記念行事等もいろいろあります。僕は連盟のある先輩に相談をした時「役員なんて残りの三ヶ月が勝負だ」と言われました。そう、もう残り三ヶ月になってしまいます。これまで学んだすべての事を生かして、残り三ヶ月で花を咲かせたいと思います。それも、でっかい花を……他の四人と、五十四人。他人の目を気にせず、OBも、先輩も、後輩も……でもすなおな心だけは忘れないでいたいと思います。そして残り三ヶ月近くの間にまたいろんな事を学んでいきたいと思えます。自分なりの生き方、考え方を徐々に固めていきながら……。

平成二年七月二日午前四時……あれ、たしか締め切りは六月三十日までだった。まあいいか。



テーマ

『喜』

薔薇

一年 川上 真

最近、バラに乗るのが楽しみとなっている。バラというのはスクーターの名前である。他人はバラバラなどと馬鹿にするが、他のスクーターよりも考えようによっては優れているのである。その例をいくつかあげよう。まず、スターターがついていない。スターターとはボタン一つでエンジンを簡単にかけられる装置である。バラはキックをしてエンジンをかけるのだが、これはエンジンをかける喜びというのを分け与えてくれるのだ。最近ばかりかという、地面に足をつけないでエンジンをかける高等？な技をマスターした。第二に発進するときアクセルをめいっぱい回しても急発進しないのである。これは安全を考慮してのことだ。他のスクーターはウイリーをするので怖い。第三に最高速度は五十二キロを越したことがない。これは安全運転をしると言いたいのである。だがH氏が不適な微笑みを浮かべながら、いとも簡単にバラを抜き去ったときは非

常に悔しかった。

また、走行距離のメーターが隠れたところにあるなど、他に色々とあるが、とても全部はフォローできないので省略したい。

NTTの塔の近くに究極の坂があるのをご存知だろうか。この坂の勾配は急で、とても自転車では上がりきれぬものではない。いつかこの坂を制覇しようと思ひ、高校を卒業してすぐに免許を取得し、挑んだのである。しかし所詮、馬力もろくにないバラがこの坂を上るのには無理があった。途中で坂を後退していったのである。五度目の挑戦の末、ジグザグ運転でやっとこの坂を制覇したのであった。いつも楽しく乗っていたが、最近メーターの調子がおかしくなった。六年以上乗っているのもう寿命なのかもしれない。新車に買い換えようかどうかと迷っている今日このごろである。

「私が今、思っていること」

一年 佐々木 智子

大学に入って、楽しい生活を送ることが出てくるのは何と言っても書道部に入ったおかげである。書道は好きだけど、書道部がある程度暗いことは覚悟していた。しかし、とんでもないマチガイであった。誰がお鍋をやったり、カラオケに行くことを想像したのだろうか？夏休みには順子先輩にドライブに連れ

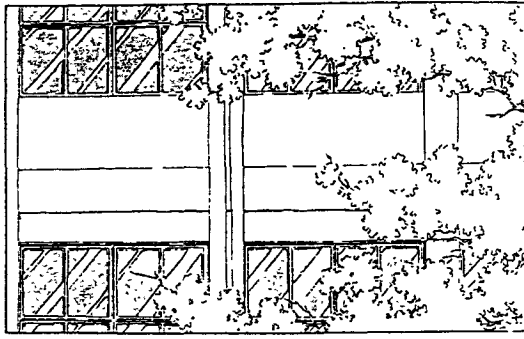
て行ってもらおう約束もした。私の家には車がないので自家用車に乗せてもらう喜びは人一倍である。そして、先輩達もいい人たちがばかりで、先輩もいい人たちばかりで、同輩もいい人たちばかりで本当に運が良かったと思う。何でも隠し事がなく話すことのできる友達が又増えた。やはり大学時代の友達がいつまでも仲良くいられたら、それが私は一番喜ばしい事である。高校時代の時の友達ももちろん大切だけど、三年間というより四年間という年月は長いし、書道という一つの共通な物を通しての考え方とかたくさん学びとる事ができるものがあると思う。だから、一年生が現在十六人いるけど一人でも欠けてしまったら淋しくなると思う。

私は四月十六日に入部して、四月二十七日の部員総会、四月二十九日の連盟総会、五月六日の新歓コンパ、五月十三日のソフト&バレーボール大会、五月十九日の一・四コンパ、五月二十日の久留米での連盟展、五月二十一日の一年生だけの海の中道でのピクニック、五月二十七日の春日公園での親睦会、五月二十八日の部員総会、六月十八日からの内展、それに今までの地道な強化練習。どれをとっても充実した日々が送れたと自己満足している。

今まで十四年間書道が続けてきたけれど、練習に費やした時間はそんなに多くなかったし、書道部の中での交流は浅かったので、友達がたくさんいるけれど書道を通じての友達は数える程度しかいなかった。そして、先輩

ろがホームランと思ひ大瀬さんはダイヤモンド

や同輩の作品を見ることよって自分はまだまだキャリアが長い割にはダメだなあとつくづく反省させられたし、これからの練習の目標が出来た。四年になるまでに地道に練習して先輩達のように素晴らしい作品が作れるように努力しようと思う。こんな私の小さい頃の夢は書道教室を開いて小さい子供に書道を教えることだった。なぜ私は法学部法律学科にいるのだろうか。



テーマ

『怒』

ソフトボール

一年 堀内 善則

私がこの書道部に入った理由の一つに、ソフトボールが強いという話を聞いたからである。話によると昨年の大会は準優勝という輝かしい成績を残し、今年は優勝という意気込みが強かったので、私もその一員となって優勝を導こうと思った。

入部してまもなく朝練が始まり、気分も優勝にむけて高まってきた時に、気分を盛り下げる情報が入ってきた。その内容はなんと、一回戦にあたるチームが、去年書道部と決勝戦をして優勝した生物研究部だったのである。抽選会にいった太郎さんは、みんなからうらまれるはめとなった。しかし、逆に言えば生物研究部さえ倒せば優勝はまちがいないであった。

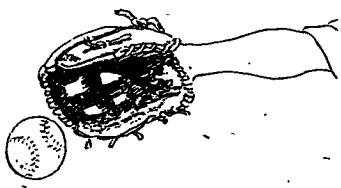
さて、大会当日天候は快晴で、日焼けするくらいであった。試合は開会式直後の第一試合目ということで、いくぶん緊張していた。

開会式が終わる書道部先行で試合が始まった。初回、一二番が凡退の後三番大瀬さんの当りはライト線の微妙なところに飛んだとこ

ろがホームランと思い大瀬さんはダイヤモンドを一周してきたところで判定はファール。これで書道部の勝利はなくなった。打っても守ってもポロがでてしまった。結果は八対一のコールド負けに終わった。私はバッターボックスに一回しか立てず、その一打席もバントの一球で終わるといふ全くおもしろくない試合結果になってしまった。午前中で試合が終わってしまい何もすることなくぼけっとしていました。

結局、優勝チームはつくき生物研究部だった。抽選運さえよければ、こんなくやしい思いをしなくてよかったのにと思う今日のごろです・・・次の大会こそは、くじ運の強い人に引いてもらって、必ずや優勝を目ざしたいです。

このままでは、何のために我々一年がグラウンドに泊まって場所とりをしたかがありません。絶対に、今度の大会は、みんな力を出しきって優勝しましょう。



テーマ

『哀』

哀

年 緒方 昭博

受験生活にて年間という長期期間を費やし晴れて大学生という地位も何もない片書きをつかんだ私は大学生活をenjoyしようとする。サーカスに入ることに決めた。

悩みに悩んだ末、勧誘週間三日目に、端から見ると、「本当にenjoyできるのか？」と疑問を抱かれても返す言葉もないようなサークルを選んだのであった。

その名も「書道部！」決して一般peopleに体して口に出すのを一瞬拒んでしまうような名であった。

入部当初、勧誘週間三日目ということもあってか、一年生部員数、女性二名、男性一名、この一名が私である。

勧誘週間も終りに近づいてゆくというのに新入部員数が増えない！全く増えない！このままでは……不安はつるばかりであった。

勧誘週間最終日、サークル選びに疲れ、無気力状態、もうサークルなんかどれでもいいし

よというような顔をした新入生が、自分がそうであったように、あとさきのこととも考えず入部してきたのであった。

総勢十四名、内、仮入部一名。佐野芳和（仮名）その当時、新入部員の間では、「何で書道部に入ったと？」という台詞が大流行していた。

そして現在、一年生部員数十六名、意外に楽しいサークルである。とても言うておこう。もちろん、今まで書いてきたことは、私の本音ではない、ということも言うまでもない。実際、書道ということを除けば楽しいサークルである。

書道部だって、ボーリングをするし、コンパもする。カラオケにだって行くのである。そのへんのサークルとほとんど変わらないのである。

だが、しかし、やっぱり一般peopleの前では、軽く口に出せない部名は改善されたものである。

この文のテーマをあえて言えば、喜怒哀楽のうちの「哀。」だろうと思ってしまう今日このごろである。

若取非法

主壽者足



二年 山下 順子

私、山下順子は現在、レンタルビデオとCD、それに本も売っている某油山店に勤めています。これ迄、子供ばかり寄ってくる「M」や、一度内部の人間になったなら食べたいとは思わない「L」のようなファーストフードばかり働いてきた私にとって、今回はちょっと客層が違います。「レンタルビデオ」で働くことがどういう事なのか、全く考えていませんでした。

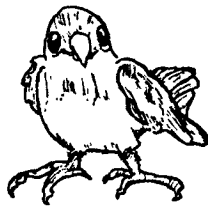
ビデオといっても、いろんな種類があります、アクション、ホラー、恋愛物、・・・それにアダルトがあります。私がカルチャーショックを受けたのは、そのアダルトについてなのです。「アダルトビデオを借りる人」といえば、やはり外見から「そのとおりの人！」だと思っていました。実際は違うんですねえ。南片江の裏にあるので福大生はいっぱい来るのです。ですから、アダルトビデオを借りていった人に大学内で会ったりすることはよくあるんです。やっぱり、その人のことをじっと眺めてしまいますけれども、半年以上も勤めていると、さすがに「世の中ってこんなものなのね。」と悟ってしまいました。

同輩のY氏等は、「借りてこい！」とよく命

令してくれませんが、そんなことができる程、根性座ってはいません。そういえば、以前、高校生っぽい女の子二人組が借りていきましたが、あの時は本当に目が点になりました。他にも、二十代ぐらいの娘、息子と両親、という家族四人組が、そのコーナーに入って、物色しているのを発見した時も驚きました。が・・・。

堂々と何本も借りていく、おしさんには閉口しますが、借りる時も返す時も、真っ赤になっている人を見ると、「借りなきゃいいのに・・・」と同情してしまいます。

十九歳の少女が、全く何という文章だ！と思われる人が多々いらっしやるとは思いますが、これがレンタルビデオ店で働いた私の正直な感想です。妙にそんな事を悟った自分が、本当に「哀」しいです。



勧誘

一年 佐野 芳和

大学にうかり、まずアパートを探しに、新幹線で三時間ほど乗って、博多駅について、すぐ、高田住宅にゆきました。車で案内してもらい、二つのうちどちらにしようかと考えていると、その息子が「このアパートは、僕の同級生なんですわね。」としきりに僕に言うものですから、そこに決めたのです。同級生とは女の人でした。

住居なんて、どこでもええか、と思っていたけれど、いざ住んでみると僕の部屋はとても暑いのに気がつききました。来る人、来る人皆素晴らしいです。僕は来年度屋をかえようと思っています。

大学生活を楽しむには友達がいた方がいいということなので、何か部には入れよ、と兄からも言われ、僕も何かに入るつもりで、勧誘を受けました。書道部に入ろうとは思っていませんでしたが、勧誘週間も終わりなので入りました。電話で、「何か、部入ったんか。」と兄に言われ、言葉につまった僕。そして電話の向こうから、ケラケラと聞こえてきます。それ以来、僕はあまりそのことには触れたくないのです。コンパとか、ボーリングとかいろいろ練習のあとにあって、よいと思っっています。カラオケとかもいきました

が、レパートリーの少ない僕は、あの時ははずかしかったです。百円を出して六甲おろしを歌うなんて。それにあんな人前で。この時、洋楽もいいけど、日本のも聞こう、と思いました。

大学に入って衰しい事が多いですね。小学校、中学校、高校となるにつれ、楽しみも減っていった様な気がします。小さい頃は毎日外へ出て遊んでいましたが、中学校になり、その数もへり、心底笑った日なんて少ないものです。大学になったからって、急に変わるわけではないですが、一人暮らしをしている以上、やっぱり、少しづつですが、大学生活というものに慣れてきたような、気がします。自分の家に連れがあつまり、八時から三時まで、騒いでいると、当然、隣からどなられ、しぶしぶ帰ってゆく連れなのです。ヨウ、オタクラ、ハヨウ、カエッテンカ、と思ふときもあれば、隣さえいなければ、もっと騒げて、もっと音楽がきけて、もっと楽しくすることができると、と思つてならない時もあります。

しかし、二年になれば、僕はもっと快適な、もっと涼しい、家に移っています。

「七曜日の夜」

法学部四年 永友浩二

私が生まれてから二十二年間の月日が経きました。その間、幾つもの夜が過ぎ去っていました。それは幼稚園へ通っていた頃の夜、中学・高校へと通っていた頃の夜、そして現在、大学へ通っている今夜数えきれない程の夜が毎日、私と身の周りの物と世界中を覆いずっと変わらないのです。

夜は私たちを家路に導き、家族の温かさや心の落ち着き、夢を教えてくれます。

月曜日の夜は昼間に会った友達の色や会話を思い出させ、明日に約束した遊びの事で私をなかなか寝かせてくれません。

火曜日の夜のは遊び疲れた私の体を楽しい夢の世界へとやさしく包んでくれます。そういう夜はたいいてい、辺りは深々と静まりかえり木の葉が風に揺らぐことなくただ交差点の黄色信号だけがゆっくりと点滅していて、なんとなくその夜が惜しまれます。

水曜日の夜は私をコンビニエンスストアに誘います。別に欲しい物がある訳じゃなくて、私と同じ様に、夜に誘われて来た人達と対面させるかのように。

木曜日の夜はいろいろな話を友達と語り合かせます。きのう見たテレビの話や恋の話、そして将来の話を夜が去ってゆくまで三人で

語り合うのです。音楽を何度も何度もかけ直しながらそして熱いコーヒートで。

金曜日の夜はとても不機嫌で私をなかなか眠りにつかせてくれません。目をしっかりと閉じて、頭の中で数字を数えていても、何度も部屋の明かりに手を延ばさせます。しかたなく読みかけの本を開き、明日の朝は早くても、あきらめて活字を辿るのです。外の明かりは外灯だけで、遠くから鶏の鳴く声を聞きながら活字を辿るのです。

土曜日の夜はとても元気が良く、華やかな街が大好きです。街には大勢の人波がくりだし、いろんな欲望や貪欲さがひしめきあっています。それを外側からじっと観察していると、とてもバカげたことやつまらないことで夢中になっている者たちに夜は今までの元気を失ってしまいました。余りにも平和すぎで、あの頃の夜を忘れてしまった者のすさんだ心に。

日曜日の夜はまた明日の夜の準備の為に私にかまわれないのです。それは私にとっても心寂しく一人きりの夜なのです。私は日曜日の夜がとても嫌いです。幼稚園児だったあの頃から大学生でいる現在に至るまで日曜日の夜の寂しさは変わらないのです。これからもきつとそうでしょう。世の中が変わっても七曜日の夜だけは昔のまま世界を覆うでしょう。

テーマ

『楽』

四年 石井 太治

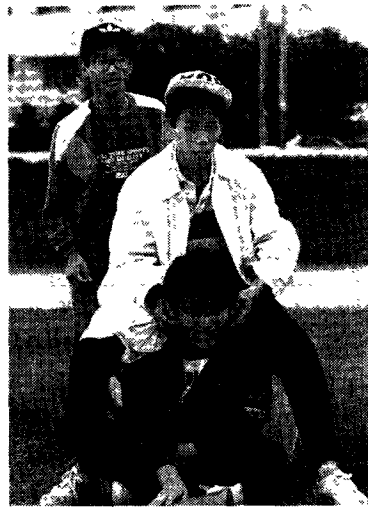
「夏」

もう早いもので身体がまだ子供の私も、四回生です。早い。早すぎる。矢沢永吉の「時間よ止まれ」。まさにこれです。

今から思えば、何でも良い思い出となってしまう。特に今回の焦点は、夏季合宿で大変お世話になった宮地獄神社開運殿のお手洗いです。朝、起きてすぐ、昼間、夜寝る前に何度も利用させてもらうお手洗いです。

独特の雰囲気、そしてハエ。そしてその上から聞こえる部員の声。なんだか夏を感じます。ことを済ませて階段を上がるとなにかしらないけれども安心感がふっと。ちょうど田舎に帰省した時の様です。そして汗が半切にポトリと落ちる練習へ気分も新たにはじめます。

この情景が社会人になっても、ハエを見ると、いや夏が来れば、あの若し日々を思い出すだろう。



「回転木馬」

三年 堂脇 裕志

いきなりですが、バイセントメリーの歌に「サークルゲーム」というものがあります。(まあこれは、聞いた話ですが……)

そして季節は巡る 回転木馬

ペンキの剥げた木馬たちの追いかけっこ。僕たちはもう戻れない

ただ過ぎさった昔を懐かしむだけ

それでも回り続ける回転木馬

今自分達は、人生という大きな回転木馬に乗っています。もう戻れない回転木馬に――

一日があつという間に過ぎていく毎日。そして――

――昨日、トンボを捕えていた少年が、もう二十才。――

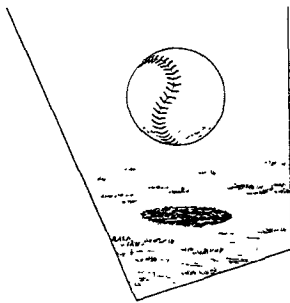
回転木馬に乗っていても、ただ昔を懐かしむだけでなく、その日、その日をもっと楽しんで

もっと充実したものになりたい。

そう思う、あと役員生活もあとわずかの自分です。ああ、この荒唐が発行したときは、この僕の寿命も終わりです。

秒読み開始。

あの時は楽しかったと語り合えるように……。



テーマ

『…………』

「喜」「怒」「哀」「楽」

四年 重富 佳代

「喜」四年間、書道部において、いろんな行事に参加してたくさん思い出と写真が残っています。

しかし、このごろ写真って残酷だなーって思う。写真の私は、若くて、明るく笑っていて、楽しかったその行事を思い出させ、せつなくなつて胸にこみ上げてくるものがあるから。写真は思い出の証拠であり瞬間である。ともあれ、今、卒業にむかって前進している私は、多少センチな気分になっているかも知れないが、心から「なつかしいな。」と思える頃は、もう学生じゃないでしょうね。

「怒」就職活動をしていて、「面接の時に、「あなたは今クラブで何か役員をしていましたか？」とよく聞かれます。私が「わが部は、男子しか役員になりません。」と答えると、「そうなの。」と驚かれる。

男女平等、女性上位の時代と言われて久しい。しかし、そう叫ばれるほど、じつは、みんな心の中で、「男の人にはしっかりしてはほしいな。」と願っていると思う。

将来、女子役員誕生の時を期待しながらも男子には、みんなの純粋な願望を忘れないでほしいと思う。

「哀」もうせん敷きー朝八時五十分に部室前に集合して一、二年生でもうせんを敷きま

す。
こんなことがあるなんて、自分が入部するときに聞いた覚えもないし、また勧誘する時も話してないと思う。もうせん敷きについていろんな考えがあると思うが、私は単なる後輩ならではの作業であると思わない。

一、二年の時は、先輩の分まで準備していても、三、四年になれば、先輩に準備してもらっているのだから、まさに、持ちつ持たれつの関係でしょう。

だから、いつも人にしてもらっているという状態で、それを何とも思わない人はいけないと、私は思う。

「楽」私の夢ー私の夢は幸福になることである。株で大もうけをするのか、バリバリのキャリアウーマンになるのか、平凡な主婦になるのか、いろんな幸福を描きながらもまだ分からない。

でも、最近「ハイ、あなたあくんして。」などやっている自分を想像してみたり、手をつないで歩いているカップルを振り返ったりする私は、案外普通の結婚を夢見てるのかと思ってしまう。

でも、やっぱり人と違う所があるとすれば手紙を筆で書き、床の間に自分の作品を掛けた

いと思っていることでしょうか。

彼と彼女

二年 安永 格

「彼女は僕に恋を教えた。」

彼女はなかなか背が高かった。僕はそれ以上に高かったので問題はなかった。彼女はなかなかかわいい子だった僕は……

問題はなかった。彼女は痩せてもなく太つてもなく、髪は長くて目は大きな方だった。優しさが顔に出ていて見るだけで心が落ちついた。純情で誠実で羨ましい程の情熱があった。そんな彼女の存在が嫌になつた時、僕の恋は死んだ……かっこいい……

「彼女は僕に愛を教えた。」

彼女は歳上だ。彼女は僕より早くこの世に現れ僕よりも多くの事を経験し多くの事を学んでいる。そんな彼女から受ける愛情は、暖かく強く陰りがなく限りない。でもそんな愛情を受けた僕は人に与えるという愛情を知らない。かなしい

「彼は僕に厳しさを教えた。」

彼はいつも黙って見ていた。その目は鈍くて僕はある種の恐怖を覚えていた。

彼は力強く、巨大で何物にも動かされない重く堅い存在だった。彼の前ではハッターは通

しない。嘘言ってもすぐばれる。若い僕には
彼か何を思いつくしようとしているのか理解
できなかった。彼は恐い

「彼は僕に喜びを教えた。」

彼は遊びが大好きだった。彼はいつも遊んで
いた。彼を見ていると遊ばない自分が損をし
ている様な感じがしてじっとしてられなくな
った。彼は遊び人

彼等は僕の前に姿を現しては消えた。彼等は
ある時は教師、ある時は同輩、先輩、後輩、
両親、姉、……さまざまな事を僕に教えた。
「彼等は僕に人生を教えた。」
そろそろ僕も教えよう。



「お父さん」

四年 高野 亜希子

「お父さん」

「今日は、あっこちゃんちで、ねんねする
の？」

朝早く出勤し、夜遅く帰宅する父のことを、
私はよそのおじさんと思っていたらしく、た
まに、私が起きている時間に、父が帰ってく
ると、このような誤解をまねく発言をしてい
たそうです。

私の父は、いわゆるマイホームパパではあり
ませんでしたが。ですから、休日ごとに「ハイ
キングだ」「ドライブだ」と、遊びに連れて
いってもらった記憶が、あまりありません。

ところが、最近になって何を思ったのか、
「呼子の朝市に行こう！」と、家族を日曜日
の朝五時に起こしたり、「桂枝雀さんの落語
にいくぞ！」と、家族分のチケットを買って
きたりと、家族で行動をしがります。結
局、大の大人四人で、落語を聞きにいきまし
た。家族で落語を聞きに行くうちは、めった
にないだろうと私は思います。

父は、私と顔をあわせれば、「肩をもんでく
れ！」と言わずに、それらしい素振りをしま
す。父は体格が良く、肩も凝っているため、
ありったけの力を出しても、「なんだっ。握
力ないなあ。蚊がかんだみたいだ。」と、

「ありがとうございます。」の代わりに言います。そこ
で、最近では、まず私は、「えー。やだ。」
と答えます。すると、父「あー。そんなこと
言っていないとね？あっこちゃんのお父さん
は、僕一人だぞ！」私「二人いたら困るよ
ね。」父「お母さん。あっこちゃんがあんな
こと言ってる。」母「あなたのお母さんは、
隣のおばあちゃんでしょ。」と、母も一緒に
なって、馬鹿な会話をするのです。お決まり
の会話なのに、なぜか笑ってしまいます。

冗談ばかり言っているけれど、私の父はこの
世で一人なのです。父が一生けんめい働いて
くれたから、私はこうして、のんびりと、大
学生生活を送れたわけです。先日、父は勤続三
十年の表彰をいただいでてきました。"と
らばーゆ"が流行の今、一つの会社に三十年
も勤めるということが、私にできるでしょ
うか。父の仕事に対する姿勢をみると、
「男の人は大変だなあ。」と、しみじみ思
います。私も来年の四月からは、社会人になる
予定です。〇しになったら、父と一緒にゴル
フを練習しようと思っています。

野
高
白
糸

Let's walking

三年 肥村 豊子

ある夜、私はちっともねむれなかった。さつき読んだ本のせい。そうかもしれない。いろいろな事を考えていて、頭が部屋の中の真暗やみをまわった。

ついさつき読み上げてしまった本に私は少し戸惑いを感じている。たぶんその内容に心を揺すぶられたからだと思う。その本は、私は少し違った考え方を教えてくれた。そして気がついたことには、私は今まで間違った生き方をしていなかったか、ということだった。

人は目の前で君の今まで通ってきた道は、間違いだよ、と言葉を投げつけられると立ち止まって迷路に迷い込んだような気分になる。だからと言ってあなたの正しい道を教えてあげますという看板はどこにも見あたらず、歩き続けてくたびれてしまう。その先は再びまた、百人が百人、それぞれ違った道へ進んで行く。その人一人の心は自分で正しいと思っただ方向へ歩いていくはずだ。私もそう生きてみようと思う。

誰だって、たぶん悩まない人なんていない。一人も。どんなえらそうにしてる人だって。自分がどこに立っているのか、まわりどんな建物があり、そんな人々が住んでいるのか。

か。その地は住みごこちが良いのかわるのか。そこを出て行くか、定住してしまおうか。もし、そこがすばらしくすてきな色に見えるのだとしたら、その地に足を留めずにはいられない。その地の人々に声をかけて見ずにはいられない。でもそんな人々の中にまわりの色を見ようとしないう人間もいるだろう、レンズが曇っている人も。それでは本当の色は見えては来ない。グリーンは茶色に、オレンジは灰色に見えることがあるとしたら、そんなのってない。心のレンズはいつも透明であってほしい。見えるものが全てが素直にしみ込んでいくように。人々は感動を持っていく。だから歩き続ける。



「無題」

四年 宮崎 隆司

するっていと なにかい
こんなところにすわりこんで、道に迷っていると
言うのかい おかしなことを言うんだね
え ここは、七隈に広がる田んぼの真ん中だ。
道などありやしねえ
おめえさん！ 俺様をからかっているのかい。

えっ なに そんな道迷っているんじゃない、
それじゃあ どの道に迷っているんだい。
はつきり言いな！おれ様は急いでいるんだ。

なにい なぜ、急いでいるかって？
なあに ここから東に 二里程の所にたつの

刻までにつかなくっちゃなんねえだ
そこに何かあるのかって

そこにはな柴田殿がひらかれた寺子屋がある
んだよそこでなにをしてるかって？

ううっ おめえさん おれ様の話を聞いて
はくれねえかい

俺様は、"読み書き"をしてえんだ。

だが、しかし、そうは間屋がおろしてくれねえ。
なんでも、そこには、地震よりも恐い
先輩というものがいて、いやがるおれ様たち
に無理矢理酒をのませやがる。それだけなら
まだいいんだ、ねの刻、いや、うしみつ時か
なあ おれ様が、床についたころだ、いきな

り「ドン、ドン、ドン、ゴンゴン、ゴン、ゴン」と扉を叩く音がする。びっくりして戸を開けると、そこには、一升瓶を持った先輩が、ニヤツと笑って立ってやがる。このあとは、話さなくてもさっしがつくだらう。他には、徹夜で、麻雀やカルタにつきあわされたら、いきなり、飛脚に乗せられて気がついたら肥後の国だったりするんだ。

まだまだあるんだ。
先輩が疲れて身体が痛くなると、腰をまっさあじさせられたり、気晴らしに、プロレス技をかけられたり、読み書きの態度が悪いと怒鳴られたりするんだ。ひどい話しさ。ええっ なぜ。そこまでの仕打ちをうけてもその寺子屋に通っているかって。

それはなあ、そんな先輩でも雀の涙の2分の1位の優しさを、ふと、見せて下さるんだよ。悩みがある時は、朝まできいてくれたり、銭がなくて毎日、粟飯ばかり食っていると、体をこわすからって言って米のご飯や、そばをおごってくれる。そんな時には、涙がこぼれそうになるもんだ。

他にもいろいろ教えてくれたり、可愛い先輩もいるしなあ、と考えると足が勝手に寺子屋の方に向いてしまう。

今、考えてみると、いい思い出が出来たなあ。いい先輩にも恵まれたしなあ。

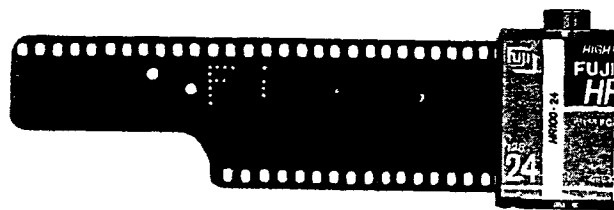
おおっ どうした。道が決まっただと。

いきなり、でかい声で何を言ひ出すんだい。

ぬわにい 俺様についてくるだと



そうか
道とは、これからの身の振り方だったのかい。
おもしれえ、俺様が、鍛えてやるぜ。ええっ、俺様かい、俺様の名は、隆司様だ。たかさん
とても呼んでくれ。
おっと、もう陽が暮れちまう。
さっさと支度しな。
出かけるぜ。



I HOPE YOU REMEMBER
GOOD MEMORY OF UNIVERSITY LIFE
FOREVER ----

年間行事

年間行事

春季合宿

三年 原口麻美

春休み、どこにもいけなかったので、この合宿に行くことを楽しみにしていました。場所は諫早。天気は良かったけれど（最終日は雨。）風が強くて肌寒い時期でした。オリエンテーリングでは、後から来ている班にみ

つけられないように目印を木枝や枯葉でかくしたのはI君とT君。目印の場所を聞くために小学生を鮎だまで釣っていたのはHちゃんとわたし。こうして汚い手を使いながらも、結局は、途中の川で時間いっぱいまで遊んでしまいました。帰り道、トランシーバーで遊んでいたM君とD君は係りの人に怒られてしまいました。帰り着くと足はもうガタカタ……。

このほかに、スポーツレクレーションではしらせられたり、空き時間にバレーボールをするなど、万年運動不足のわたしにはそれはそれはこたえた合宿になりました。肝心の討論ですが、班別、学年別に分かれ、新入生を迎えるには”などの議題で行ないました。新二年生にとっては、みんなで部のことを話し合うの初めてなので、とてもエキサイトしていたようです。わたしはもう二回なので、かなり冷めていました。はじめての春季合宿の時、”今年一年の目標”をたてたのに、いったい何人の人が守れたのでしょうか。もうがっかりです。「この場限りになるのなら、わざわざ討論をするまでもないのでは？」と思ってしまう。今年立てた目標は皆さん守りましょうね。

この合宿で特に心に残っていることは、最終日の夜のことです。女の子だけで輪になって様々なことを話しました。当然、部員のうわさ話です。こう何十人も部員がいると、いくらでも話の種が湧いてくるものでありま





す。「○○先輩たちと○○にあって○○になったよ。」「やっぱり、○○さんは○○だったのね。」「でも○○は○○じゃないと。」女の子って、ほんとにこの場に居ない人話を話にだすのは好きなのです。話の種になってしまった人には申し訳ないとは思いつつも……。女の子同士でゆっくり話をする機会って、考えてみれば合宿の時くらいですすよね。「多少、睡眠不足でも明日バスのなかで寝れるし。」と思いき、遅くまで起きていました。こうして、合宿は無事に終わりましたが、結局は、○○先輩の豪快な笑い声のおかげでバスの中では眠れず、日ちゃんと渋い顔のままコンパ会場へと向かっていきました。

学内展の感想

一年 亀元 美奈子

学内展だから特別な書道をする訳でもなく、いつも通りの練習の中から積み上げられた成果を発表する場だったので、それを終えて“なんだかあつという間だったな”という気がします。でも、それはそれ一年生にとっては自分の作品がはじめて展示される場なのである。半紙といえども例年のごとく作品が出来あがらない。それでも書いて書いて書きまくった。最後にはあきらめ“質より量だ”というのを心の奥深くに留めることにした。

。周りでは半切に先輩方がさらさらと筆をすすめている中、じりじりとしびれる足にむち打ち（何度となく妥協した）が……！！書いた半紙を何とか選んで頂いた。

そして表装、連盟展の時は半切や連落といった長い作品の表装しかやってなかったの小さな自分の半紙がきちんとしわ伸ばしされ、一つの作品になったときは自分も書道部員として書道をしているんだなあとしみじみ実感してしまっただ。

飾り付も無事終り、学術文化発表週間が

はじまった。受付をされると言われても訳がわからず、案内の時はただただ黙ってくっついて歩いているうっとうしい子にすぎなかった。

あろう事かならう事かOBの方の案内をすることになり非常にあせった。「じゃあ、説明して下さい。」と言われ「見ての通りなんですけどお！！」と思いつながら「上が蘭亭序で下の作品が九成宮です」とたどたどしくも見ての通りの事を話はじめた。1年生の作品はそれで済んだのだけれど、半切の前にたたずんだときには“先輩方の作品の説明なんて無理だあー”“だいたい書いた本人にしか分かる訳がないよ”と頭の隅に置き、仕方ないので世間話を始めてしまった。そんな所に天の助けか役員の方が来られ色々説明されていたのを“へえーそうなのか”と思いつき入っていた。所詮、経験勉強不足の1年生に説明など出来る訳がないのだ。（それとも私だけなのだろうか！）

学内展5日目に赤木先生が来られ批評をされた。「たいへんよく勉強してますね。」「いいです。」この言葉がとて深く印象に残っている。連盟展のときのような頭からダメだと言われる批評の方が多かったの、こんなほめ言葉が聞けてとてもうれしかった。

この一言で、何枚も何枚も書いた努力がむくわれたような気がします。また、この一言で、学内展が成功であったという事が形となって現れたのではないでしょう。

夏季合宿 嗚呼、青春の夏季合宿

二年 渡辺 太郎

合宿の前夜というものは、いつもなかなか寝つけないものだ。自分は、二年目だが、やはり合宿というのはそれなりの何かがあるのだ。

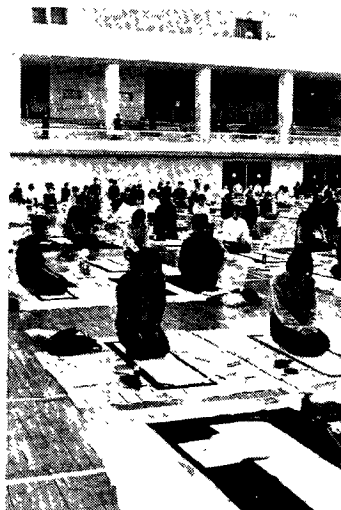
自分達二年生は半分の四人が班長をしている。自分は班長ではないが、それと同じ心構えでのぞまなければならない。班長というのはとても重要な任務だ。それと同じ心構えでのぞむということは、自分に課せられた任務も重要なのだ。また、自分は保険係という役割にもついている。これも部員の健康を管理する重要な任務だ。それだけ今回の合宿は自分にとって大変重要なものなのだ。

夏季合宿といえば、やはり練習である。この合宿での練習というのは、各個人の書技面に大きく関わってくる。特に一年生にとっては、なおさらのことである。今回は、七隈祭部展の作品づくりという目標のもとに練習を行った。三十周年ということもあり、作品のレベルもかなり上でないと、A作品として



認められない。二日目からは朝から晩まで練習だ。それこそ、腰がまがり、膝に水が溜まるほどの練習がつづく。でも、まあ、それが夏季合宿の醍醐味ってやつだね。僕はそう思うよ。そんな中で、練習のあいまの朝昼晩の飯時は、心やすまる、くつろぎの一時だ。皆が「まってきました。」とばかりに飯をほおぶる。

顔が思わずほころび、幸せな気分になるのは、こんな時かもしれない。しかし、中にはご飯地獄にひきずりこまれる者も少なくない。莫大な量の飯に顔をひきつらせながら食するものもいる。保健係のぼくとしては、お腹をこわさない程度に飯をくらってほしいものだ。でもまあ、それが合宿の醍醐味ってやつだね。そして、やっぱり夏季合宿といえば茶話会です。班ごとにゲーム方式で競い合い、白熱した戦いがくり広げられた。それでこそ各班の団結が強まるというものである。しかし、その結果を僕は覚えていない。それは、それ以上に自分達にとって、すごい出来事のためだ。あの暗い海にはいく人も書道部員の夢がつまっているのだ。その夢につつまれて僕らは子供のようにはしゃぎまわった。「うわー。うおー。」暗い海にいつまでも僕らの声が響きつづけるのであった。全身ずぶぬれの僕らに、何物にもかえがたい時間が通りすぎていた。



西日本高等学校揮毫大会

二年 碩本孝洋

今年で三十回を迎える西日本高等学校揮毫大会は、十月二十一日に開催された。今大会は、福岡県内は元より県外からも、より多くの高等学校に参加していただく事を目標として行ない、又、以前揮毫大会に参加していただき、ここしばらくの間参加されていない高等学校にも積極的に交渉を行なった。今回の活動により、大会に参加してみたいという意志を示されたが他用のため参加されなかった高等学校には、是非来年以降の大会に参加していただきたいと熱望するものである。

さらに、今回は「とびうめ団体」と重なった訳だが、結局、初出場校四校を含む二十八校、百八十八名の高校生が参加された。高校生の皆さんには、この大会を通じて他校の書風を学び自己の書にいかすなど、今後の書活動の糧となれば幸いであると考ええる。

書道部員は、本大会を終えることにより、部の年間行事を全てクリアーすることになるが、この最大行事を通じて部員一人一人が自覚認識を深め、部全体がより団結したものと考える。



今年、団体の部で佐賀西高等学校が優勝を飾った。三十回という一つの節目の大会であったが、今年、県外の高等学校が優勝されたという事により、来年以降の大会には多くの県外校が参加することが望まれ、そのために我々福岡大学書道部は一年間の集大成である西日本高等学校揮毫大会をより素晴らしいものとしてもらいたい。

福岡大学書道部創部三十周年記念式典・祝賀会

平成二年十二月一日（土）、福岡ガーデンパレスにおいて、福岡大学書道部および福岡大学書心会（OB会）共済の「福岡大学書道部創部三十周年記念式典・祝賀会」が行なわれた。

式典は小西高弘書道部長（経済学部教授）の式辞の後、OB会を代表して柴田一夫書心会会長（昭和三十六年度卒）が挨拶、式典には佐藤勲夫有信会事務局長等、多数の来賓が出席し、山下宏幸学生部長（工学部教授）が来賓を代表して祝辞を述べた。

又、創部三十周年を記念して、小西書道部長より、山下学生部長へ記念樹『樺』の目録を贈呈した。（平成二年十二月二十二日植樹↓学而会館南側）
引き続き、小西書道部長より「長年にわたり西日本高等学校揮毫大会並びに福岡大学書道部の発展に尽力した」として三名に感謝状と記念品を贈呈した。

◎福岡県立修猷館高等学校教諭

肥塚 善和

◎福岡県立明善高等学校教諭

森 俊之

◎佐賀県立佐賀西高等学校教諭

米倉 信義

感謝状贈呈の後、古田龍夫名誉部長（福岡大学名誉教授）

の乾杯で祝宴に入った。祝賀会は終始なごやかな雰囲気で行なわれ、東京、大阪など全国各地より六十余名の卒業生たちが駆け付け、昔話に花が咲いた。最後に出席者全員で校歌を合唱し、西 隆義（昭和三十九年度卒）の万歳三唱で会の幕を閉じた。

なお、「福岡大学書道部創部三十周年記念書心会展」を十一月二十七日（火）～十二月二日（日）まで福岡市美術館（大濠公園）において開催した。

◇来賓

山下 宏幸 工学部教授（福岡大学学生部長）

種岡 輝雄 経済学部教授（福岡大学学文会参与）

景山 和幸 課長（福岡大学学生課）

田中 孝則 様（福岡大学学生課）

藤井 昌輝 副幹事長（福岡大学学文会）

佐藤 勲夫 事務局長（福岡大学同窓会「有信会」）

木村 唐羊 先生（23・27・29回揮毫大会審査員）

宮崎 正嗣 先生（9・11・13・17・20・30回揮毫大会審査員）

宮崎 正嗣 先生（9・11・13・17・20・30回揮毫大会審査員）

回揮毫大会審査員

山田 泉心 先生 (27回揮毫大会審査員)

肥塚 善和 部長 (福岡県立修猷館高等学校教諭)

森 俊之 部長 (福岡県立明善高等学校教諭)

米倉 信義 部長 (佐賀県立佐賀西高等学校教諭)

福岡学生書道連盟運営委員長 (九州大学書道部)

荒川 善行 様 (西南大学書道部OB)

渡辺 正男 常務 (平助筆復古堂)

◇書道部関係

古田 龍夫 名誉部長

赤木 石掃 書道部講師

小西 高弘 部長

柴田 一夫 書心会会長

森 裕之 第三十一代幹事

◇卒業生出席者(六十五名)

書道部三十年の歩み

		書活動（県展等）	西日本高等学校揮毫大会	学文会
年	6月 同好会として書道部設立（発起人）新海蘇石（講師）白水谷東就任			
年	（初代幹事）柴田一夫（部長）田村豊教授就任11月36年4月を以って書道同好会の合併により部昇格を認められる	西部毎日展入選諸隈郁智		
年	（2代幹事）諸隈郁智（講師）柳田徴川就任		第1回大会（審査員）荒牧香陽、有元成瓊、大坪藍海、萩野天嶺、柳田徴川（優勝）朝倉高（2位）修猷館高（3位）筑紫女学園高	
年	（3代幹事）野田良一（講師）赤木石掃就任		第2回大会（審査員）赤木石掃、大坪藍海、坂口雅風（優勝）筑紫女学園高（2位）西田川高（3位）福岡女子高	常任幹事 原通幸 （書記）
年	（4代幹事）西隆義（部長）古田龍夫教授就任	福岡県展入選野田良一、安河内克行	第3回大会（審査員）（優勝）唐津西高（2位）筑紫女学園高（3位）久留米商業高	
年	（5代幹事）田鍋義邦 11月機関誌「荒鷲」創刊号発刊模範揮毫会開催		第4回大会（審査員）赤木石掃、池邊松堂、井出正風、栗原瑞雲、斉藤鶴跡（優勝）筑紫女学園高（2位）田川高（3位）唐津西高	
年	（6代幹事）渡辺正道三人展開催（書道・写真・美術）	福岡県展佳作・・渡辺正道、入選・・安河内克行、石橋健吾	第5回大会（5周年記念大会）（審査員）大坪藍海、樺田翠山、篠原紫流、土肥春嶽、平川朴山（優勝）唐津西高（2位）田川高（3位）筑紫女学園高	
年	（7代幹事）有田康宏第1回APS展開催（三人展より発展）	福岡県展県教育委員会賞・・近藤敏則、入選・・渡辺正道、船越達也	第6回大会（審査員）赤木石掃、上原竹仙、栗原瑞雲、中村龍石、松永鶴雲（優勝）宮崎南高（2位）武雄高（3位）朝倉高	

42年	(8代幹事) 二村文夫 12月第2回 APS展	福岡県展佳作・原博幸、葉玉幸俊、入選・近藤敏則、平井晴彦、二村文夫	第7回大会(審査員) 樺田翠山、齊藤鶴跡、田村寿麻、土肥春嶽、馬場清香(優勝) 田川高(2位) 筑紫丘高(3位) 筑紫女学園高	
43年	(9代幹事) 野福美 12月第3回 APS展	福岡県展入選・平井晴彦、前崎垣春	第8回大会(審査員) 安部遊雲、池邊松堂、上原竹仙、掘神山、前崎南嶂(優勝) 福岡女子高(2位) 田川高(3位) 武雄高	
44年	(10代幹事) 小倉博俊 11月第4回 APS展	福岡県展県議会議長賞・尾中正岩田屋賞・平井晴彦福岡市教育委員会賞・森廣子新人賞・江川富登身入選・安河内克行、船越達也、前崎恒春、福井義博、納富扶沙子	第9回大会(審査員) 川上南溟、栗原瑞雲、篠原紫流、土肥春嶽、宮崎正嗣(優勝) 福岡女子高(2位) 田川高(3位) 筑紫丘高	
45年	(11代幹事) 小野義廣	福岡県展入選・高橋幸代、二村文夫、船越達也、松田正彰、江川富登身、高木正俊、納富扶沙子	第10回大会(十周年記念大会)(審査員) 赤木石掃、上原竹仙、中村龍石、平川朴山(優勝) 福岡女子商業高(2位) 筑紫丘高(3位) 田川高	常任幹事 江上隆行 (書記)
46年	(12代幹事) 野小生周作	福岡県展入選・安河内克行、高橋幸代、平井晴彦、前崎恒春、尾中正、森廣子、高木正俊	第11回大会(審査員) 小川溪水、豊島嘉穂、前崎南嶂、宮崎正嗣(優勝) 筑紫丘高(2位) 宮崎南高(3位) 神崎高	
47年	(13代幹事) 岩切公憲	福岡県展入選・安河内克行、平井晴彦、二村文夫、船越達也、森廣子、納富扶沙子、平田順子、三苦讓二	第12回大会(審査員) 赤木石掃、小川溪水、中村龍石、安河内克行(優勝) 福岡女子高(2位) 福岡女子商業高(3位) 筑紫丘高	常任幹事 河野慎 (書記)
48年	(14代幹事) 地頭園裕孝	福岡県展入選・高橋幸代	第13回大会(審査員) 栗原瑞雲、前崎南嶂、宮崎正嗣、二村文夫(優勝) 筑紫丘高(2位) 福岡中央高(3位) 福岡女子商業高	常任幹事 園山辰夫 (副幹事長)
49年	(15代幹事) 押越和則	福岡県展入選・荒尾記史朗	第14回大会(審査員) 池邊松堂、上原竹仙、土肥春嶽、原博幸(OB)(優勝) 筑紫丘高(2位) 福岡中央高(3位) 東福岡高	

年	(16代幹事) 山村昌次・12月創立十五周年記念書道展開催(少年文化会館)	福岡県展朝日新聞社賞・前崎恒春	第15回大会(十五周年記念大会)(審査員)赤木石掃、豊島嘉穂、掘神山、前崎恒春(OB)(優勝)福岡中央高(2位)城南高(3位)西田川高	
年	(17代幹事) 永野雄二	福岡県展岩田屋賞・前崎恒春入選・平井晴彦、前崎恒春、荒尾記史朗、佐賀県展伊万里市長賞・荒尾記史朗	第16回大会(審査員)上原竹仙、田村寿麻、吉田石林、安河内克行(OB)(優勝)城南高(2位)福岡中央高(3位)鹿屋高	
年	(18代幹事) 高倉潔(堤寛)・古田龍夫部長退任謝恩祝賀会	福岡県展奨励賞・高橋幸代、入選・平井晴彦、結城健、荒尾記史朗、前崎恒春福岡県美術協会正会員となる。佐賀県展県議会議長賞・荒尾記史朗	第17回大会(審査員)土肥春嶽、福井深仙、宮崎正嗣、高橋幸代(優勝)城南高(2位)東海大学第五高(3位)明善高	
年	(19代幹事) 岩野高利(大山一則)小西高弘教授部長就任	福岡県展入選・谷口薫、荒尾記史朗	第18回大会(審査員)土肥春嶽、豊島嘉穂、吉田石林(優勝)城南高(2位)東福岡高(3位)明善高	常任幹事 高倉潔 (涉外)
年	(20代幹事) 森田健二	福岡県展入選・高橋幸代、荒尾記史朗	第19回大会(審査員)白川青巖、田村寿麻、松永鶴雲、吉田成堂(優勝)城南高(2位)鹿屋高(3位)東福岡高	常任幹事 岩野高利 (会計)
年	(21代幹事) 十代田雄治郎6月創立二十周年記念祝賀会12月創立二十周年記念書道展	福岡県展入選・高橋幸代、桜井典、高橋峰生佐賀県展入賞八谷俊彦	第20回大会(二十周年記念大会)(審査員)上原竹仙、栗原瑞雲、土肥春嶽、宮崎正嗣(1位)築上西高(2位)大川高(3位)城南高	常任幹事 桑原淳一 (副幹事長)
年	(22代幹事) 床嶋俊一	福岡県展県知事賞・田中博美入選・桜井典	第21回大会(審査員)池末礼禧、肥塚雲珪、豊島嘉穂、松永鶴雲(優勝)大川高(2位)武雄高(3位)甲陵高	
年	(23代幹事) 志岐直樹	福岡県展入選・桜井典、佐賀県展入選・濱田清治	第22回大会(審査員)上原竹仙・師村妙石・田中江舟・山口流水(優勝)東福岡高(2位)大川高(3位)福岡西陵高	

58年	(24代幹事) 江越健二	第15回日展入選…徳久政機, 福岡県展入選…桜井典, 志岐直樹, 中村純一郎, 佐賀県展佐賀県文化団体協議会賞…満生憲親, 入選…江里口吉光	第23回大会(審査員) 木村唐羊・倉富康堂・坂口雅風・白川青巖 (優勝) 修猷館高(2位) 南筑高(3位) 築上西高
59年	(25代幹事) 藤代裕之 1月古田龍夫先生叙勲記念祝賀会(勲三等瑞宝賞) 10月 小西部長英国留学の為, 佐々木猛部長代行就任	福岡県展入選…市川初江・藤代裕之	第24回大会(審査員) 大石柳堂・豊島嘉穂・前崎南嶂・吉田成堂 (優勝) 南筑高(2位) 修猷館(3位) 築上西高
60年	(26代幹事) 尾崎光義・11月 創立25周年記念書道展・ 創立25周年記念祝賀会「書心・荒鷲」25周年記念誌発行	第17回日展入選…徳久政機第2回読売書法展秀逸…徳久政機, 入選…桜井典, 坪矢一義, 福岡県展入選…高橋幸代, 徳久政機, 平井晴彦, 三苦讓二, 藤代裕之, 原浩志	第25回大会(審査員) 片山智水・田村寿麻・松永鶴雲・山口流水 (優勝) 福岡商業高(2位) 修猷館高(3位) 延岡西高
61年	(27代幹事) 木下晋	第3回読売書法展特選…徳久政機, 入選…桜井典福岡県展入選…徳久政機, 原博幸, 平井晴彦, 山村昌次, 桜井典, 藤代裕之, 平田聖子	第26回大会(審査員) 阿保直彦・白川青巖・中村龍石・吉田成堂 (優勝) 延岡西高(2位) 佐賀西高(3位) 福岡商業高
62年	(28代幹事) 北本正範	第19回日展入選…徳久政機第4回読売書法展入選…桜井典, 満生憲親, 中村純一郎福岡県展入選…高橋幸代, 三苦讓二, 桜井典, 満生憲親, 中村純一郎, 松本直人, 石橋正隆, 岸原貞弘	第27回大会(審査員) 片山智水・木村唐羊・栗原瑞雲・山田泉心 (優勝) 佐賀西高(2位) 福岡商業高(3位) 東海第五高
63年	(29代幹事) 林英樹	第5回読売書法展秀逸…満生憲親, 入選…桜井典, 松本直人福岡県展入選…徳久政機, 桜井典, 中村純一郎, 松本直人, 石橋正隆, 鶴原哲夫	第28回大会(審査員) 阿保直彦・園山硯峰・前崎南嶂・松永鶴雲 (優勝) 東福岡高(2位) 柏陵高(3位) 佐賀西高
平成元年	(30代幹事) 宮崎隆司	第21回日展入選…徳久政機第6回読売書法展入選…満生憲親, 松本直人福岡県展入選…桜井典, 満生憲親	第29回大会(審査員) 片山智水・木村唐羊・田村寿麻・道岡香雲 (優勝) 修猷館高(2位) 柏陵高(3位) 太宰府高
2年	(31代幹事) 森裕之 11/27~12/2 創部30周年記念書道展 12/1 創部30周年記念式典・祝賀会 30周年記念誌発行	第七回読売書法展 読売新聞社賞…徳久政機, 入選…松本直人, 満生憲親 福岡県展入選…桜井典, 中村純一郎, 松本直人, 満生憲親, 石橋正隆, 江越はつ	第30回大会(審査員) 白川青巖・宮崎正嗣・吉田成堂・吉野松石 (1位) 佐賀西高(2位) 南筑高(3位) 修猷館高

〈創立20周年記念表彰〉

名称	氏名	事由	備考
感謝状	古田 龍夫	昭和38年より15年の長きにわたり書道部長として尽力された功績	書道部長
感謝状	赤木 石掃	昭和37年より今日に至るまで書道部講師として尽力された功績	書道部長
感謝状	柴田 一夫	書道部創立に寄与され、初代幹事として今日の書道部の基礎を築かれた功績	書道部長

〈創立25周年記念表彰〉

感謝状	柴田 一夫	書道部創立に寄与され、長年にわたり書心会会長として書道部および書心会はもとより福岡大学の発展に尽力された功績	福岡大学長
感謝状	原 通幸	書道部創立に寄与され、第1回揮毫大会開催など今日の書道部の基礎を築かれた。	書道部長
感謝状	三浦 勝	書道部創立に寄与され、第1回揮毫大会開催など今日の書道部の基礎を築かれた。	書道部長
感謝状	諸隈 郁智	書道部創立に寄与され、第1回揮毫大会開催など今日の書道部の基礎を築かれた。	書道部長
感謝状	徳久 政機	昭和58年度、60年度「日展」入選を果たすなど書道部および書心会はもとより福岡大学の進展に功績をあげられた。	福岡大学長
感謝状	前崎 恒春	福岡県展において昭和50年度「朝日新聞社賞」、翌51年度「岩田屋賞」を受賞され、現在福岡県美術協会会員として活躍されるなど書道部および書心会はもとより福岡大学の進展に功績を上げられた。	福岡大学長

〈創立30周年記念表彰〉

感謝状	肥塚 善和 (修猷館高)	揮毫大会を通して長年にわたり、揮毫大会並びに書道部の発展に尽力された功績	書道部長
感謝状	森 俊之 (明善高)	揮毫大会を通じて長年に渡り、揮毫大会並びに書道部も発展に尽力された功績	書道部長
感謝状	米倉 信義 (佐賀西高)	揮毫大会を通じて長年に渡り、揮毫大会並びに書道部の発展に尽力された功績	書道部長

事務局インタビュー

山村 昌次 先輩

「御馳走様でした。そして、御苦勞様です。」

そろそろ肌寒くなってきた平成二年十一月十六日五時。山村さんは、部室の方にやって来られました。部室にその時、居たのは四回生の二人の先輩でした。マイクとノートを用意していた担当自分を含めた二人を横目に先輩は、いきなり四回生の先輩と連盟のことについて話を始められたのです。

「ボーッと立ちつくして、五分。やっとインタビューが始まろうとしたその瞬間。」

「マイクはいいから、まず聞きたいことはなんですか？」と聞かれ、「えっ、あっ、その、はあ」としどろもどろに説明し、

「うん、それなら、コーヒーでも飲みにいこか」とおっしゃられ、いきなり場面は、文系センター十六階、スカイラウンジに……講師練習員で最中、うしろ髪をひかれつつも担当二名、自分と会計・庶務のJはニタニタ笑いながら、福岡市を見渡せる、はるか十六階の椅子に座っているのであった。

仕事も忘れ、ハンバーグステーキランチをいただいた二人（ちなみに山村さんは、和風ステーキ定食でした。）は、ついに、本筋に入った。

まずは、山村さんの現役時代のお話からで

あった。現役当時、幹事をされていた先輩は真剣にそして本当に部に対して燃えていらした。この件に関しては、山村さんのOB投稿を読んで頂きたい。この話は、現役の学生に読んで欲しいとおっしゃっておられた。現役の学生諸君！これは必読！！

そして、OB書心会と福大書道部との在り方。OB書心会それは全て現役の為。つまり、OBが現役を活かすのではなく、現役がもっと頭を使い、そしてOBを活かして欲しい。今は、まだまだ活かしきっていない。今、現役のすぐそばに居て下さる山村さんをもっといい意味で利用し、もっともっと勉強して欲しいと……。

このほかに、先輩のこと等もお聞きした。「やっぱり、先輩というのは、めちゃくちゃかわいいものやね。同じ事務局をやっている米島は、俺が四年の時の一年なんやけど、やっぱり今も、その時と同じ感覚で付き合っているもん」と。先輩がかわいいというのは、昔も今も変わらないみたいです。今でも、卒業したOBの先輩が顔を出したりすると、うれしそうです。また、現役の諸君には、その後輩をきちんと育ててほしいとおっしゃっていました。

そして最後に、現役の時も、そしてもちろん現在も真剣に書道部のことを思っ下さっておられる山村さんは、

「お前たちも、一生懸命やっただろ！！それなら、その代々に誇りをもって、現役の

時も、そしてOBになっても、時には一生懸命やっていた当時を振り返って、しっかりやっていてほしいと思うね。」とおっしゃられました。この言葉は、あとわずかで役員を下り四年となる二人には、本当に深く心に刻まれた言葉でした。

まだまだ貴重な話をお聞かせ頂いたのですが、今回はこれぐらいにしておきましょうか。とにかく、日頃こうしてOBの先輩とじっくり話をする機会がなかなか持てない今、今回、山村さんのお話を直接聞くことのできた自分たちは、文系センターを出て、帰路の途中「よかったなあ。」とつぶやいたのです。

ただその時、自分たち二人の頭をよぎったのは、お腹をすかして（たぶん）自分たち二人を待っている二、三年の顔でしたが、出た言葉は、「ああ、おいしかったなあ。」

ともあれ、お仕事のこと、お疲れのところ自分たちの無理にお答え頂き、本当にありがとうございました。そして、事務局長、長い間御苦勞様です。これからも、自分たちにご指導の程、よろしくお願いいたします。山村先輩。

文責 堂脇裕志

編集後記

創部三十周年記念号「荒鷲」がついに完成しました。今回の荒鷲は、自由投稿にテーマを設定し、各個人の物事への考え方、とらえ方を取り上げ、紙面を通して、読者に伝えていければと考え、今まで取り組んでまいりました。

この荒鷲を通して、何年後か、現役当時は振り返り、懐かしんでいただけでは幸いです。又、三十周年を迎えた書道部を、より発展させる為に、これを機会に、部員一同、頑張っていきたいと考えています。

最後に、本号「荒鷲」発行に御協力頂きました関係者各位の方々に対して部員一同感謝し、心より厚く御礼申し上げます。

堂脇 裕志
上村 俊英

「荒鷲」

創部三十周年記念号・第三十一号

福岡大学学術文化部会書道部機関誌

平成三年十二月 発行

発行責任者

柴田 一夫

編集責任者

森 裕之
堤 寛

発行 福岡大学学術文化部会書道部

〒八二四一〇一

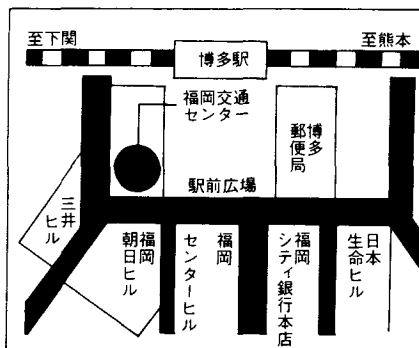
福岡市城南区七隈八一十九一

電話 八七一一〇四七二



福岡店

〒812 福岡市博多区博多駅
中央街2番1号
福岡交通センター3F



☎ / 092 (451) 2127(代)



TOTAL GIFT STATION

本社：〒812 福岡市博多区博多駅南1丁目9-11
電話 代表092(431)6161 FAX092(411)4212
熊本営業所：〒860 熊本市紺屋町2丁目45
電話 096(355)0095 FAX096(354)4487



——デザインから製品まで——

Fuji Silver Cup *Fuji Bright Cup*

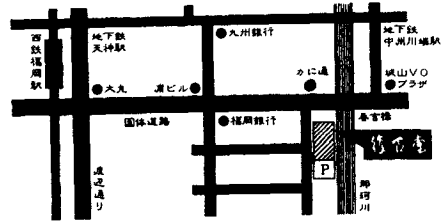
カップ・トロフィー・楯・メダル・バッジ・ゴルフ用品・総合記念品

株式会社 大和商会

九州支店 〒812 福岡市博多区博多駅東2-4-14 電話092(473)7721番(代表)
東京本社 大阪 仙台 札幌 FAX092(472)4054

●アトリエメニュー

書画用筆墨硯紙・香
色紙・短冊・料紙
和文具・書籍
額・表装・貸額
搬入出引受
赤ちゃん筆、御用命承ります



—— 駐車場完備 ——
大丸デパートより徒歩5分

電話予約・お問い合わせ
092-761-5122(代)



SINCE 1501 創業250周年記念

平助筆 復古堂

〒810 福岡市中央区天神2丁目7-12 TEL 092-761-5122(代) FAX 092-761-5127

書道用具・書籍

雲峯堂

〒812
福岡市博多区下川端6-113 ☎(092)281-1550(代)

書道用品専門・額

松花堂

〒810 福岡市中央区天神2丁目7-12(天神宮富ビル4F)
西鉄グランドホテル東口 TEL 福岡(092)714-0729

美術表装・ギャラリー

晚香堂

☎092(741)0897

●営業時間 午前10時～午後8時 日有り
〒810 福岡市中央区大濠1丁目3-5 サンリッチ大濠1F
(福岡営業台目コ)

【Pis】

三菱油性マーカー【ピース】

インク色：黒・赤・青・緑・橙・黄・紫・茶・空色・桃
PA-151T (太+細)
1本150円、8色セット1,200円、10色セット1,500円
PA-121T (細+極細)
1本120円、8色セット960円、10色セット1,200円
*表示価格に消費税は含まれておりません。

三菱鉛筆株式会社

筆・墨・硯・紙・展覧会用額及軸装



和漢文房舗 硯山

福岡市中央区天神3-3-14 ☎092(721)1644
下関市綱江1丁目3-16 ☎0832(23)6386
東京都港区西新橋1-13-4 ☎03(580)2717

オートバイや乗用車から、バス・トラックまで、バッテリーといえば**ユアサバッテリー**です。



スーパーユミクロンMF チャレンジMF エクセイトMF 完全密閉型バッテリー

PIONEER
音と光の未来をひらく

ハイオニア総合カタログ

LaserDisc

SEED

WAVE

PIONEER BODYSONIC

家庭用レーザーカラオケ

private

private SELFIE

IMPRESSO

COMPONENTS

car tozeria

TELEPHONES

LAZAM
SANDEN CAR AIRCON

SANDEN

原産元 サンデン自動車部品

原産元 サンデン株式会社



九州ユアサ電池販売株式会社

〒812 福岡市博多区比恵町13番7号
TEL 代表 (092) 431-7061
FAX (092) 471-1126

本 社 福 岡 分
管 所 久 留 門 大 宮 児 島
長 崎 崎 本

36年度卒 柴田 一夫

40年度卒 田鍋 義邦

知識・深呼吸

積文館
SEKIBUNKAN

本 社：福岡市南区大楠2-23-5
☎092 (526) 2311

片江店：福岡市城南区片江5-51-15
☎092 (863) 6104

祝

チヨ一コー醬油(株)

西 隆 義

三十九年卒

佐藤ビジネス専門学校

安河内 克行

三十九年卒

祝 30周年

五十六年度卒業生

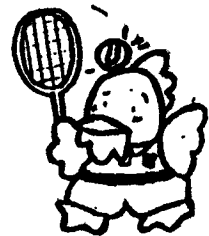
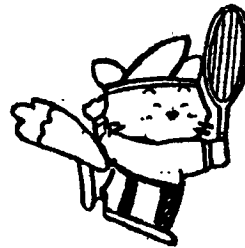
- 十代田雄治郎
- 酒井 昌弘
- 重松 裕人
- 佐藤 雅秋
- 鶴田 定司
- 大家 一之
- 松尾 幹雄
- 浦 泰介
- 三小田佳子
- 中村 和美
- 原口 豊子
- 小柳 英子
- 田代 弘美
- 引地 睦子

お預け入れ100万円以上300万円未満

しんわ スーパーMMC

お預け入れ300万円以上

しんわ スーパーMMC300



ふれあって 未来へ。

親和銀行

世 讚 会

46年度卒業生一同

安部純一郎	円城寺重憲
小野 善広	金堂 雅文
金丸 弦一	小溝 信隆
高木 正俊	安河内純一
横沢 順	渡辺 進

祝 福大書道部創立30周年

昭和55年度卒業生一同

祝 福大書道部創立 30 周年

井上	山村	萩本	南部	内野	板倉	荒尾記史朗
祐子	昌次	洋子	好孝	俊彦	義男	

51 年度卒業生一同

<p>九銀不動産鑑定所</p> <p>野端 富継</p> <p>五十二年 度卒</p>	<p>観音寺信用金庫</p> <p>松本 健一</p> <p>五十二年 度卒</p>	<p>諫早消防署</p> <p>永野 雄二</p> <p>五十二年 度卒</p>
---	--	--

祝 創部 30 周年

53 年度卒業生一同

◇嘉村 浩之

◇堤 寛

◇嘉村美千代 (穴見)

◇八尋 厚子

◇高尾 康弘

◇結城 健

◇高倉 潔

◇新原智香子 (小柳)

◇高倉真由美 (山口)

◇高田 直記

松本
幹倫

保坂
逸朗

野小生
周作

遠藤
信廣

47 年度卒業生一同

祝 創部 30 周年

五十年
度卒業生
一同

山本
登

押越
和則

株式
会社

旭工務店

福岡市博多区博多駅南5-10-13

TEL 092-431-4131(代)

FAX 092-451-3294

志岐 直樹

内田 崇之

和田 暁美
(三村)

江里口吉光

松本 直人

山根 一
(大宮)

坪矢 一義

津村 文彦

貞清 福代
(高橋)

中村純一郎

梅崎 孝夫

三山 素子
(高杉)

満生 憲親

松山 理恵

南里 公恵
(西口)

山城 邦敬

鷺崎ゆみ子

久保山千枝
(簗原)

小田部二三典

平田 経子

58年度卒好仇会有志一同

祝 福大書道部創立 30 周年

54 年度卒業生一同

岩野 高利

智春◎・高人◎・沙織里◎

松田 一寿

知佳◎・尚佳◎・行史◎

大山 一則

奨悟◎・知恵◎

横田 美登里

朋加◎・周平◎

河野 龍一

佐代子◎・寛和◎

米嶋 邦章

隆廣◎・陽寛◎

高山 清美

貴宣◎・宏美◎・優貴恵◎

鹿毛 博郁

吉田 富美子

中園 良子

純◎・亮◎

河野 清文

舞松原表具

■美術表装一式

満生 憲親

五十八年度卒

店鋪 福岡市舞松原一・八・一・一〇二

☎〇九二・六七三・二二七三

自宅 粕屋郡新宮町下府野入

二二六・一・三〇三
☎〇九二・九八三・二八六二

- 情報秘書科セクレタリーコース 2カ年
- 情報秘書科コンピュータコース 2カ年
- 医療秘書科 2カ年
- 国際秘書科 2カ年
- 情報ビジネス科 1カ年
- ユニバーサル科 (短大卒)6カ月



学校法人 佐藤ビジネス専門学校

●校職本社群●学業完備●610 福岡市中央区天神2丁目4番10号 ☎(092)771-8261

書心会規約



福岡大学書心会

規約

第一章 総則

第一条 本会は福岡大学書道部書心会と称する。

第二条 本会は事務局（本部）を福岡大学書道部に置く。

第三条 本会は支部を置くことができる。

第二章 目的及び事業

第四条 本会は会員相互の親睦を図り、書道文化の普及、向上に努めると共に福岡大学書道部の後援を行ない、もって書道に貢献する事を目的とする。

第五条 本会は前条目的達成の為次の事業を行なう。

- 一、書道の振興に関する事業
- 一、書道に関する研究物、機関誌等の刊行
- 一、関係諸団体との親睦及び連絡提携
- 一、各種展示会出品
- 一、その他前条目的達成の為必要と認めた事業

第三章 組織

第六条 本会正会員は福岡大学書道部員として登録をなし卒業をした者をもって構成する。但し強制するものではない。

第七条 本会に総会、評議委員会、および事務局をおく。

第四章 役員

第八条 本会は次の各号の役員を置く。

- 一、会長（一名）
- 一、副会長（若干名）
- 一、評議委員長（一名）
- 一、副評議委員長（三名）
- 一、評議委員（原則として各代一名とする）
- 一、事務局長（一名）
- 一、事務局次長（一名）
- 一、事務局委員（若干名）
- 一、会計監査委員（一名）

第五章 役員の職務

第九条 本会の役員は次の職務を行なう。
一、会長は本会を統括し、且つこれを代表する。

一、副会長は会長を補佐し、会長に事故ある時は、その職務を代行する。
一、評議委員長は、評議委員会を統括し、且

つこれを代表する。

一、副評議委員長は、評議委員長を補佐し、評議委員長に事故ある時はその職務を代行する。

一、評議委員は本会の運営、重要事項の審議および決議にあたる。

一、事務局長は、事務局を統括し、且つこれを代表する。

一、事務局次長は、事務局長を補佐し、事務局長に事故あるときは、その職務を代行する。

一、事務局員は、本会の企画、立案にあたる。
一、会計監査委員は、本会の会計監査にあたる。

第十条 役員の任期は二年間とし、定例総会において選考するものとする。

第六章 総会

第十一条 総会は本会の最高決議機関である。

第十二条 書心会総会は会員をもって構成する。

第十三条 本会総会は次の各号の場合、書心会会長がこれを召集する。

- 一、定例総会（年一回）
- 一、会長が特に必要と認めた場合
- 一、評議委員会が必要と認めた場合

第十四条 本会総会は出席会員をもって成立する。

第十五条 本会決議は出席会員の過半数を必

要とし、同数の場合は議長がこれを決定する。
第十六条 本会総会議長は書心会会長がこれにあたる。

第七章 評議委員会

第十七条 本会の審議および決議機関として本委員会を置く。

第十八条 評議委員会は評議委員、事務局局長および事務局次長をもって構成する。

第十九条 評議委員会は次の各号の場合、評議委員長がこれを召集する。

一、会長が必要と認めた場合

二、評議委員長が必要と認めた場合

第二十条 評議委員会の成立、並びに議決は書心会総会に準ずる。

第二十一条 評議委員長は評議委員長がこれにあたる。

第八章 事務局、会計

第二十二条 本会の執行機関として、本事務局を置く。

第二十三条 事務局内に事務室を置き、書道部役員より、事務室長を選任する。

第二十四条 本会の会計年度は毎年一月一日より始まり、十二月三十一日に終わる。

第二十五条 本会会費は総会において決定する。

第二十六条 会計は監査を受け、総会におい

てその年度の会計報告を行なう。

第二十七条 会員は本会運営費用として毎年三月三十一日までに会費納入の義務を負う。

第九章 入会及び退会

第二十八条 入会については、第十七条に該当するもので且つ、本人の申し出によるものとする。

第二十九条 本会をやむをえぬ事情の為、退会する場合は書面をもってすみやかに申し出ること。

第三十条 本会を退会し、再入会の申し出があった場合、評議委員会の承認を得たものについて入会を認めることがある。

第三十一条 本会で本会の名誉を毀損し、また会員としての体面を汚し、もしくは不都合な行為があった場合、総会の決議により退会を命ずる。

第三十二条 二年間会費を滞納したものに於ては退会を命ずる。

第十章 規約改正

第三十三条 本会規約の改正は評議委員会の審議を経て総会出席者の三分の二以上の賛成を得なければならない。

第十一章 附則

第三十四条 本規約は、昭和五十九年一月十六日から施行する。

書道部規約

福岡大学学術文化部会書道部

規 約

第一章 名称及び目的

第一条 本部は福岡大学学術文化部会書道部と称し、本学学生による書道愛好者の団体である。

第二条 本部は部員相互の親睦融和をはかり、人間形成を目指すと共に書道文化の普及書技の向上を目的とする。

第三条 本部は前条目的を達成するために次の事業を行なう。

一、書道に関する事業

一、書道に関する調査並びに機関誌などの刊行

一、関係団体との親睦ならびに連絡提携

一、各種展示会出品

一、その他前条目的達成のため必要と認めたる事業

第二章 組織

第四条 本部は講師及び部長各一名を置く。

第五条 本部は幹事、副幹事、会計、企画、庶務、渉外、その他必要とする役職を置き、本部を代表する。

第六条 本部は次の機関を置く。

一、役員会

一、部員総会

一、OB会、但しOB会規約は別に定める。

第三章 役員会

第七条 役員会とは、部の円滑なる運営を期するための機関である。

第八条 本会は原則として、第五条に基づく役員によって構成される。但し、第五条に基づく役員以外であっても幹事が認められた場合には、本会に出席することが出来るが議決権はないものとする。

第九条 本会は幹事によって召集され代表される。

第十条 本会は毎月一回開くことを原則とする。

第十一条 本会の議決は部員総会の決定を妨げるものではない。

第四章 部員総会

第十二条 本会は本部の最高議決機関である。

第十三条 本会は本部の部員によりこれを構成する。

第十四条 本会は必要に応じこれを開き、幹事がこれを兼務する。

第十五条 本会の議長は原則として、幹事がこれを兼務する。

第十六条

一、本部会は部員の過半数をもって成立する。

一、本部会の議決は出席者の過半数の賛成を必要とし、可否同数の場合、幹事がこれを決定する。但し、出席者の過半数の賛成で重要事項とし、その決定には出席者の三分の二以上の賛成を必要とする。

第十七条 本部会不成立の際、出席者の三分の二以上の賛成をもって仮議決することができる。但し、

一、仮議決については事後部員総会に於いて過半数の承認を必要とする。

一、重要事項は仮議決することはできない。

第五章 役員

第十八条 役員構成は第五条に同じ。

第十九条 第三条に基づき、外部関係諸団体へ役員を派遣することができる。

第二十条 幹事は本部を代表し、副幹事は幹事を補佐し、幹事に支障ある時はその職務を代行する。

第二十一条 本部の役員改選は選挙制にし、これを重要事項と認め部員の無記名投票による選挙を行なう。但し、委任状は認めるが、委任の方法は年度によって異なっても良いものとする。

第二十二条 本部の役員の任期は四月一日より翌年三月三十一日までとする。但し、役員会選後、翌年三月三十一日まで代行期間とし、その責任は新旧役員の間で連帯責任とする。

尚、欠員が生じた場合これを補充する。
第二十三条 役員改選は原則として十月に行なう。

第六章 役員の職務

第二十四条 役員の職務は次の通りである。
一、幹事は部務を処理し、部を統括する。
又、部の代表責任者であり、その責任を学術文化部会と部全体に負う。
一、副幹事は幹事を補佐し、幹事に支障ある時はその任務を代行する。

一、会計は部費徴収並びに部費予算に関する収支の記録決算書を作成。

一、企画は第一章第二条に定められた本部の目的にそつて諸活動を企画する。

一、庶務は本部の活動に必要な諸事務を行ない、資料の収集保管をなし、機関誌の発行を行なう。但し、機関誌の発行は年一回とする。
一、第五章第十九条に基く役員は、本部関係諸団体との親睦融和を図り部の向上を目指す。

第七章 会計

第二十五条 本部の会計年度は四月一日より翌年三月三十一日までとする。

第二十六条 本部の部費及びその他の所定納入金については、前年度末に部会に於いて決定しなければならない。

第二十七条 会計報告は会計が行なう。又、部員の要求に応じて会計簿を公開し、年一回決算報告を作成し、これを報告する。

第八章 部員の権利義務

第二十八条 本部の部員は次の権利を有する。
一、本部のあらゆる活動に参加し、人間形成の場として利用すること。

一、本部の部員総会に出席し、その議決に参加すること。
一、本部に於ける選挙権、被選挙権を有する。
一、本部の備品及び図書を利用すること。

第二十九条 本部の部員は次の義務を負う。
一、部員は部員総会に出席すること。但し、やむなく欠席する者は事前に欠席届を幹事に提出しなければならない。

一、部員は部員は部費その他の所定納入金を定期に納入すること。
一、本部の規約に従うこと。

第九章 入部、退部

第三十条 本部の入部は年度始め募集することを原則とし、学文会登録及び入部金納入をもって部員とする。本部の退部は書面をもって幹事に願ひ出て、役員会の承認を得、部員に通達する。但し、退部を希望する者は、その在籍期間までの所定の納入金を完納すること。

と。

第十章 罰則

第三十二条 書道を研究する熱意なく本部の名譽を汚したる者、部活動を理由なくして一ヶ月以上怠った者。又、部の秩序を乱す者は部より除名する。但し、欠席届出者についてはこの限りではない。

第十一章 規約改正

第三十三条 本部規約改正の発議は部員総会に於いて部員の四分の一の同意により総会の議決を経て行なわれる。尚、改正においては、本部員の三分の二以上の出席を必要としその出席者の三分の二以上の賛成を必要とする。

附則

附一、本規約は、昭和三十五年より実施、昭和四十五年四月一日改正。